



北大構内の遺跡

昭和59年度

1987

5

北大構内の遺跡

昭和59年度

5

序

北海道大学構内において実施されている埋蔵文化財調査に関する報告書第5号をここに御届けすることのできましたことは、実に喜ばしいことです。

昭和55年以来、各種の工事に先立って行なわれた埋蔵文化財の調査活動は、キャンパスの地下に眠っていた古代遺跡の存在を次々と明らかにしてきました。今回の報告書もその一連の活動の成果であります。報告の中心となっている遺跡は、奇しくも北海道大学のシンボルの一つとして知られているポプラ並木の一隅から発掘されたものです。そのうえ、ここは、いままでに構内から発見されたどの遺跡よりも古く、西暦5世紀初頭にまでさかのぼるものだといわれています。遺跡の性格も、集落ではなく墓地であります。埋葬された人骨こそ酸性土壌にわざわざされて確認できなかったそうですが、墓に副葬されていた数個のブルーのガラス玉や800個にちかい滑石製の小玉は、遠い古代の人々の情感を、じかに我々の胸に伝えてくるかの様であります。墓地から発見された土器は、文様や形態からみて、かつて農学部先輩達によって北大式土器と命名され、学界でひろく使用されていたものと同一であるといわれます。だが、残念なことに、この重要な土器群が北海道大学構内の何処から発掘されたものであったのか、詳細な地点や文化の性格がやや曖昧でありました。それが今回の調査で、一部とはいえ確認できたことは、まことに喜ばしいことです。何故なら、時代を決定する為の最初の手がかりとされる土器型式に、大学の名がつけられているのは、日本広しといえども他に例がないからです。そうした意味においても、この遺跡の調査は、北大として記念すべき発掘といえるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、この遺跡に埋葬されていた古代人の冥福をお祈りして筆をおきます。

昭和62年 3月25日

北海道大学長

有江幹男

目次

序	3
例言	7

第Ⅰ章 昭和59年度の事業報告	9
Ⅰ-1 調査及び保存事業の実施	9
Ⅰ-2 中講堂建設予定地区の調査	10

第Ⅱ章 ポプラ並木東地区遺跡の調査	15
Ⅱ-1 調査に至る経緯	15
Ⅱ-2 遺跡の概要	16
Ⅱ-3 遺跡の調査	18
1 位置	18
2 発掘区と周辺の地形	18
3 グリッドの設定と遺構・遺物の実測・ 取り上げ法	18
Ⅱ-4 遺跡の層序	22
Ⅱ-5 遺構とブロック	22
1 土壇墓	22
2 小ピット	45
3 焼 土	45
4 ブロック	47
Ⅱ-6 出土遺物	55
1 土器	55
2 石器・礫	74
3 装身具, その他	92
Ⅱ-7 考 察	97

《第Ⅰ章図版》

第1図 学生部野球場新設予定地の調査	9
第2図 中講堂建設予定地区の調査区域	10
第3図 中講堂建設予定地区の近景	11
第4図 中講堂建設予定地区の小竪穴	13

《第Ⅱ章目次》

第1図 ポプラ並木東地区遺跡の位置	17
第2図 北大構内図	19
第3図 ポプラ並木東地区遺跡とその周辺	20
第4図 遺構配置と土層断面	21
第5図 ポプラ並木東地区遺跡の近景	23
第6図 ポプラ並木東地区遺跡の発掘	24
第7図 1号墓と遺物出土状況	25
第8図 完掘後の1号墓	26
第9図 2号墓, 4号墓, 6号墓と遺物の出土状況	29
第10図 完掘後の2号墓・4号墓・6号墓	30
第11図 3号墓と遺物の出土状況	31
第12図 3号墓出土の滑石製平玉平面分布状況	32
第13図 3号墓	33
第14図 3号墓	34
第15図 5号墓, 7号墓と遺物の出土状況	37
第16図 5号墓と7号墓	38
第17図 墓別出土遺物の組成比	41
第18図 墓別遺物包含比	43
第19図 墓の部位別にみた剝片・碎片数推移	43
第20図 墓における剝片・碎片の散布状況	44
第21図 3号墓、5号墓の部位別滑石製平玉の 出土数推移	44
第22図 ブロック別にみた遺物組成	48
第23図 ブロック間の相互関係	52
第24図 性格別にみたブロックの配置	54

第25図	土器個体番号1の破片分布	58
第26図	土器個体番号2, 3, 4, 5の破片分布	59
第27図	土器個体番号6, 7, 8の破片分布	60
第28図	土器個体番号9(上)と10(下)の破片分布	61
第29図	土器個体番号11の破片分布	62
第30図	土器の破片分布	63
第31図	帰属不明土器破片の分布	64
第32図	出土土器	65
第33図	出土土器	66
第34図	出土土器の拓影	72
第35図	器種別にみた土器の構成	72
第36図	スクレイパーの破損	74
第37図	スクレイパーにみられる素材利用	74
第38図	石器・石核・荒割り礫・原石の分布	75
第39図	石器・石核	76
第40図	スクレイパー長幅関係	77
第41図	剥片石器, 石核の自然面	77
第42図	剥片・碎片の分布	78
第43図	墓およびブロック別にみた剥片・ 碎片の大きさの比較	79
第44図	石核	80
第45図	剥片石器の組成比	80
第46図	礫器・礫の組成	82
第47図	礫器・礫の平面分布と接合関係	83
第48図	礫器・礫の垂直分布と接合関係	84
第49図	分割礫の重量分布	86
第50図	分割礫の割取り法	86
第51図	礫ブロック別組成比	89
第52図	琥珀, 有孔礫, 瑪瑙, その他の分布	94
第53図	玉類	95
第54図	3号墓出土の滑石製平玉	96
第55図	墓とブロックの形成過程	98

〈表目次〉

表1	1号墓出土遺物	27
表2	2号墓出土遺物	28
表3	3号墓出土遺物	35
表4	4号墓出土遺物	35
表5	5号墓出土遺物	36
表6	6号墓出土遺物	39
表7	7号墓出土遺物	40
表8	ブロックの属性	46
表9	類型別にみたブロックの配置	50
表10	ブロック間の相互関係	51
表11	墓・ブロック・遺構外別出土遺物数量	56
表12	出土土器	70
表13	個体別にみた土器の共伴関係	71
表14	個体別土器破片の散布状況	72
表15	器種別にみた土器の共伴関係	72
表16	器種, 部位別にみた文様	73
表17	剥片・碎片の大きさ別数量	79
表18	剥片石器類の属性	81
表19	礫の属性	82
表20	分割礫の属性	85
表21	礫器・礫接合資料の散布状況	88
表22	墓出土の礫器・礫属性	89
表23	礫ブロックの属性	90
表24	ガラス玉の属性	92
表25	滑石製平玉の計測値	93
表26	墓とブロックの対応関係	97

例言

○ 本書は、北海道大学構内における昭和59年埋蔵文化財調査の概要であり、第Ⅰ章 昭和59年度の事業報告と第Ⅱ章 ポプラ並木東地区遺跡の調査からなる。

○ 本書の執筆は、北海道大学埋蔵文化財調査プロジェクトチームの討論を経て、横山英介が行った。

○ 本書の遺物実測原図のうち、土器は高橋立史、中沢一哉が行った。また、土器の拓影（挿図8）は加藤直子が作成した。

○ 本書の遺物写真の撮影のうち、滑石製平玉（第34図）は平川泰彦が行った。

○ 滑石製平玉の石質同定は、本学理学部地質学鉱物学科岩石学講座教授・勝井義雄氏によるものである。同教授に厚くお礼を申し上げる次第である。

○ 滑石製平玉の計測表（表25）は、椿坂恭代が作成した。

第 I 章 昭和59年度事業報告

I-1 調査及び保存事業の実施

(1) 昭和59年度に本調査を行った地区は、以下に記す2箇所であり、詳細はI-2およびIIに示す通りである。

- ① 中講堂建設予定地区
- ② ポプラ並木東地区（札幌団地給水基幹整備）

(2) 昭和59年度に予備調査を行った地区は、以下に記す2箇所である。

③ 学生部野球場新設予定地（第1図）

- ▶予備調査期日／6月18日～7月17日
- ▶面積／ 8,448m²
- ▶方法・所見／ 全域に4×4mのグリッドを設定（528個）、そのうち各グリッドの角1×1mの試掘溝を人手によって開掘（合計352個）、遺構、遺物の有無を確かめた。その結果、当地区の約9割が湿地であり、遺構、遺物は全く検出されなかった。

④言語文化部建設予定地

- ▶予備調査期日／10月11日～10月15日
- ▶面積840m²

▶方法・所見まず重機で置土や路床材を排除、その後人手による精査を行ない、遺構、遺物の有無を確かめた。その結果、黒色土中より擦文時代の土器片、黒曜石製剥片などを検出した。この時点で本地域は、擦文時代の遺跡であることがわかったので本調査を来年度に行なうこととし、予備調査を終了した。

(3) 昭和59年度に工事中立会を行った地区は、以下に記す13箇所である。

- ① 農学部附属農場（北24条以北）困障取設工事現場 5月29日・30日
- ② 工学部受水槽工建現場 7月13日
- ③ 工学部前庭植樹現場 8月20日
- ④ 旧恵迪跡地照明灯建設現場 8月22日
- ⑤ 医学部薬品庫建設現場 8月28日
- ⑥ 薬学部附属薬草園温室建設現場 9月14日
- ⑦ 農学部附属演習林工事現場 9月25日
- ⑧ 教養部、獣医学部間電気ケーブル埋設工事現場 10月27日
- ⑨ 中央食堂、工学部間電気ケーブル埋設工事現場 10月27日
- ⑩ 医学部給水管埋設工事現場 11月27日
- ⑪ 工学部給水管埋設工事現場 11月27日

第1図 学生部野球場新設予定地の調査



⑫ 医学部付属病院給水管埋設工事現場 11月27日

⑬ 農学部薬品庫建設現場 11月27日

以上の工事現場は、舗装材や置土、あるいは旧建物の基礎工事ですでに破壊が著しいところや地層の保存状態が良好でも遺構、遺物が検出されなかったところである。

I-2 中講堂建設予定地区の調査

1 調査の概要

前年度の予備調査では、擦文時代の土器片22点、黒曜石製石器・剥片11点と遺構と思われる黑色土のひろがり数が数箇所確認されていた（吉崎編 1985）。それをふまえて、以下の要領で本調査が実施された。

遺跡所在地／札幌市北区北8条西5丁目（北海道大学 札幌 43°04' N, 141°20' E）

調査主体／ 北海道大学

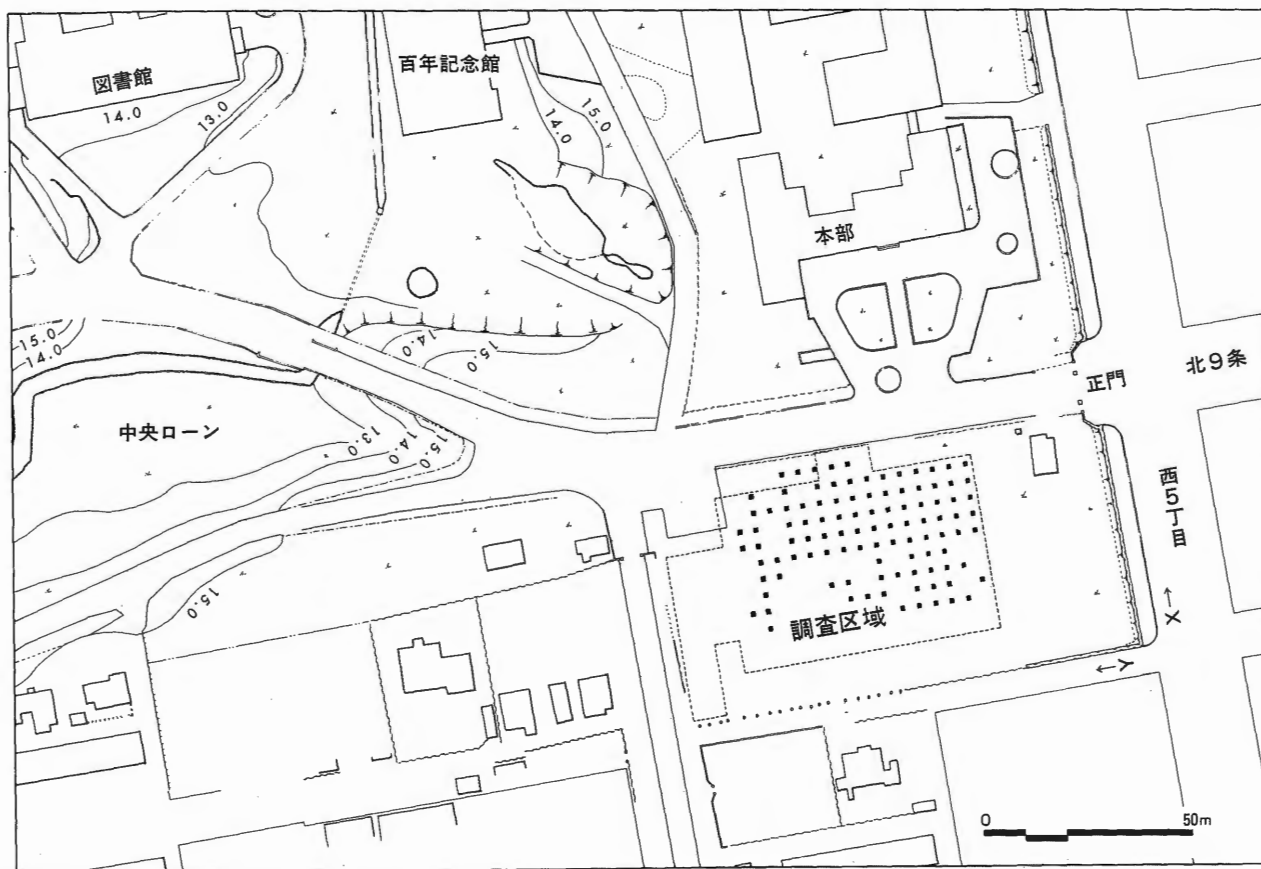
調査機関／ 北海道大学埋蔵文化財調査室

調査期間／ 昭和59年5月7日～6月16日

発掘調査面積／1,560m²

調査員／ 横山英介（調査担当者）・松岡達郎

第2図 中講堂建設予定地区の調査区域



第3図 中講堂建設予定地区の近景



1 遺跡を南からみる。左上には大学本部、
右側には正門がみえる。



2 遺跡を北からみる。手前では発掘、向う
側ではグリッドの杭打ちをしている。

2 発掘区とその状況

発掘調査地点の位置は、本学本部の南側（第2図及）で平坦地（標高15.0m）である。

調査に際して、調査区のもっとも南東隅に原点（X Y = 00-00）を設定、それを起点に4 m × 4 m グリッドを設定した（第2図）。それによると、Xは13まで、Yは17まで設定された。

地層は、もっとも上が積土（厚さ20～30cm）、以下黒色土（約20cm）、褐色土となり、遺物は黒色土中に含まれていた。また、遺構は褐色粘土中に掘り込まれていた。

3 遺構と遺物

遺構 発掘区域のもっとも北西の隅（12-13, 11-14グリッド）で小竪穴が2基検出された（第4図）。

1号（12-13グリッド）は、長径2.4m、短径1.9mの長方形で、長軸方向はN-22°-Eである。柱穴やカマドなどの付設遺構はない（第4図-1・2）。床面からの出土遺物は検出されていない。

2号（11-14グリッド）は、東西約1.5mと南北20cm～50cmしか残存していなかった（第4図-3）。出土遺物はない。

1号と2号の距離は、約2mである。

遺物 種類は擦文時代の土器片が668点と黒曜石製剥片類が206点で、いずれも1号小竪穴埋土およびその周辺部から出土した。

4 まとめ

当地区は、北西部分に限って小遺構と遺物が出土した。したがって、未発掘のサクシュコトニ川沿に同様な遺構が分布している可能性がある。

遺構はその機能・性能まで把握できなかったが、住居の可能性も考えられる。

遺物は、土器の諸特徴から判断して「北大Ⅲ式土器」である。したがって、もし小竪穴に伴出するとしたなら、擦文時代前期ということになる。しかし、土器はきわめて小破片のため現在復元中であり、図、写真など別に示すことにする。

第4図 中講堂建設予定地区の小竪穴



1 1号竪穴の実測(南からみる)



2 1号竪穴完掘(南からみる)



3 2号竪穴、手前側は後世の講で
削除されている(南からみる)

第Ⅱ章 ポプラ並木東地区遺跡の調査

Ⅱ-1 調査に至る経緯

予備調査

1983年（昭和58年）10月3日から11月25日まで予備調査を実施した（吉崎編 1985, pp. 8～10）。

予備調査は、学内給水基幹整備の一環として当地区を縦貫する給水管埋設工事計画が立案されたのを受け、当地区内に埋蔵文化財が検出されるか否か確かめることを当初の目的とした。

調査は、給水管埋設路線上およびその周辺に人手によるトレンチやテストピットを掘削することによって実施した（吉崎編 1985, p. 9）。

その結果、調査区南東部分を中心に、縄文期の土器片、石器、剥片などが多量に表面採集された。又同時にテストピットやトレンチの黒色土（第Ⅲ層にあたる、2-4参照）中からも同時期の土器片、石器などの遺物が出土した。また、トレンチ内に土壌と思われる黒色土の堆積が1箇所（後に1号墓となる、pp. 22～27参照）みられた。

このように、当地区は縄文期の遺跡であることが確かめられたわけであるが、給水管埋設にあたっては、その工法上大幅な変更ができないため、トレンチ内において処理することが遺跡の破壊を最小限度にいくとめることができるものと判断された。そして、本調査にあたっ

ては、給水管埋設区域と予備調査にもとづく範囲をふくめ発掘し、遺跡の性格などを理解することにした。

本調査

本調査は以下に記す要領でおこなった。

遺跡所在地／札幌市北区北11条西8丁目（北海道大学札幌団地）

本調査主体／北海道大学

本調査期間／昭和59年（1984年）7月19日～9月6日（延べ42日間）

発掘調査面積／249㎡

調査組織

この調査は、埋蔵文化財調査プロジェクトチームが主管し、埋蔵文化財調査室が発掘を行った。

埋蔵文化財調査プロジェクトチームおよび調査室のメンバーは下記のとおりである。

吉崎昌一（調査プロジェクト責任者）、岡田宏明、岡田淳子、林謙作、菊池俊彦、横山英介（発掘調査担当者）、椿坂恭代

遺物の所在・保管

この遺跡から出土した総数7,143点の遺物は、北海道大学内の埋蔵文化財調査室に展示・保管されている。

北海道大学埋蔵文化財調査プロジェクト・チーム

吉崎昌一（調査プロジェクト責任者）、岡田宏明、岡田

淳子, 林謙作, 菊池俊彦, 横山英介(発掘調査担当者),
椿坂恭代

発掘調査および整理作業参加者(参加名簿順)

三崎かおる, 平川泰彦, 高橋立史, 平山恵子, 荒木ミヤ子, 中沢一哉, 布施勝繁, 山本一郎, 越湖梅子, 高木理

謝辞

発掘調査から整理作業・本書の出版にいたるまでつぎに記す諸氏と諸機関の御協力をえた。

藤沼邦彦, 伊東信雄, 勝井義雄, 木村英明, 北沢実, 小井川和夫, 興野義一, 丹羽茂, 大沼忠春, 佐藤訓敏, 進藤秋輝, 須藤隆の諸氏(アルファベット順)ならびに札幌市教育委員会埋蔵文化財調査室, 文化庁記念物課, 北海道教育委員会文化課, 旭川市立郷土博物館等の諸機関。

Ⅱ- 2 遺跡の概要

ポプラ並木東地区遺跡は, 北海道札幌市北区北11西 8 丁目(北海道大学札幌団地)に所在する(第 1 図, $43^{\circ}04' N$, $141^{\circ}20' E$)。

札幌の市街地を形成している豊平川扇状地は, 南から北へかけてゆるやかにひろがり, 北大構内の付近でさらに緩斜面を有する三角州のような低湿地状の堆積地形に続いている(清水 1983)。この末端部にそって 2 本の河川が流路を刻んでおり, そのひとつが現在も構内を蛇行しながら北西へと流れているサクシュコトニ川である。構内にはこの 2 本の河川に沿って数多くの古代遺跡が分布しており(第 2 図), 1980 年からそのうちのいくつかについて発掘調査が行なわれている(吉崎・岡田編 1981, 1983, 1984, 吉崎編 1985, 北海道大学埋蔵文化財調査室編 1986)。

発掘調査や遺物散布地の調査の結果, 大部分の遺跡は擦文時代の所産であることが判明しており, それが構内における古代遺跡の特徴のひとつともみられている。

しかし, 今回報告するポプラ並木東地区遺跡は縄文時代に営まれたもので, 構内でこれまでに調査されたもののうちもっとも古い時期の遺跡となった。

このように最近までは縄文文期の遺跡調査は皆無に等しかったが, 第 2 次世界大戦前後の調査では, 北海道考古学界にとっても重要な資料が, この北大構内を舞台に収集されていたのである。当時, 本学に奉職していた名取武光, 河野広道らの構内における発掘調査がそれにあたる。とくに, 河野は構内の農学部附属農場のうち「ポプラ街道」から発掘した, 今回報告する土器とよく似た

第1図 ポプラ並木東地区遺跡の位置(●印)



特徴をもつ土器群に「北大式」と命名（河野 1959），これは続縄文期の後半から擦文時代の開始にかけての時期を埋める資料として欠かせない存在となっている。

地域的にみても今回報告するポプラ並木東地区遺跡は，河野がかつて発掘調査を行なった「標準遺跡」と密接な関連があるかと思われる。しかし，今回の発掘区のなかに河野が発掘したと思われる個所の痕跡が認められなかったことと，河野の発掘品のなかに今回の土器と同じ特徴を有するものがみられないことから判断するなら，今回の調査において「北大式の標準遺跡」の存在を確認するにはいたらなかった，といえよう。

しかし，いずれにせよ河野らによって続縄文期末の標準的資料とされ，広く学界に知られているのと近似の資料が，約四半世紀後に遺構を伴って確かめられたことになる。構内にはそのほか，「北大式」土器を出土する遺跡がこのポプラ並木の周辺を含め4～5個所で知られている（第2図②，③，⑦，⑧，⑨）。

Ⅱ- 3 遺跡の調査

1 位置

北海道大学構内（以後「構内」と略称）の中央道路と北13条通りの交差点より約200m南進すると，右側にポプラ並木へ向う道路がある。その道路を約200m進んだ右手に農学部附属実験農場がある。ポプラ並木東地区遺跡は，そのうちとくにポプラ並木の東側で，理学部地球物理学研究棟までの間の農学部附属実験農場畑地一帯をいう（第2図）。

2 発掘区と周辺の地形

遺跡は，標高約14mで，その北東側をいまでも構内を流れるサクシュコトニ川に面した微高地上に営まれている（第3図）。

この遺跡の北側約100mの畑地には擦文時代の遺跡がみつまっている。さらに，サクシュコトニ川の両岸沿いには，続縄文期や擦文時代の遺跡が30箇所程確認されている（第2図および，北海道大学埋蔵文化財調査室編 1981，pp.15～16）。

3 グリッドの設定と遺構・遺物の実測・取り上げ法

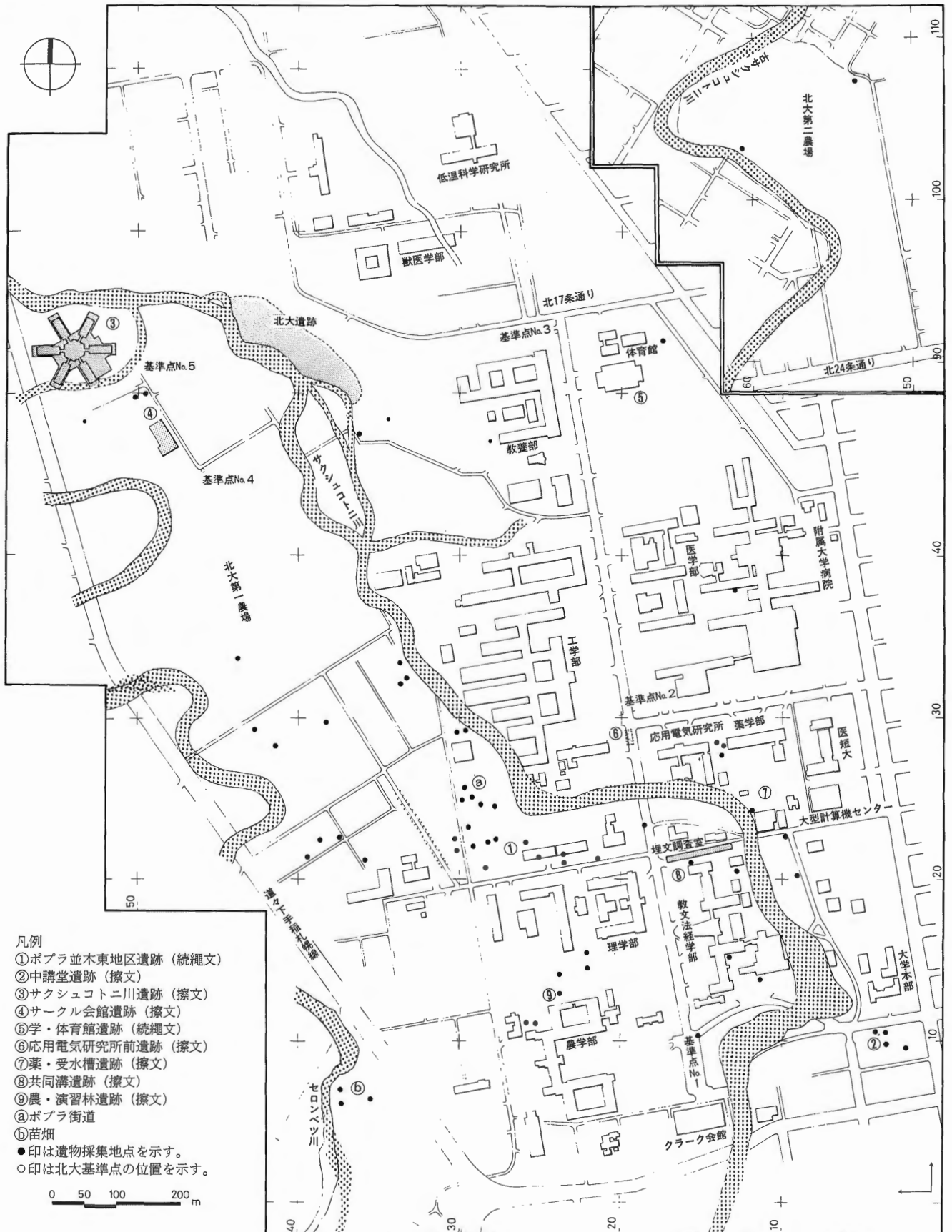
まず，構内基準点№2から№1（第2図）を指準し，№2から223.0mの点で西へ90度ふり，そこから215.0m行った点を調査区域の原点とし相対座標を組んだ（第2図）。

調査用のグリッドは，4m×4mの方形区を単位とした（第3図）。4m×4mの大グリッドをさらに1m×1mの小区画に分割し，小グリッドとした。

グリッドの呼称は、そのグリッドの原点寄りの角の位置をもとに付けることとした。つまり大グリッドでは4

m単位のX座標の数値とY座標の数値を組み合わせた「X-Y」の二桁数字で呼称した。また、小グリッドの

第2図 北大構内図

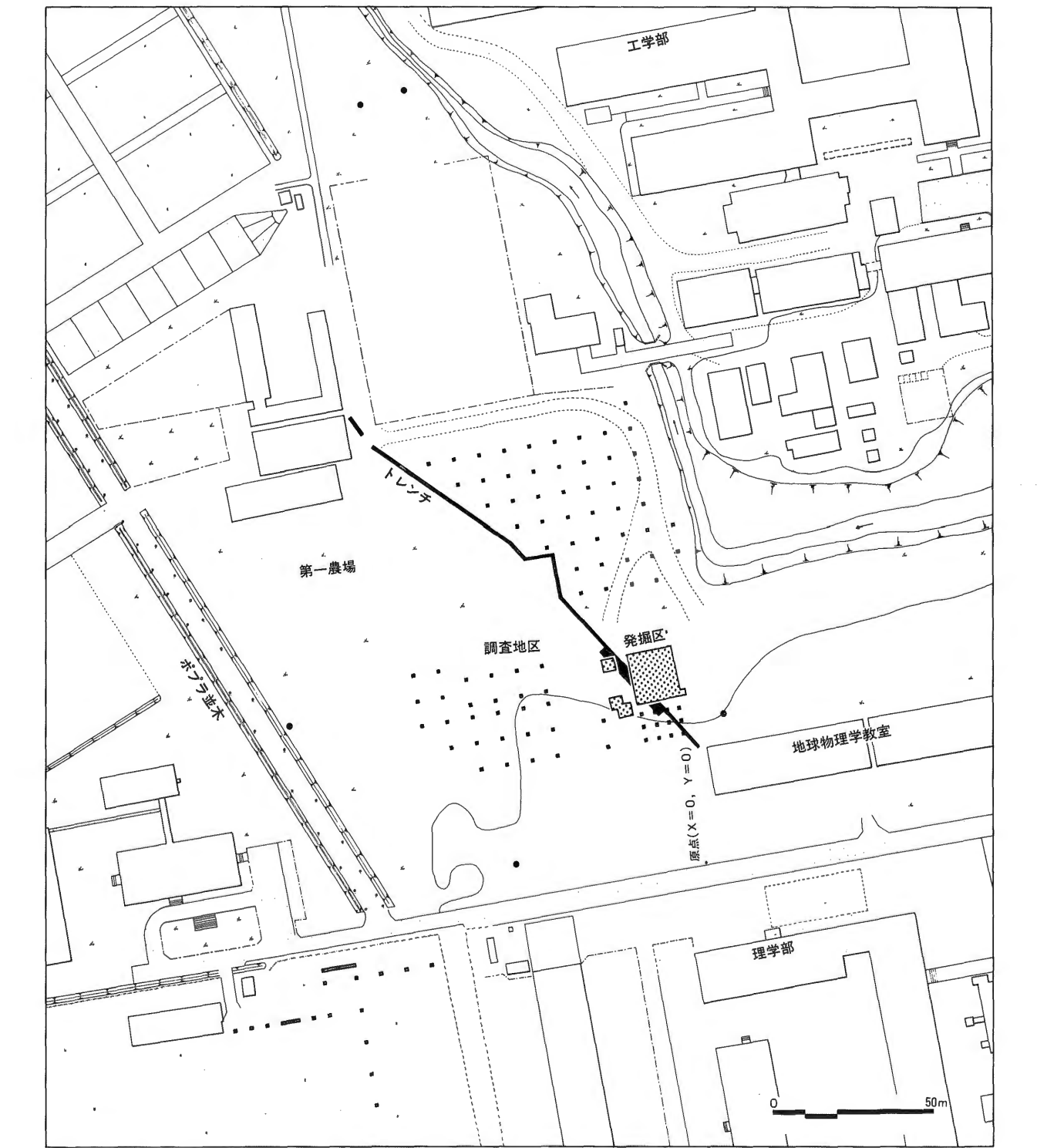


呼称も基本的には大グリッドと同様で1 m単位のx座標とy座標を組み合わせた「x y」の数字で表示した(第4図)。

このような表示方法によれば、調査区域での遺構、遺物の位置表示や小グリッドの呼称は、大グリッド名と小グリッド名の組み合わせ、「X-Y [x y]」として表示することができる。

遺構の平面実測や遺物の出土位置の実測は、大グリッドを区画する測量杭間を1 m単位に小区分し、それを水系によって結ぶ簡易遣り方によって行なった。とくに、出土遺物は全点実測を基本とし、小グリッド内におけるx yの距離をcm単位で示すこととした。つまり、遺物台帖には遺物番号、日付け、地層のほか、その遺物の位置する大グリッド名と小グリッド名、小グリッド内でのx

第3図 ポプラ並木東地区遺跡とその周辺

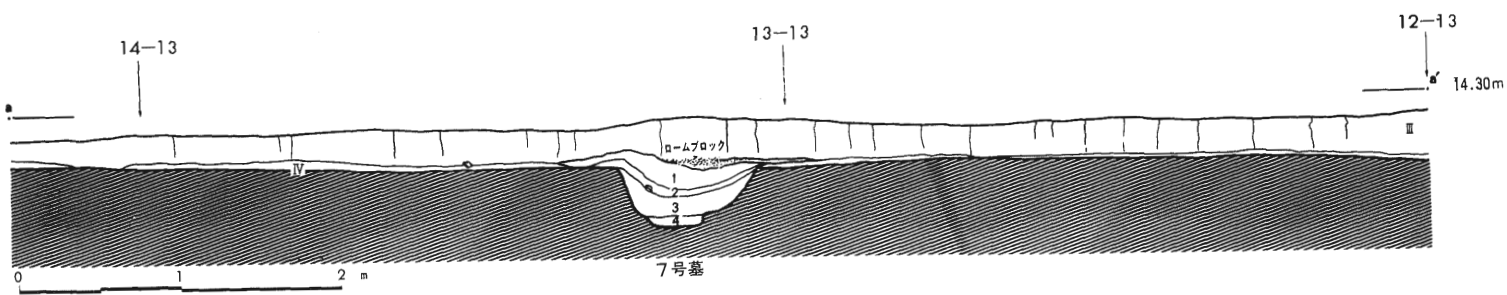
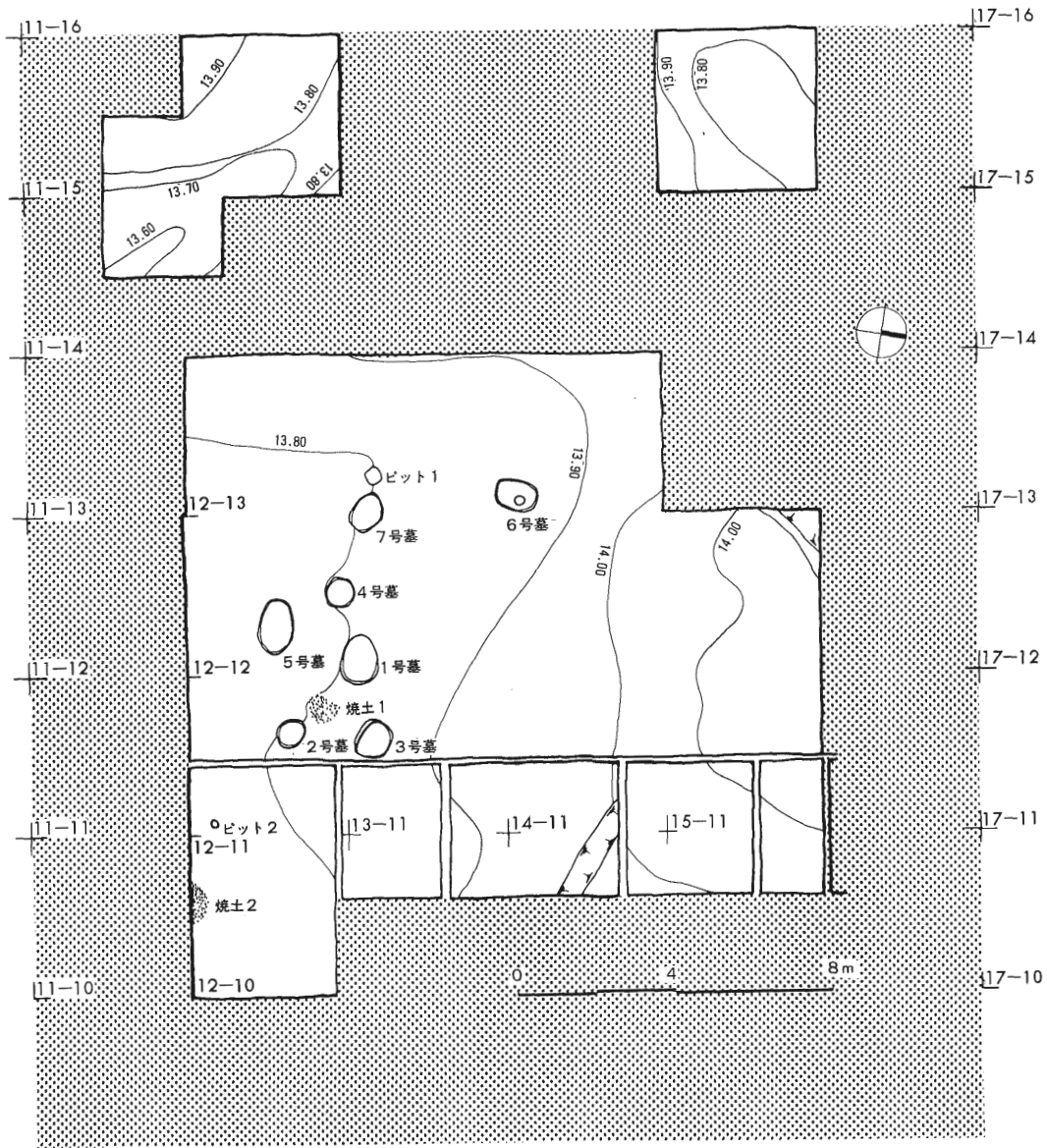


凡例 調査区内の小区画はテストビット、黒丸は遺物採集地点を示す。

軸、Y軸のそれぞれの数値が記入されることになる。
遺跡内での水準測量は、「北大基準点No.2」（標高

14.539m）から調査区内に14.890mのベンチマークを引用・設定し、これを基準として1cm単位で値を求めた。

第4図 遺構配置と土層断面



Ⅱ- 4 遺跡の層序

ポプラ並木東地区遺跡の層序は、12-13 (00) グリッドから14-13 (00) グリッドにかけてみられる西壁面の標準的土層堆積をもとに示す(第4図)。

遺構に関する土層堆積は、それぞれの遺構の説明(5-1)で詳細に述べるのでここでは示さない。

層序区分と特徴

第Ⅰ層・第Ⅱ層：第Ⅰ層として区分したのはこの畑地の客土である。また、畑地として利用する以前は北海道大学の初期の頃の建造物が存在しており、第Ⅱ層として区分したのはその頃の整地層である。

第Ⅲ層：黒色土層。10cm～20cmの層厚でほぼ平坦に堆積している。上部から続縄文土器片や石器などの遺物が出土し、下部で量も多くなる。この土層は、乾燥すると縦に亀裂が入る。

第Ⅳ層：褐色土層。1cm～5cmの厚さを示す。第Ⅲ層と同様に続縄文期の遺物が出土する。墓などの遺構は、この土層の上面で確認された。

第Ⅴ層：黄色の砂質粘土層。遺物は出土しない。墓などの遺構は、この土層を掘り込んでつくられている。

このように、ポプラ並木東地区遺跡では第Ⅲ層下部から第Ⅳ層上面にかけて遺物がまとまりをもって出土した。発見された遺物の特徴は続縄文期のもので、他に異なった時代・時期の所産を示す遺物類はみられなかった。

Ⅱ- 5 遺構とブロック

遺構の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構の種類と員数はつぎのとおりである。

土墳墓——7基

小ピット——2個

火焚場——2箇所

以下、各遺構別に説明することにする。

1 土墳墓

(1) 配置と名称

7基の土墳墓は、標高13.9mの微高地上に、もっとも近いもので0.7m、もっとも離れたもので2.6mの間隔を保って配置されている。これらは、北西から南東に長軸をもつ楕円形(約9m×5m)のなかにまとまってみられ、いわゆる“墓群”を形成している。

土墳墓の名称は、発掘調査が行われた順に1号から7号まで付された(第4図)。

(2) 土墳墓の様相

1 1号墓(第7図、第8図)

位置：12-11(33)、12-12(30)、13-11(03)、13-12(00)の4グリッドにまたがっている。そこは、標高13.8mの微高地で北側に平坦地が続く。また、東側約0.7mに3号墓と焼土1、西側約1.5mに4号墓、南側約1.4mに5号墓が配置されている。

土層堆積と遺構の確認面：土層観察用ベルトa-a'でみると、この墓の土層堆は客土および整地層の第Ⅰ、Ⅱ

第5図 ポプラ並木東地区遺跡の近景、手前が調査区



第6図 ポプラ並木東地区遺跡の発掘



1. 発掘風景（手前が5号墓，東からみる）



2. 土墳墓の調査(南からみる)



3. 土墳墓の分布(東からみる)

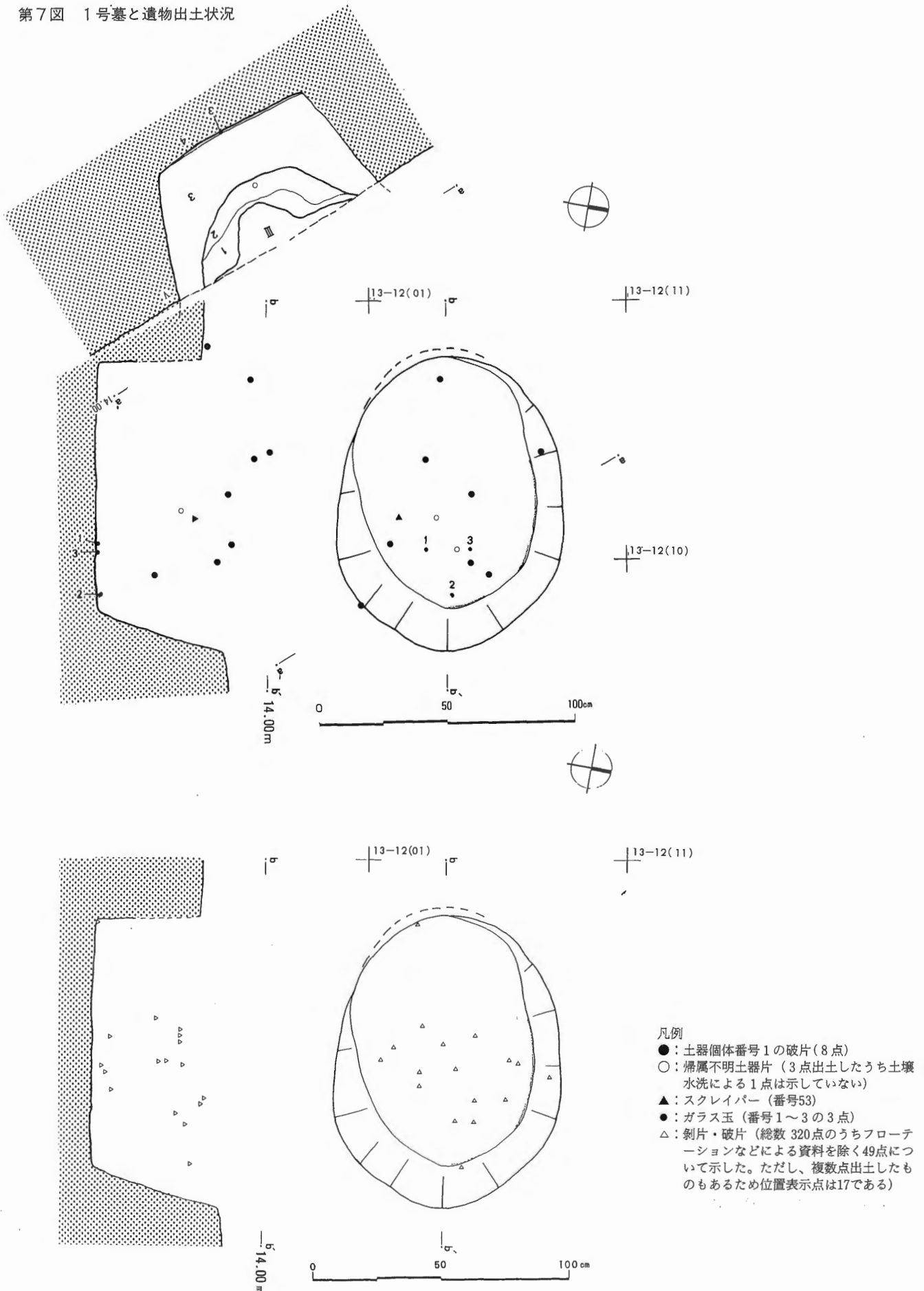
4. 土墳墓の分布と発掘風景(東からみる)



5. 土墳墓の分布と発掘(右手前が3号墓)



第7図 1号墓と遺物出土状況



第8図 完掘後の1号墓

1.発掘終了後の状況(北からみる)



2.発掘終了後の状況(南からみる)



3.墳底から出土したガラス丸玉



4.発掘状況



層を除きつぎのようになる。

第Ⅲ層—黒色の腐植土層。土層のほぼ中央部で土壌内へ20～30cm落ち込んでいる。

埋土1層—黒褐色土層。

埋土2層—赤黄色土層。スミの細粒が多量に混合しているのが観察された。

埋土3層—褐色土層。粘土やスミの細粒が混合し、壁際にも厚く堆積しているのが観察された。

埋土4層—褐色土層。粘土粒を多量に含む。非常に粘性が強い。墳底面に約1cmの厚さで堆積していた。

遺構の確認面は第Ⅵ層の上面。この部分で黒色土（第Ⅲ層）が確認された。

平面形・規模：墳口、墳底とも平面形は楕円形である。壁と底面との角度は、95°～120°である。大きさは、墳口部で長径115cm、短径88cm、墳底部で長径91cm、短径68cm、深さは52cmである。長軸方向は、N-70°-Eである。

遺物：合計341点の遺物が出土した（表1）

遺物の出土状況：層位別に主な遺物の出土状況と特徴を述べるとつぎのようになる。

墳底面—3点のガラス玉は、墓のもっとも東壁によった位置に、15～20cmの間隔でならんでいた。このような出土状況から判断して、この位置、つまり土壌の東側に遺骸の上半身があったものとみなされる。

埋土3層—土器个体番号1の口縁部から胴部にかけての4点の破片は、土壌の東側の壁から約20cm内側で、墳底から約23cmの高さから出土した。ここはガラス玉の出土位置のほぼ真上に相当することなどから判断すると、これらの土器片は、遺骸の上半身の一部を被覆するなど、埋葬法上きわめて重要な意味があったものと推定される。

埋土2層—帰属不明土器片1点は、土壌の中央部から東側にややよった位置で(13-12〔10〕)、墳底から25cm

上位にある。一方、剝片・碎片は北東側にみられた。

埋土1層—帰属不明土器片1点と黒曜石製スクレイパーは土壌のほぼ中央部分（13-12〔00〕・〔10〕）から出土、剝片・碎片の分布域とほぼ重なる。

第Ⅲ層—土器个体番号1の破片10点（口縁部破片3点、胴部破片7点）が出土、遺構確認面から25cmの高さにも破片がみられ、この部分が「盛土」であることを示している。しかし、「盛土」の裾と、本来の第Ⅲ層との境界は識別することが困難で、その規模などはわからない。

以上のような遺物の出土状況のうち、とくに注目すべき点は、土器个体番号1の破片のあり方である。それは、この土器が土壌内と墳口部とへ破片を別々に分けて副葬されたと考えられるからである。

出土遺物のなかでもっとも量的に多いのが剝片・碎片で、総数320点である。そのうち76.6%が土壌水洗や浮遊選別によって回収されたものである。したがって、墳底、墳中、墳口別の出土傾向はうかがえるが（第19図）、詳細な出土状況については先に示した「埋土2層」や「埋土1層」での出土位置が記録されたもの以外正確なところはわからない。

注：碎片とはチップのことである。
注：スミとは木炭あるいは炭化物質のことである。

2 2号墓（第9図1、第10図1）

位置：12-11(22)と12-11(32)グリッドにまたがる。そこは、標高13.8mの微高地で西側に焼土1、北側約1.3mに3号墓、南西側約1.5mに5号墓が配置されている。一方、南側は空地となっており、この墓群のうちもっとも東のはずれに位置している。

土層堆積と遺構の確認面：土層観察用ペルトa-áでみると、この墓の土層堆積は客土および整地層の第Ⅰ、Ⅱ層を除きつぎのようになる。

第Ⅲ層—黒色の腐植土層。人為的な攪乱などは観察されず、自然埋積層と判断される。

表1 1号墓出土遺物

遺物	番号	墳底	埋土			第Ⅲ層	合計	関連遺構、ブロック	図
			3	2	1				
土器	个体	1	—	4	—	—	10	ブロック76、7	第32図3、第33図3
	帰属不明片	—	—	1	1	—	3		
石器	スクレイパー	53	—	—	1	—	1		第42図3
剝片・碎片		—	3(4)	5(65)	37(57)	21(79)	9(40)	75(245)	
ガラス玉		1～3	3	—	—	—	—	3	第53図1～3
合計			10	75	95	102	59	341	

注：剝片・碎片の（ ）は浮遊選別による数

埋土 1 層—暗褐色土. スミ骨粉が多量に含まれている.
埋土 2 層—黄色土層. 土壌の東・南・西側では壁より内側に埋積している. スミの細粒が混合しているのが観察された.

埋土 3 層—褐色土層. もっとも厚く埋積しており, 堅くしまっている.

埋土 4 層—暗褐色土層. 墳底部から北壁にかけて薄く堆積している. 粘性が強い.

遺構の確認面は第Ⅵ層の上面. 黒色土 (第Ⅲ層) のひろがりが確認された.

平面形・規模: 墳口, 墳底とも平面形は楕円形である. 墳底からの壁のたちあがりは, 北側の壁が急で約100°, 南側の壁はなだらかで約120°である. 大きさは, 墳口部で長径50cm, 深さは36cmである. 長軸方向は, E—10°—Sである.

遺物: 合計770点 (第Ⅲ層出土の32点は除く) の遺物が出土した (表 2).

遺物の出土状況: 層位別に主な遺物の出土状況と特徴を述べるとつぎのようになる.

このように, 2 号墓の遺物は剥片・碎片が主体を占め, 墳底部にはみられず墳中から墳口に集中する. これは土壌水洗や浮遊選別の際に回収された約93.8%の剥片・碎片についても言えることである (第19図).

3 3 号墓 (第11図, 第12図, 第13図, 第14図)

位置: 13-11 (02), 13-11 (12) グリッドにまたがる. そこは, 標高13.9mの微高地で, 西側約0.7mに 1 号墓, 南側約1.4mに 2 号墓が位置する.

土層堆積と遺構の確認面: 土層観察用ベルト a-a' でみると, この墓の土層堆積は客土および整地層の第Ⅰ, Ⅱ層を除きつぎのようになる.

第Ⅲ層—黒色の腐植土層. 土壌のはぼ中央部で土壌内へ約15cm落ち込んでいる. 人為的な攪乱などは観察されず, 自然堆積層と判断される.

埋土 1 層—暗褐色土層. スミの細粒が混入しているのが観察された。

埋土 2 層—褐色土層. スミの細粒が混合しているのが観察された.

表 2 2 号墓出土遺物

遺 物		番号	墳 底	埋 土			第Ⅲ層	合 計	関連遺構、ブロック	図
				3	2	1				
石 器	スクレイパー	33	—	—	—	1	—	2		
	スクレイパー	21	—	—	—	—	1			
剥 片 ・ 碎 片		—	—	1 (46)	11 (207)	36 (467)	31	79 (720)		
礫		229	—	1	—	—	—	1		
合 計			0	48	218	504	32	802		

注: 剥片・碎片の () は浮遊選別による数

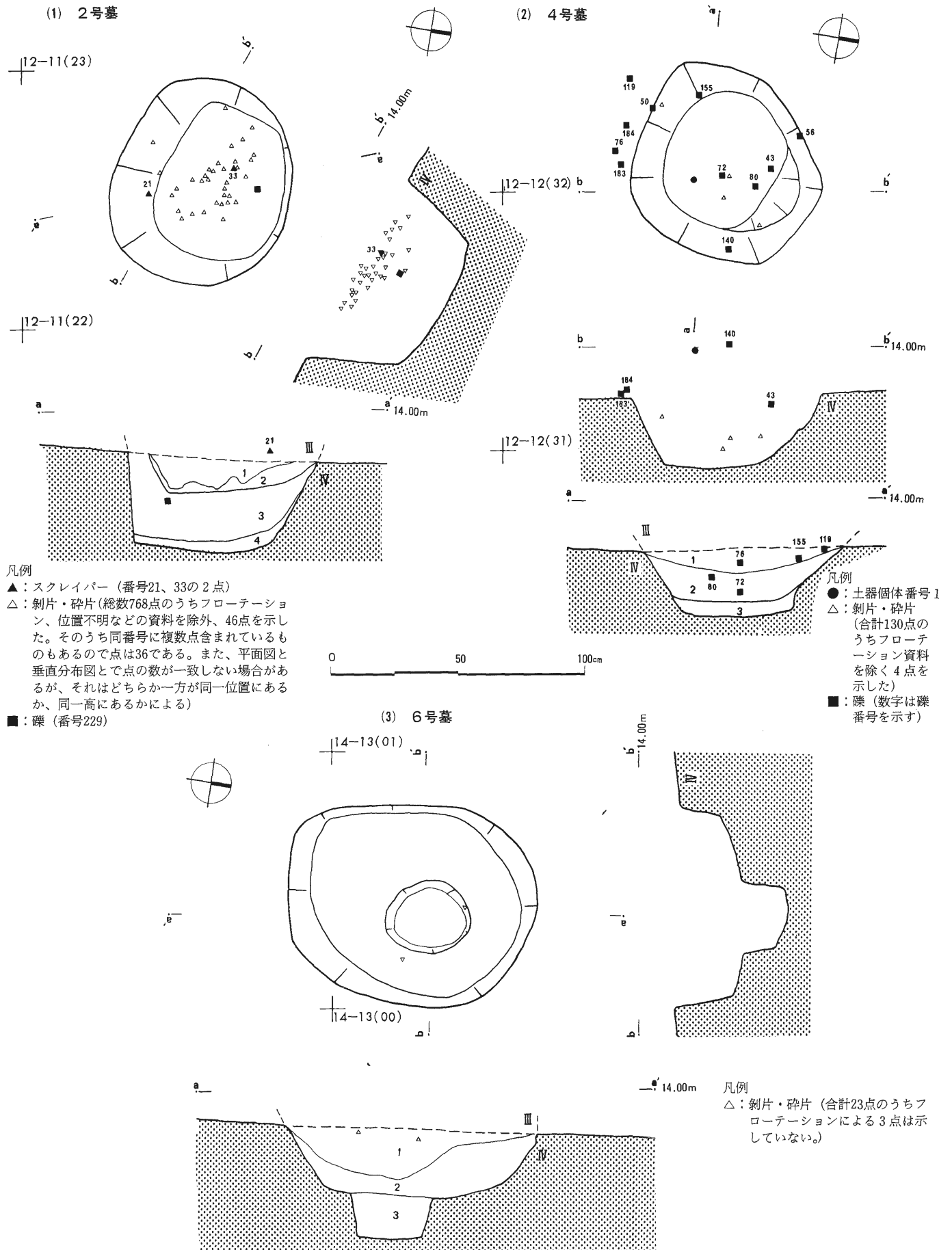
埋土 3 層—剥片・碎片と小礫 (礫番号229) は土壌底からは約30cmの高さである.

埋土 2, 埋土 1 層—土壌のはぼ中央部分で40×20cmの範囲内に集中, このなかにスクレイパー (石器番号33) が混在している.

埋土 3 層—黄色土層. 所々に黒色土の小塊が観察された.

埋土 4 層—白黄色土層. 1～2 cmの厚さで, 墳底部のみに堆積している. 非常に粘性が強い. 赤色顔料 (紅殻?) の小粒が点在した.

第9図 2号墓、4号墓、6号墓と遺物の出土状況

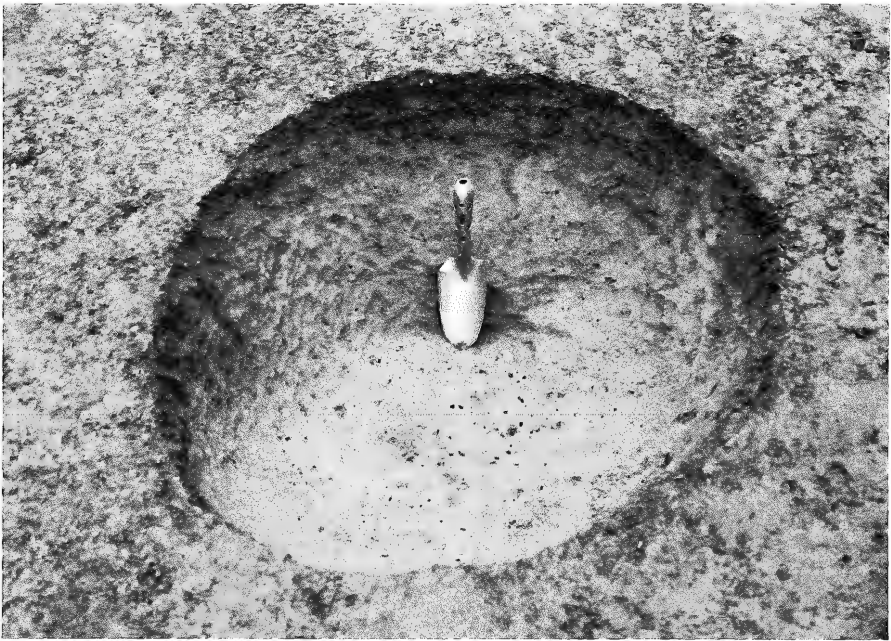


第10図 完掘後の2号墓、4号墓、6号墓

1,2号墓(南西からみる)



2, 4号墓(南西からみる)



3 6号墓(南西からみる)



遺構の確認面は第Ⅳ層の上面で、黒色土（第Ⅲ層）のひろがり確認された。

平面形・規模：墳口は不整形、墳底は長方形形である。墳底は平坦であるが、南西部分に約10cmほど高い張り出しが設けられている。壁と墳底とは約115°と急である。大きさは、墳口部で長径108cm、短径103cm、墳底部で長径104cm、短径61cm（但し、張り出しを加えると92cm）、深さは54～56cmである。長軸方向は、E-35°-Sであ

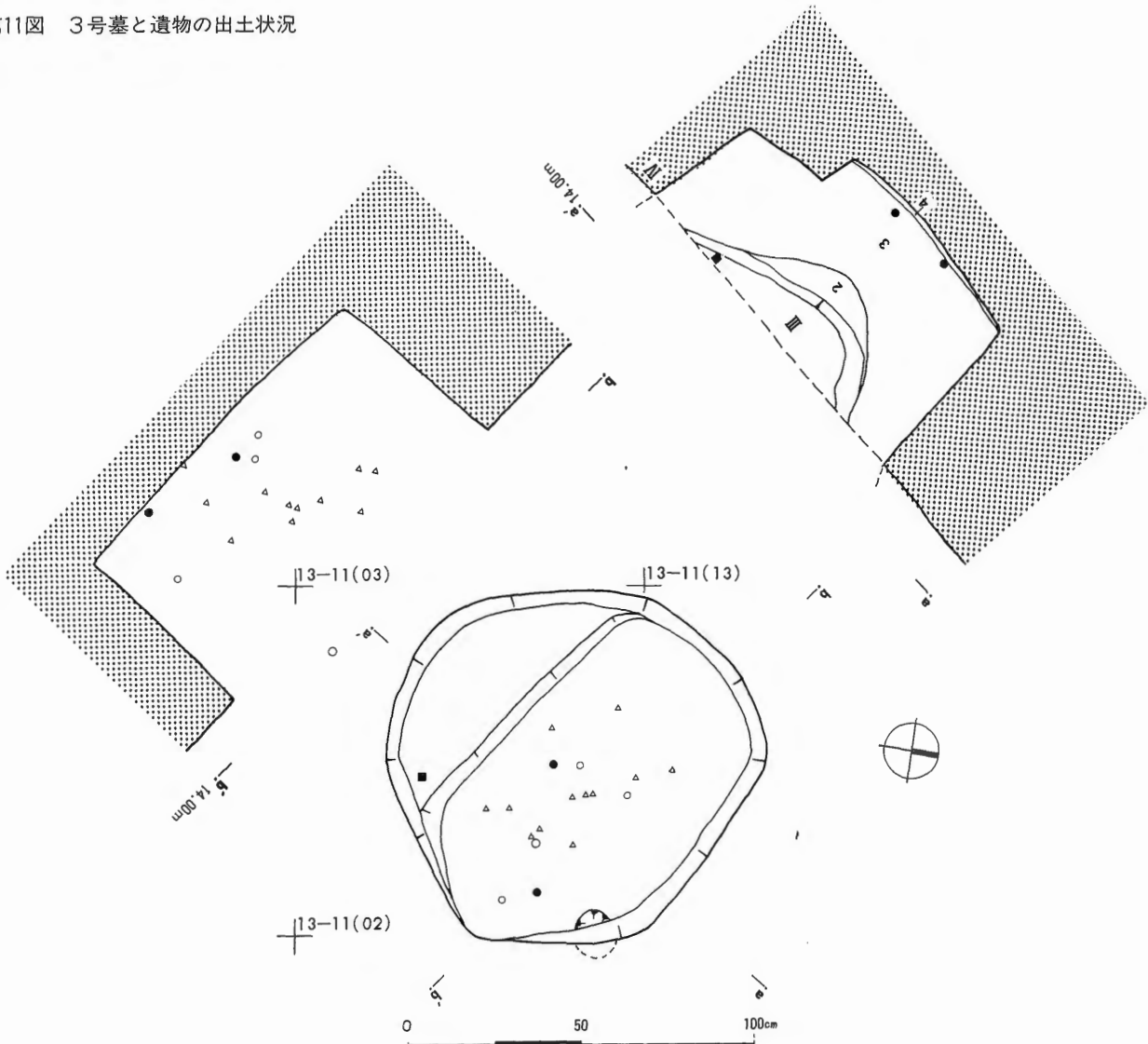
る。

遺物：合計1,008点の遺物が出土した（表3）。

遺物の出土状況：層位別に主な遺物の出土状況と特徴を述べるとつぎのようになる。

墳底—滑石製平玉の平面分布状況を見ると（第12図）。墓の東側からは出土していない。さらに、集中の状況からそれらが規則的に配置、埋納された様子を見い出すことができない。滑石製平玉は、墳底部を含め埋土3層、

第11図 3号墓と遺物の出土状況



凡例

- ：土器個体番号7の破片
- ：土器個体番号12の破片
- ：帰属不明土器の破片（5点のうち土壌水洗法による2点は示していない）
- △：剥片・碎片（総数275点のうち、フローテーションや位置不明などの資料を除外し、12点を示した）
- ：礫（番号225）

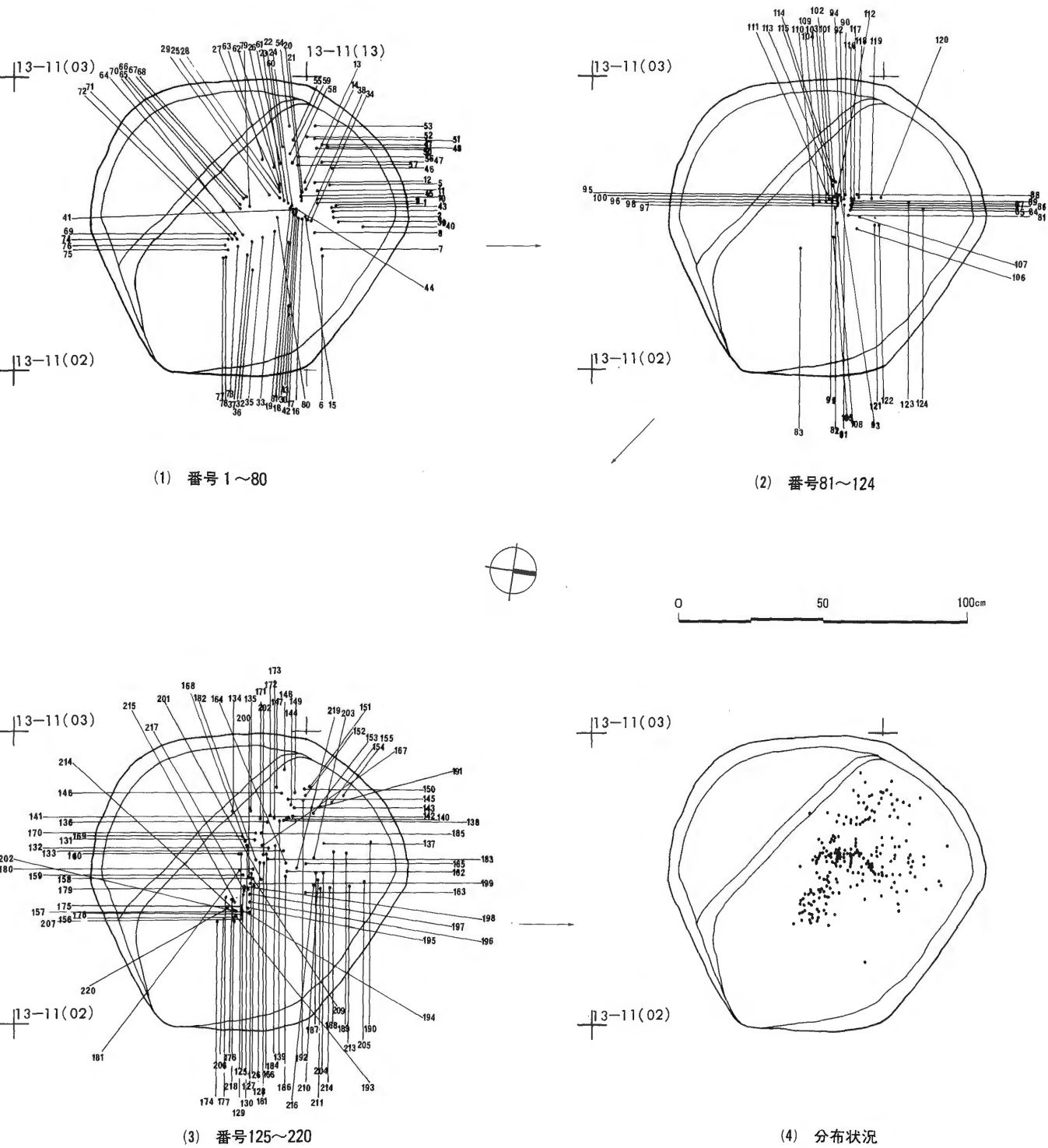
2層，1層から出土しているが，529点（70.6％）が浮遊選別によって回収されたものである。そのうち，墳底部と埋土3層で99.3％を占めており，墳中上部から墳底部に集中していることが判明した。

剥片・碎片がわずかに4点出土している。そのうち2点は浮遊選別による回収品である。出土位置の判明している2点は滑石製平玉の分布とは重複しない。

埋土4層～埋土1層－剥片・碎片は271点のうち，浮

遊選別による回収品が251点（93％）を占める。出土数は埋土2層がもっとも多く（127点），埋土1層がもっとも少ない（64点）。この出土傾向を滑石製平玉と比較すると，もっとも多く含まれている層が剥片・碎片で埋土2層，埋土3層（滑石製平玉）のちがいがあるものの，いずれも墳口部が少なくなる，というきわめて似たようなあり方を示している。

第12図 3号墓出土の滑石製平玉平面分布状況



第13図 3号墓

1,3号墓、基底には多量の玉の出土位置を示す
マークがみられる（南西からみる）



2,3号墓(東からみる)



3,3号墓、(身長173cmの男性が入ったところ)

第14図 3号墓

1 平玉の発掘状況



2 墳底から出土した平玉の出土状況、よく目をこらしてみるとマークの近くに平玉がみえる



表3 3号墓出土遺物

遺物		番号	墳底	埋土			第Ⅲ層	合計	関連遺構、ブロック	図
				3	2	1				
土器	個体	7	—	—	—	—	1		ブロック3、8、9、10	第34図ー1、第33図7 g
	〃	12	—	2	—	—	—			
	帰属不明片	—	—	4	1	—	—	5		
剥片・碎片		—	2(2)	6(74)	10(117)	3(61)	25(24)	46(278)		
小礫		225	—	—	—	—	1	1		
滑石製平玉			308	413	4	1	—	726	4号・5号墓、ブロック11、12	第53図②、第54図
合計			312	499	132	65	51	1,059		

注：剥片・碎片の（ ）は浮遊選別による数

4 4号墓（第9図2，第10図2）

位置：12-12（31），12-12（32），13-12（01），13-12（02）グリッドにまたがる。そこは、標高13.8mの微高地で、東側約0.9mに1号墓，南東側約1mに5号墓，北西側約1mに7号墓が配置されている。

土層堆積と遺構の確認面：土層観察用ベルト a - á でみると，この墓の土層堆積は客土および整地層の第Ⅰ，Ⅱ層を除きつぎのようになる。

第Ⅲ層—黒色の腐植土層。土層の上面をおおう自然堆積層である。

埋土1層—暗褐色土層。スミの細粒が混入しているのが観察された。

埋土2層—褐色土層。スミの細粒が混入しているのが観察された。

埋土3層—黄褐色土層。所々に黒色土の小塊が観察された。

遺構の確認面は第Ⅳ層の上面で，黒色土（第Ⅲ層）の

ひろがりが確認された。

平面形・規模：墳口，墳底とも不整円形である。壁と墳底とは約127°となだらかな角度を示している。とくに北東側の壁は138°とゆるやかにたちあがっている。大きさは，墳口部で長径73cm，短径71cm，墳底部で長径52cm，短径44cm，深さは28cmである。長軸方向は，E—14°—Sである。

遺物：合計138点の遺物が出土した（表4）。

遺物の出土状況：層位別に主な遺物の出土状況と特徴を述べるとつぎのようになる。

墳底，埋土3—遺物は出土していない。

埋土2層—剥片・碎片84点（81点は浮遊選別法による）と礫2点が出土，このうち出土位置の判明しているものは土壌中央部に集中する。

埋土1層—剥片・碎片46点（45点は浮遊選別法による）と礫4点は，土壌の南側に集中している。

表4 4号墓出土遺物

遺物		番号	墳底	埋土			第Ⅲ層	合計	関連遺構、ブロック	図
				3	2	1				
土器	個体	1	—	—	—	—	1	1	1号墓、ブロック6	第32図3、第33図3
	剥片・碎片	—	—	—	3(81)	1(45)	31	35(126)		
分割礫		72	—	—	1	—	—	6	5号墓	
		80	—	—	1	—	—			
		43	—	—	—	1	—			
		76	—	—	—	1	—			
		50	—	—	—	—	1			
		56	—	—	—	—	1			
礫剥片		119	—	—	—	1	—	3		
		155	—	—	—	1	—			
		140	—	—	—	—	1			
礫		183	—	—	—	—	1	2		
		184	—	—	—	—	1			
滑石製平玉			—	—	—	2	—	2	3号・5号墓、ブロック11、ブロック12	
合計			0	0	86	52	37	175		

注：剥片・碎片の（ ）は浮遊選別による数

5 5号墓（第15図1，第16図1）

位置：12-12(10),12-12(11),12-12(20), 12-12(21)
グリッドにまたがる。そこは、標高13.8m代の微高地である。7基の墓群のなかで南端に位置している。

土層堆積と遺構の確認面：土層観察用ベルト a - a'でみると、この墓の土層堆積は客土および整地層の第Ⅰ、Ⅱ層を除きつぎのようになる。

第Ⅲ層—黒色の腐植土層。土壌の上面をおおう自然堆積層である。

埋土1層—暗褐色土層。スミの細粒が混合しているのが観察された。

埋土2層—褐色土層。スミの細粒が混合しているのが観察された。

埋土3層—暗褐色砂質土層。ロームの小ブロックが混合している。

遺構の確認面は第Ⅳ層の上面で、黒色土（第Ⅲ層）のひろがり確認された。

平面形・規模：墳、墳底とも楕円形である。底部は中凹みの鍋底となる。壁と墳底とは125°～126°の角度を示している。大きさは墳口部で長径127cm，短径90cm，墳底部で長径101cm，短径64cm，深さは35cmである。長軸方向は，E－4°－Nである。

遺物：合計119点の遺物が出土した（表5）。

遺物の出土状況：層位別に主な遺物の出土状況と特徴を述べるとつぎのようになる。

墳底部—遺物は出土していない。

埋土3層—土器片と剝片は土壌の東，南壁面からは出土していない。なお，滑石製平玉は浮遊選別による回収品で，出土状況など詳細は不明である。

埋土2層—剝片・碎片や礫は土壌の中央部から南壁側にかけてまとまる傾向を示している。

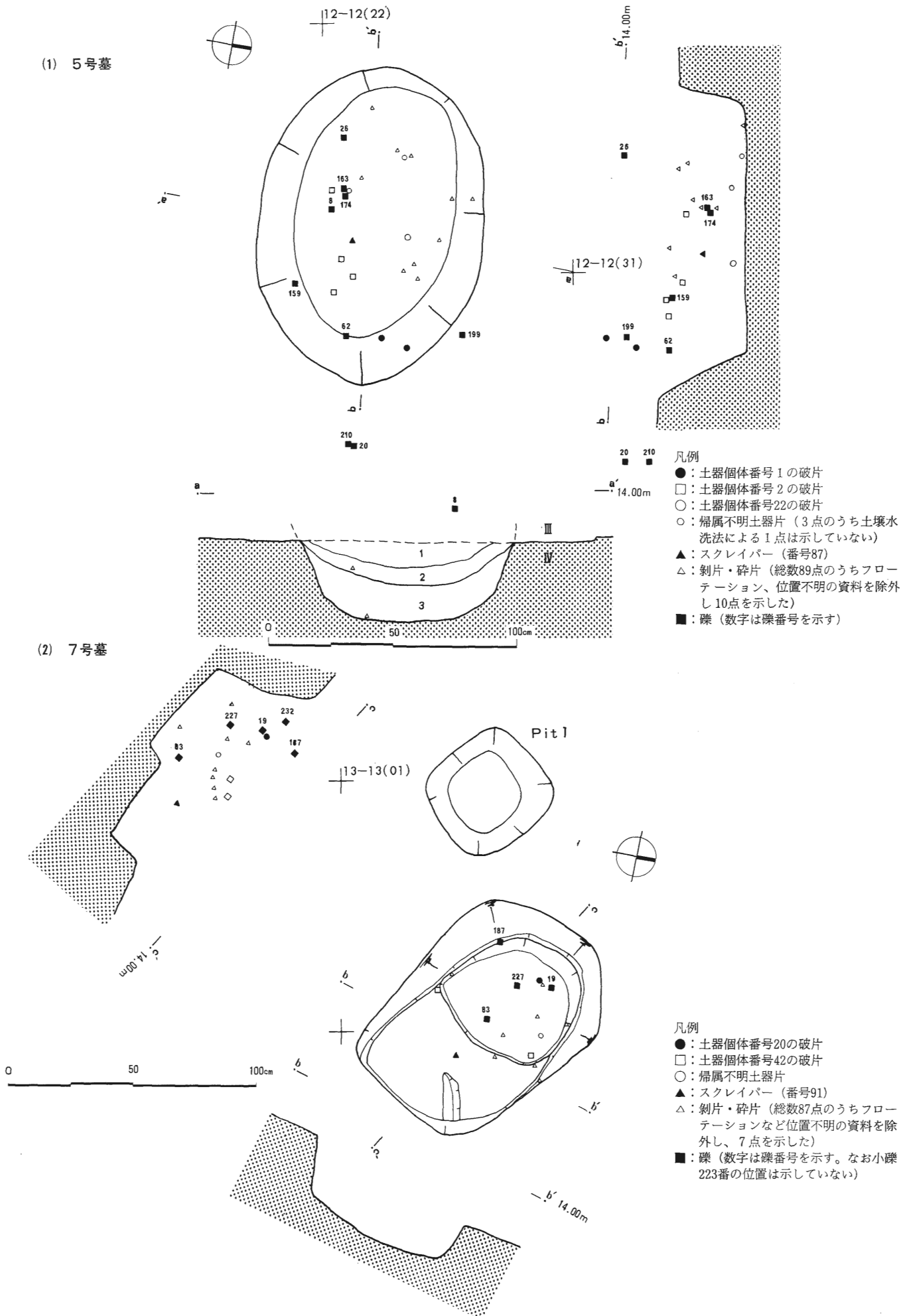
埋土1層—遺物は土壌の西，東壁側からはほとんど出土しない。

表5 5号墓出土遺物

遺物		番号	墳底	埋土			第Ⅲ層	合計	関連遺構、ブロック	図
				3	2	1				
土器	個体	1	—	—	—	—	2	7	1号墓、ブロック7	第32図3、第33図3
	〃	2	—	—	1	3	—			
	〃	22	—	1	—	—	—			
	帰属不明片	—	—	2	—	1	—			
石器	スクレイパー	87	—	—	—	1	—	1		第42図10
剝片・碎片		—	—	6(31)	11(17)	2(22)	23(3)	42(73)		
分割礫		62	—	—	—	1	—	4		
		8	—	—	—	—	1			
		20	—	—	—	—	1			
		26	—	—	—	—	1			
礫剝片		163	—	—	1	—	—	3		
		174	—	—	1	—	—			
		159	—	—	—	1	—			
礫		199	—	—	—	—	1	2		
		210	—	—	—	—	1			
滑石製平玉			0	13	2	2	—	17	3号・4墓、ブロック11,12	第53図②
合計				53	33	33	33	152		

注：剝片・碎片の（ ）は浮遊選別による数

第15図 5号墓、7号墓と遺物の出土状況



第16図 5号墓と7号墓

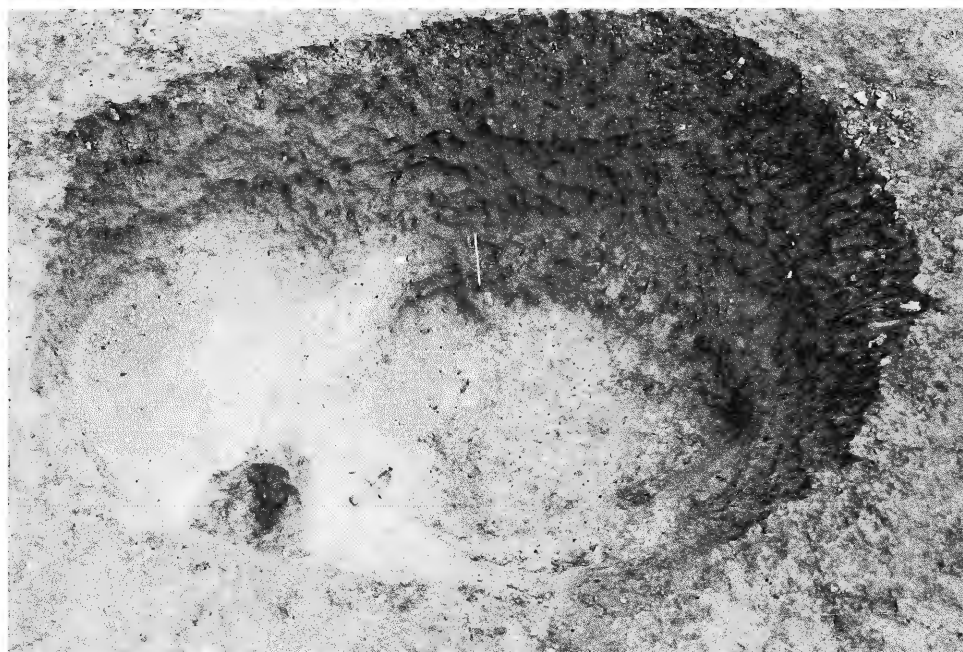
1 5号墓(南東からみる)



2 7号墓の土層堆積状況



3 7号墓(北からみる)



6 6号墓（第9図3，第10図3）

位置：13-13(30), 14-13(00)グリッドにまたがる．そこは，標高13.9mの微高地で，墓群のなかでもっとも北西に配置されている．

土層堆積と遺構の確認面：土層観察用ベルト a - a'でみると，この墓の土層堆積は客土および整地層の第Ⅰ，Ⅱを除きつぎのようになる．

第Ⅲ層—黒色の腐植土層．土壌の上面をおおう自然堆積層である．

埋土1層—暗褐色土層．スミの細粒が混合しているのが確認された．

埋土2層—褐色土層．スミの細粒が混合しているのが観察された．

埋土3層—黄褐色土層．

遺構の確認面は第Ⅳ層の上面で，黒色土（第Ⅲ層）のひろがりが確認された．

平面形・規模：墳口，墳底とも楕円形である．墳底のほぼ中央には小穴（30×30cmで底面から20cmの深さ）がみられる．墳底は鍋底状である．壁と墳底との角度は98°～100°を示す．大きさは墳口で長径99cm，短径79cm，墳底で長径84cm，短径70cm，深さは26cmである．長軸方向は，W－1°－Nである．

遺物：合計8点の剥片・碎片が出土した（表6）．

遺物の出土状況：浮遊選別の際に回収された6点を除くと，埋土1層の2点だけが出土位置を記録された．それらは土壌の中央部から出土している．

表6 6号墓出土遺物

遺物	墳底	埋土			第Ⅲ層	合計	関連遺構、ブロック	図
		3	2	1				
剥片・碎片	0	(1)	0	2(5)	7(8)	9(14)		—
合計	0	1	0	7	15	23		

注：剥片・碎片の（ ）は浮遊選別による数

7 7号墓（第4図，第15図2，第16図2，3）

位置：13-12(03), 13-13(00), 13-13(10)グリッドにまたがる．そこは，標高13.8mの微高地で，東側約1mに4号墓，北西側約2.7mに6号墓が配置されている．

土層堆積と遺構の確認面：土層観察用ベルト a - a'でみると（第4図），この墓の土層堆積はつぎのようになる．

第Ⅲ層—黒色の腐植土層．土壌の上面をおおう自然堆積層である．

埋土1層—暗黒色土層．スミの細粒が混合しているのが観察された．この土層の北西側の部分は盛り上っており，盛土の状態が保たれ，南側は逆に土壌内に湾入し，その上をローム・ブロック混じりの土層がおおっている．

埋土2層—暗褐色土層．スミの細粒が混合しているのが観察された．

埋土3層—褐色土層．非常にかたくしまっている．

埋土4層—墳底の中央部分を中心に厚さ5～6cmで堆積している．明褐色土層で粘性がある．

遺構の確認面は第Ⅳ層の上面で，黒色土（第Ⅲ層）のひろがりが確認された．

平面形・規模：墳口は長五角形，墳底は不整楕円形である．墳底は二段づくりになっており，一段低い方のプランは不整円形である．壁と墳底とは110°～115°の角度を示している．大きさは，墳口で長径98cm，短径72cm，墳底で長径88cm，短径54cm，深さは30cmである．長軸方向は，E－35°－Sである．

遺物：合計80点の遺物が出土した（表7）。

遺物の出土状況：層位別に主な遺物の出土状況と特徴を述べるとつぎのようになる。

墳底―遺物は出土していない。

埋土3層～1層―墳底につくられた一段と低いピットの上に集中する傾向にある。ただし、スクレイパーはその集中区からはずれて出土した。

表7 7号墓出土遺物

遺 物		番号	墳 底	埋 土			第Ⅲ層	合 計	関連遺構、ブロック	図
				3	2	1				
土 器	個 体	20	—	—	—	1	—	3		第34図－6、第33図7 f
	ク	42	—	—	—	2	—			
	帰属不明片	—	—	—	—	1	2	3		
石器	スクレイパー	91	—	—	—	1	—	1		第39図17
剥 片 ・ 碎 片		—	—	1(1)	2(28)	5(33)	17	25(62)		
分 割 礫		83	—	—	1	—	—	2	ブロック3、6	
		19	—	—	—	1	—			
礫		227	—	—	1	—	—	3		
		187	—	—	—	1	—			
		232	—	—	—	1	—			
合 計			0	2	32	46	19	99		

注：剥片・碎片の（ ）は浮游選別による数

(3) 墓の形成過程

墓墳の切り合いや掘り上げ時、あるいは埋め戻しに伴う土砂の重なりなどから墓群の形成過程を知る手懸りは発見されていない。

したがって、以下に述べる墓の形成過程は主として遺物―土器や礫器などの接合・同一資料にもとづくものである。

遺物の接合や同一資料についての出土、分布状況（5-1-(2)、6-1～4）を整理するとⅠ期とⅡ期に形成されたものに大別できる（第55図）。

Ⅰ期は3号墓、4号墓、5号墓が形成された段階で、この地域に墓が造られた最初の時期である。

まず、4号墓と5号墓の2基の墓はつぎのような接合資料にもとづき、ほぼ同時に形成されたものと推定され

る。それは、「礫接合資料番号12」の分布状況にもとづくものである。この接合資料は2点の分割礫からなるもので、そのうち「礫番号72」が4号墓の埋土2層に（第9図2）,「礫番号62」が5号墓の埋土1層（第15図1）に、それぞれ副葬されていたものである（第47図および第48図a-a'）。

3号墓については4号墓や5号墓との形成順序を知る決定的な資料に乏しいが、つぎのような理由から少なくともⅡ期の墓より古い段階に形成されたという確証は得られている。

まず、「土器個体番号7」の破片のひとつが3号墓の上で第Ⅲ層から出土している（第11図、第27図）。この土器は、すくなくとも8個体分の土器との共伴が確認されており（表13）、そのひとつに「土器個体番号1」がある。「土器個体番号1」の破片は、1号墓に副葬され

ていたほか、4号墓や5号墓の上で第Ⅲ層から出土している。このことは4号墓、5号墓はもとより3号墓の形成も1号墓より時間的に先行する、ということを示している。

つぎに、3号墓、4号墓、5号墓に副葬されていた滑石製平玉によって、この3基の墓の被葬者間に強い関連があった、ということを読み取ることができよう。この滑石製平玉は、3号墓の被葬者に関するものの一部が他の墓の被葬者の埋葬時に分配されたと解釈するなら、これらの3基の墓はほとんど同時に形成されたということになる。

Ⅱ期は、1号墓と7号墓が形成された段階である。

1号墓はその破片の一部が副葬されていた「土器個体番号1」の破片分布に、また7号墓は「礫接合資料番号9」にもとづき、Ⅰ期に形成された3基の墓—3号墓、4号墓、5号墓より後出のものである、という点でⅡ期に所属させたわけである。

まず、「土器個体番号1」の破片は、1号墓の副葬品として埋土3層に埋納されていた以外に、同墓上面（第9図）、4号墓上部の第Ⅲ層（ブロック7を形成）（第9図2）、5号墓上部の第Ⅲ層（ブロック6を形成）（第15図1）などに分布していた（第25図）。このことは、1号墓が4号墓や5号墓より新しい段階に形成された、ということを示している。

また、「礫接合資料番号9」は3点の分割礫よりなるもので、そのうち「礫番号19」が副葬品として7号墓の埋土1層に埋納（第15図2）、「礫番号20」、「礫番号21」がそれぞれブロック6、ブロック3の中から出土した（第47図）。このことは、7号墓が5号墓より新しい段階に形成された、ということを示している。

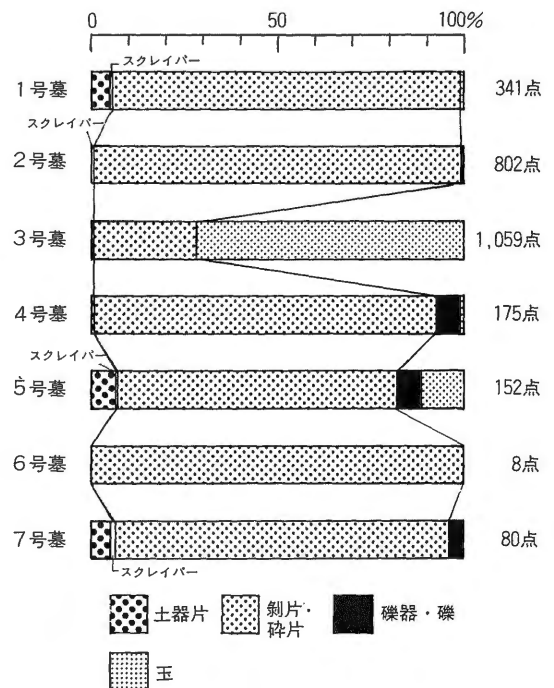
一方、Ⅱ期内での動向、つまり1号墓と7号墓の形成順序などを知る直接の手懸りはない。しかし、5号墓の上部から裾部にかけての遺物のまとまり（ブロック6）にみられる「土器個体番号1」と「礫接合資料番号9」のうちの「礫番号20」の伴件関係を「同時に埋置された」と解釈するならば、両墓の形成も同時である。つまりこの2基の墓の被葬者はほぼ同時に埋葬された、ということになるだろう。

ここで、この遺跡の墓（2基は不明だが）の形成過程をまとめるとつぎのようになる。

3号墓・4号墓・5号墓→1号墓・7号墓

このような墓の形成過程の推定が正しいものとする2～3基の墓がきわめて短期間に形成された、という経過を読み取ることができよう。言葉をかえれば、2～3人の死がほぼ同時か否かは別としても、すくなくとも複数の埋葬がきわめて短期間に行なわれた、ということはこの墓地の形成は物語っているようである。

一方、墓の形成に伴う配列に規則性を読み取することはむづかしい。Ⅰ期に形成された3基に近接して次期の墓が形成され、結果として墓域を意図したものとみなし得ようか。



第17図 墓別出土遺物の組成比

(4) 墓の出土遺物の性格

1 出土遺物の種類

7基の墓に伴って出土した遺物の種類は、つぎのような品目があげられる。

それは、土器（片）、黒曜石製スクレイパー、刮片・碎片、礫器・礫、ガラスおよび滑石製の玉の5種類である。

いうまでもなく、上記の遺物がすべて副葬品である、という保証はない。ここでは以下の分析を通じ、遺物の性格付けを行うことにする。

2 遺物のあり方

① 墳底、墳中、墳口別にみた遺物量

まず第一に注目すべき点は、墓間での遺物量の差、ということである。遺物量をもっとも多いのは3号墓で1,008点、もっとも少ないのは6号墓で8点と大きな差がみられる。

このような遺物量の多寡が何を意味するかはしばらくおくとして、剝片・碎片の出土量が墓の出土遺物量を増大させている、と同時に出土遺物量に占める割合がきわめて高い、という特徴を読み取ることができる(第17図)。ちなみに墓の出土遺物量に占める剝片・碎片の割合を示すとつぎのようになる。

まず、出土数が8点と少ないがすべて剝片・碎片で占められる6号墓の例。そして、ほぼそれに近いあり方を示すのは2号墓で約9割9分強にのぼる。また、1号墓、4号墓、7号墓の3基の墓は9割前後の高率を示している。出土遺物のなかに滑石製平玉が含まれていた5号墓でも7割強を占め、もっとも頻度の低い3号墓でさえ3割近くまで達している。3号墓の場合、滑石製平玉が7割強を占めるという非常に特殊な状況にあるにもかかわらず、剝片・砂片の数は275点で2号墓、1号墓について多い。

以上のように、どの墓でも剝片・碎片が出土遺物のなかに占める割合が高いという特徴を指摘することができる。つぎに、墓の墳底、墳中、墳口別にみた遺物の出土状況を第18図に示す。なお、墳中とは埋土3層と2層を、墳口とは埋土1層の場合(2号墓、3号墓、6号墓)と埋土1層と第Ⅲ層の場合(1号墓、4号墓、5号墓、7号墓)とがある。

それによると、出土遺物の半数以上、場合によっては9割以上が墳底から墳中に集中している墓が4基(1号墓、3号墓、4号墓、5号墓)ともっとも多くみられる。逆に墳口部がやや上回る(7号墓)か圧倒的に墳口部に集中して多い墓(2号墓、6号墓)もみられ、遺物のあり方に相反する二つの傾向をうかがうことができる。

② 墳口部の遺物

墓の墳口部には「埋土1層」が各墓に共通してみられ

る土層である。一方、「埋土1層」とその上部を覆う「第Ⅲ層」とを含めて墳口部、という場合があった。つまり、「第Ⅲ層」は自然堆積層と「盛土層」などのような人為的な土層との2通りがあったわけである。

そのうち「第Ⅲ層」が自然堆積層と判断された墓は、2号墓、3号墓、4号墓、5号墓、6号墓で、この土層からの出土遺物の大半はこれらの墓に直接伴うものではなく、墓の形成後の所産、ということになる。

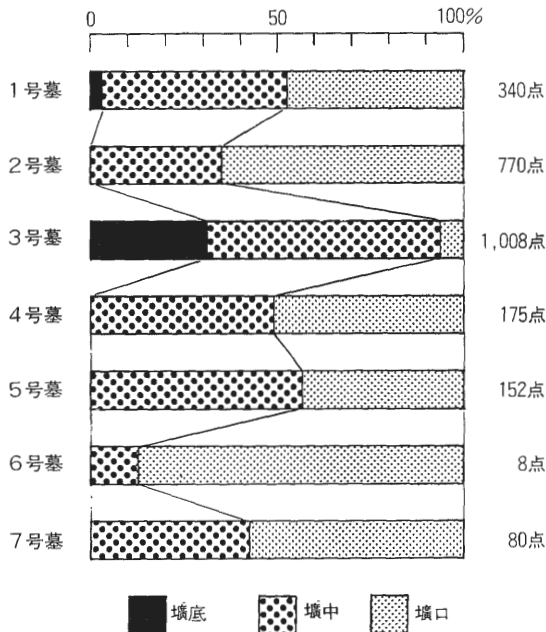
しかし、他の墓とちがって4号墓と5号墓の「第Ⅲ層」の遺物は供献品と判断される要素をもちあわせている。それは、1号墓の副葬品の一部がこの両墓の「第Ⅲ層」から出土したことなどによるためである。このような出土状況についてはいまのところ2つの解釈が与えられるだろう。ひとつは、1号墓の形成の際それに伴う供献品などの一部が、偶然に、先に形成されていた4号墓、5号墓の上部やその周囲に掻き集められただけである、という解釈である。もうひとつは、1号墓の供献品の一部が先に形成されていた4号墓と5号墓に同じく供献品として供えられた、という解釈である。後にも詳しく述べるように(5-5)、4号墓、5号墓の上部やその周辺には遺物集中域—「ブロック7」、「ブロック6」が形成されている。このように新しく形成された墓の供献品との関連のもとに、先に形成された墓の上部と周辺に形成された「ブロック」は、先の墓に対する「追贈供献品」という性格づけが可能である。

いずれにしても、「第Ⅲ層」からの出土遺物は墓の形成後の遺物、という点では共通している。しかし、第一の解釈では先に形成された墓と無関係に、また第二の解釈では密接な関連のもとにある、という相対立する性格が与えられる。筆者が第二の解釈の立場にあることは言うまでもない。

つぎに、1号墓と7号墓の第Ⅲ層または埋土1層は盛土、と判明したものである。したがって、そこからの出土遺物の大部分は供献品としてそれぞれの墓に伴うもの、と判断される。とくに、1号墓から出土した「土器 個体番号1」の10点の破片は供献品とみなし得るもっとも典型的な例といえよう。

3 副葬品と混入品

「2 遺物のあり方」からみて被葬者の副葬品と判断される遺物につぎのような品目があげられる。1号墓では、



第18図 墓別遺物包含比

ガラス玉と「土器個体番号1」の破片の2品目、3号墓では、726点の滑石製平玉、5号墓では、17点の滑石製平玉がまず確定しよう。

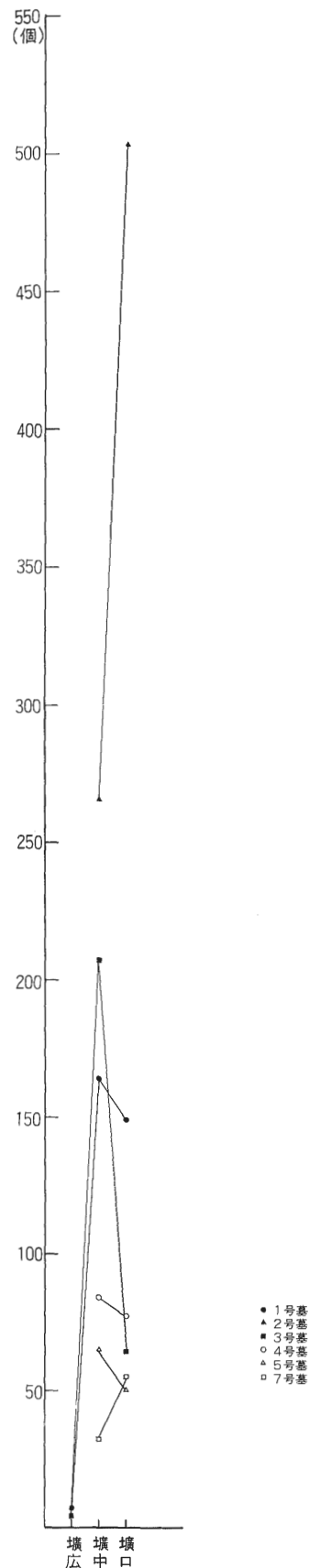
それでは剝片・碎片、礫などの遺物についてはどのように判断されるだろうか。

まず、第19図に剝片・碎片が墳底、墳中、墳口別になつていくのをグラフ化して示した。それによると、剝片・碎片の出土傾向を2つに類型化することができる。

1類—出土の主体は墳中にあり、墳底や墳口は少ないか、出土しない墓（1号墓、3号墓、4号墓、5号墓の4墓）

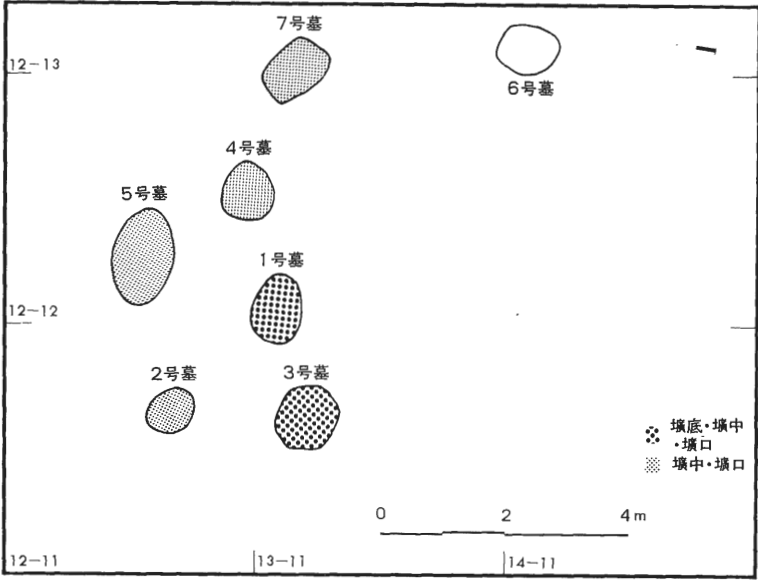
2類—墳底からは出土せず、主体は墳口にある墓（2号墓、6号墓、7号墓の3墓）

そこで滑石製平玉の出土傾向に照し合わせると（第21図）、1類の墓における剝片・碎片はそれとよく似た出土傾向をうかがうことができるので副葬品としての性格が与えられてよいものである。このことは、1類とした墓にみられた他の遺物—土器片、スクレイパー、礫器・礫や4号墓埋土1層出土の2点の滑石製平玉についても同様な性格付けができるのであり、とくにそれらに対し混入品とみなすことはできないだろう。



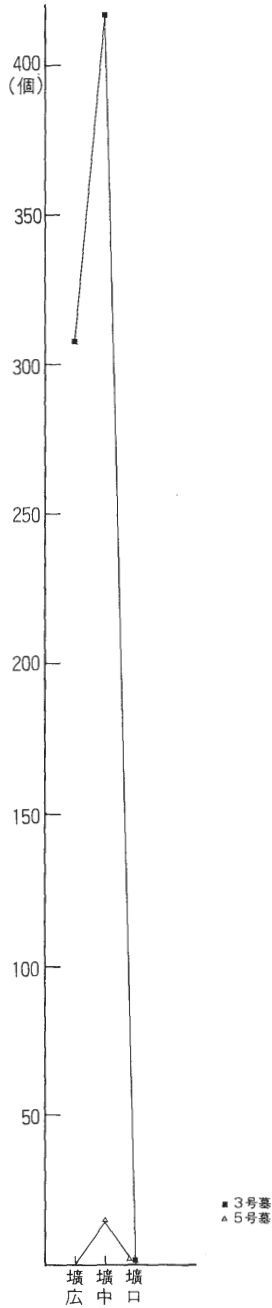
第19図 墓の部位別にみた剝片・碎片数推移 (6号墓は除く)

第20図 墓における剥片・碎片の散布状況



一方、2類の墓の出土傾向は1類とは全く正反対を示す。しかし、だからといってこれらのすべてを混入品である、とみなす理由にはならない。墓の上部から墳口部にかけて剥片・碎片を散布する、という副葬法の特徴とみなすこともできるからである。この判断が正しいと思われる資料に、遺跡全体での剥片・碎片の分布状況を示す図がある（第42図）。この図から2類の墓の剥片・碎片の出土数が、その周辺と比較して極端に少ない、ということを読み取ることができよう。かくして1類の場合と同様に、2類の墓から出土した剥片・碎片の大部が副葬品である、という判断にいたった。ということは、それらと共伴関係にある土器片、スクレイパー、礫器・礫などについても同様に副葬品という性格が与えられるだろう。しかし、他の墓に比較して極端に出土数の少ない6号墓の剥片・碎片についても同じように性格づけができるかどうか、現状ではむしろ否定的といわざるをえない。

いままで述べてきた墓の副葬品についてまとめてみるとつぎのようになるだろう。まず、7基の墓のうち6号墓を除く6基に副葬品が埋納されていた。副葬品の品目は、土器片、黒曜石製石器、黒曜石製剥片・碎片、礫器・礫、ガラスおよび石製の玉であった。そのうち、土器片は1号墓、3号墓、4号墓、5号墓、7号墓の5基の墓から出土していた。黒曜石製石器は、3号墓、4号墓を除く4基の墓から出土した。礫器・礫は4号墓、5号墓、7号墓の3基の墓から出土した。しかし、6号墓の墓すべてにみられしかも量の多いものは、なんといっても



第21図 3号墓、5号墓の部位別滑石製平玉の出土数推移

剥片・碎片であった。装身具はガラス玉が1号墓から、滑石製平玉が3号墓、4号墓、5号墓から出土した。

これらの副葬品のうち、土器はすべて破片、礫器・礫は75%が破損礫で、墳中から墳口にかけて出土した。このような出土状況は、1号墓の墳底に埋納されていた3個のガラス玉とは副葬法が基本的に異なっていた、ということを示している。それは、むしろ滑石製平玉、剥片・碎片、黒曜石製石器と極めてよく似たあり方を示していた。このうち、とくに黒曜石製剥片・碎片の出土状況は、墳中、墳口における散布を示すもので、紅殻に代る副葬法の大きな特徴とみなすこともできるだろう。

2 小ピット

(1) 小ピットの名称

この墓地内で2個の小ピットが検出された。検出された順に、「ピット1」、「ピット2」とよぶことにする(第4図)。

(2) 小ピットの様相

① ピット1 (第15図2)

位置：13-13 (00~01) グリッドにみられた。7号墓の西側、約20cmの近距離である。

確認面・土層：第Ⅳ層の上面で確認した。暗褐色の土壌が充満していた。

形状・大きさなど：平面形は隅丸方形であり、上面で45×45cm、下面で28×28cm、深さは約22cmである。

出土遺物：遺物は出土していない。

② ピット2 (第4図)

位置：12-11 (00) グリッドにみられた。ブロック3の南端にあたる。

確認面・土層：第Ⅳ層の上面で確認した。暗褐色の土壌が充満していた。

形状・大きさなど：円筒形である。大きさは20×20cm、深さは45cmである。

出土遺物：黒曜石の剥片・碎片が出土した(ブロック3出土数に含まれる→6-3-(1)-4)。

(3) 小ピットの性格と時期

2個の小ピットの性格は、小ピット1は7号墓の標式の掘り方、小ピット2はブロック3の標式の掘り方と推察される。したがって、その時期はこの墓地の営まれた頃(詳細は7-4)、ということになる。

3 焼土

(1) 焼土の名称

この墓地内で2個所の焼土が検出された。検出された順に、「焼土1」、「焼土2」とよぶことにする(第4図)。

(2) 焼土の様相

① 焼土1

位置：12-11 (30) グリッドにみられた。東側に2号墓、北側に3号墓、西側に1号墓が近接して配置されている。

確認面：第Ⅳ層の下部でスミを検出、第Ⅴ層の上面から焼土があらわれた。

形状・大きさ：不整円形にスミや焼土がひろがっている。その範囲は、長径85cm、短径70cm、厚さは約5cmである。

出土遺物：スクレイパー1点(石器番号4)、剥片・碎片13点が出土した(表8、第38図、第42図)。これらのほかに炭化した胡桃が4点出土した。

② 焼土2

位置：12-10 (01~02) グリッドにみられた。西側にはブロック3が近接して配置されている。

確認面：第Ⅳ層の下部でスミを検出、第Ⅴ層の上面から焼土があらわれた。

形状・大きさ：焼土の南半分は未発掘のため、全体の形状は推定にとどまる。発掘によって検出した部分からみると、不整円形になる。大きさは、100×70cm、焼土の厚さは約10cmである。

出土遺物：帰属不明土器片4点、スクレイパー3点(石器番号15、29、50)(第38図)、剥片・碎片693点(第42図)、礫剥片3点(礫番号113、129、134)(第47図)、琥珀^{こはく}1点(番号4)(第52図)、その他1点(番号

表 8 ブロックの属性

ブロック	位置グリッド	規模 (cm) 形状	遺物の種類・数量	標高(m)	小ブロックの有無・状況	ブロック内接合・同一個体と距離	備 考
ブロック 1	12-11(10-20)	100×40 帯状	礫剥片 5	13.85	—	—	
ブロック 2	12-10(02)	70×20 円形	土器片 4、スクレイパー 3、 剥片・碎片 693、礫剥片 3、 琥珀 など 2	13.85	—	—	焼土 2 とセ ット
ブロック 3	12-10(22) 12-10(23) 12-10(32) 12-10(33) 12-11(00) 12-11(01) 12-11(10) 12-11(11) 12-11(20) 12-11(21) 12-11(30) 13-10(03) 13-11(00)	410×140 不整形	土器 10、土器片 76、 スクレイパー 9、荒割り礫 4 剥片・碎片 299、礫器・礫 58 琥珀 その他 4	13.73 ～ 14.08	5 小ブロック (礫の分布にもとづ く)	6 組 (土器 3 組、礫器 3 組) 最大距離 4 m 強 (土器個 体番号 3 による)	ピット 2 を 含む
ブロック 4	12-11(30)	85×70 円形	スクレイパー 1、剥片・碎片 13	13.92	—	—	焼土 1 とセ ット
ブロック 5	12-11(33) 12-12(30) 13-11(03) 13-11(13) 13-12(00) 13-12(01) 13-12(10)	190×150 不整形	土器 1、土器片 5 剥片・碎片 9、礫器 1	13.81	—	1 組 (土器 1 組) 140 cm	1 号墓の上 部でその墓 に伴う
ブロック 6	12-12(10) 12-12(11) 12-12(20) 12-12(21)	130×110 不整形	土器 1、剥片・碎片 25 礫器・礫 11	13.97	—	1 組 (土器 1 組) 60 cm	5 号墓上お よび周辺
ブロック 7	12-12(22) 12-12(31) 12-12(33) 13-12(01) 13-12(02)	190×150 不整形	土器 2、土器片 2 スクレイパー 2 剥片・碎片 88 礫器・礫 17	13.81	—	3 組 (土器 1 組、礫 2 組) 90 cm	4 号墓上お よび周辺
ブロック 8	13-12(12) 13-12(13) 13-12(22) 13-12(23) 13-12(32) 13-12(33) 13-13(10) 13-13(11) 13-13(20) 13-13(21) 13	320×160 不整形	土器 5、土器片 23、 スクレイパー 7、石核 2、 原石 1、剥片・碎片 93、 礫器・礫 24、瑪瑙 1、 その他 1	13.86	3 小ブロック (礫の分 布にもとづく)	4 組 (土器 3 組、礫 1 組)	
ブロック 9	13-11(23) 13-11(33) 13-12(10) 13-12(20) 13-12(30)	240×110 不整形楕円 形	土器 1、土器片 4、 スクレイパー 3、礫器・礫 15	13.89	—	2 組 (土器 1 組、礫 1 組) 2 m 強	
ブロック 10	13-11(22) 13-11(32)	160×60 楕円形	土器 1、土器片 2、 剥片・碎片 15	13.99	—	1 組 (土器 1 組) 150 cm	
ブロック 11	14-11(30) 14-11(31) 15-12(00) 15-12(01) 15-12(02) 15-12(11)	180×120 不整形	土器 4、土器片 9、 スクレイパー 3、剥片・碎片 266、礫器・礫 11、有孔礫 1、 瑪瑙 1、滑石製平玉 1、 その他 1	13.94	—	2 組 (土器 2 組) 210 cm	
ブロック 12	14-11(21) 14-11(22) 14-11(31) 14-11(32) 14-11(33)	130×120 卵形	土器 1、土器片 1、 スクレイパー 10、剥片・碎片 1,722、礫器・礫 25、 滑石製平玉 4	13.85	—	3 組 (土器 1 組、礫 2 組) 90 cm	
ブロック 13	14-10(12) 14-10(13) 14-10(22) 14-10(23)	160×70 不整形	土器 1、土器片 4、 スクレイパー 5、剥片・碎片 13、礫器・礫 4、有孔礫 1	13.86	—	—	
ブロック 14	11-14(31) 11-14(32)	110×30 帯状形	土器 1、土器片 2、 剥片・碎片 4	13.65	—	1 組 (土器 1 組) 1 m	沢
ブロック 15	11-14(23) 11-14(33) 12-14(03) 12-14(20) 12-14(21) 12-14(22) 12-14(30) 12-14(31)	310×230 扇状	土器 3、土器片 17、 スクレイパー 9 剥片・碎片 38 礫器・礫 9	13.74 ～ 13.85	沢の肩部に土器個体番 号 11 の破片が集中、そ の周辺とくに沢の中央 へ向って遺物が点在	1 組 (土器 1 組) 120 cm	沢

7) (第52図) が出土した (表11)。

(3) 焼土の性格と時期

2個所の焼土は、墓地のなかに形成されており、遺物集中区一ブロックにおきかえると焼土1がブロック4、焼土2がブロック2となる (5-5, 第23図)。

2個所の焼土は、埋葬儀礼に伴う火焚場にあたり、煮沸作業などがここで行なわれたものと推定される (重松1972)。したがって、その時期はこの墓地が営まれた頃 (詳細は7-4) である。

4 ブロック

(1) ブロックの認定と名称

遺跡における遺物のまとりをブロックという。とくにブロックの分析は、旧石器時代の遺物や遺跡の研究で伝統的におこなわれている。

ここでは、それとほぼ同じ方法でブロックをとらえ、墓地の研究に適用しようと思う。

まず、ブロックはあくまで視覚的にとらえられる遺物のまとまり、という範囲で認定した。その際、墓の埋土中などは対象から除外し、あくまで墓の上部を含む、いわゆる遺構外部の遺物のまとまりに限定した。

ブロックを認定する場合、土器片と礫器・礫の分布を別々に調べ (6-2-3および6-3-(2)-2)、それぞれのブロックを認定し、相互に重複するものは1ブロックとして再編成した。その結果、遺跡全域で15ブロックを認定、ブロック1からブロック15まで番号を付した (表8および第23図)。

また、黒曜石製石器や剝片・碎片は、分布状況が散漫であったり (第38図)、土器片あるいは礫器・礫のまとまりと重複したりする (第42図) ため、ブロック全体に後から、組み込むことが可能なものは組み込むという手

続きをとった。

(2) ブロックの様相

この遺跡では、7基の土墳墓と2個所の焼土のほかに、土器や石器などが集中する大小15のブロックを認定できた。各ブロックの様相を表8に示す。

① ブロックの形成された場と規模・形状

表8と第23図とにもとづけば、ブロックの形成された場はつぎの3群に大別できよう。

I群 墓と重複したりきわめて近接したりといった、いわば墓群に入り込んだ位置に形成されたもので、ブロック2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10で構成される1群である。さらに、これらの複数のブロックは直接墓を構成するブロック5と、そうでない残りのブロックがみられ、後者にはブロック2やブロック4のように焼土と組み合わせとなって形成されたものも含まれる。ブロックの規模は、もっとも大きなもので長径が4 m強 (ブロック3) からもっとも小さなもので長径が約70cm (ブロック2) と多様である。形状は、ブロック2やブロック4のように焼土と組み合わせになるものは、それを中心に円形に形成される以外、定形的な形状を示さず、そのこと自体がブロックのもつ性格を反映しているようである。

II群 I群のブロックの北側では2～4 mの空間によってへだてられるもので、標高13.8～13.9 m代の比較的平坦な地点に形成されている。ブロック11, 12, 13がそれにあたる。ブロックの規模は、長径が130～180 cmでほぼ同じ大きさを示し、形状も不整ないし卵形でよく似ている。

III群 I群のブロックとはもっとも近いもので約8 mの空間によってへだてられた、南西側の小沢に形成されているもので、ブロック14, 15の大小2つのブロックからなる。いずれも土器や石器などを投棄した状況を示している。

② 遺物組成

a ブロック別にみた遺物組成

ブロック 1

礫剥片 5 点 (礫番号103, 104, 110, 131, 132) からなる。

ブロック 2

帰属不明土器片 4 点, スクレイパー 3 点 (石器番号15, 29, 50), 剥片・碎片693点, 礫剥片 3 点 (礫番号113, 129, 134), 琥珀 1 点 (番号 4), その他 1 点 (番号 7) からなる。

ブロック 3

土器10個体分 (土器個体番号 3, 4, 6, 7, 8, 11, 28, 30, 34, 35), 帰属不明土器片76点, スクレイパー 9 点 (石器番号 7, 9, 18, 23, 26, 39, 41, 45, 94), 荒割り礫 4 点 (石器番号110, 112, 113, 114), 剥片・碎片299点, 分割礫23点 (礫番号 4, 18, 21, 32, 33, 34, 35, 36, 41, 42, 48, 52, 53, 55, 57, 58, 59, 60, 64, 66, 75, 77, 78), 礫剥片21点 (礫番号101, 102, 107, 111, 112, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 133, 134, 141, 142, 144, 146, 149, 150, 156), 剝離痕礫 1 点 (礫番号177), 礫・小礫11点 (礫番号190, 204, 207, 212, 213, 215, 217, 218, 221, 226, 228), 磨石 2 点 (礫番号233, 234) からなる。

ブロック 4

スクレイパー 1 点 (石器番号 4), 剥片・碎片13点からなる。

ブロック 5

土器 1 個体分 (土器個体番号 1), 帰属不明土器片 5 点, スクレイパー 1 点 (石器番号61), 剥片・碎片 9 点, 分割礫 1 点 (礫番号73) からなる。

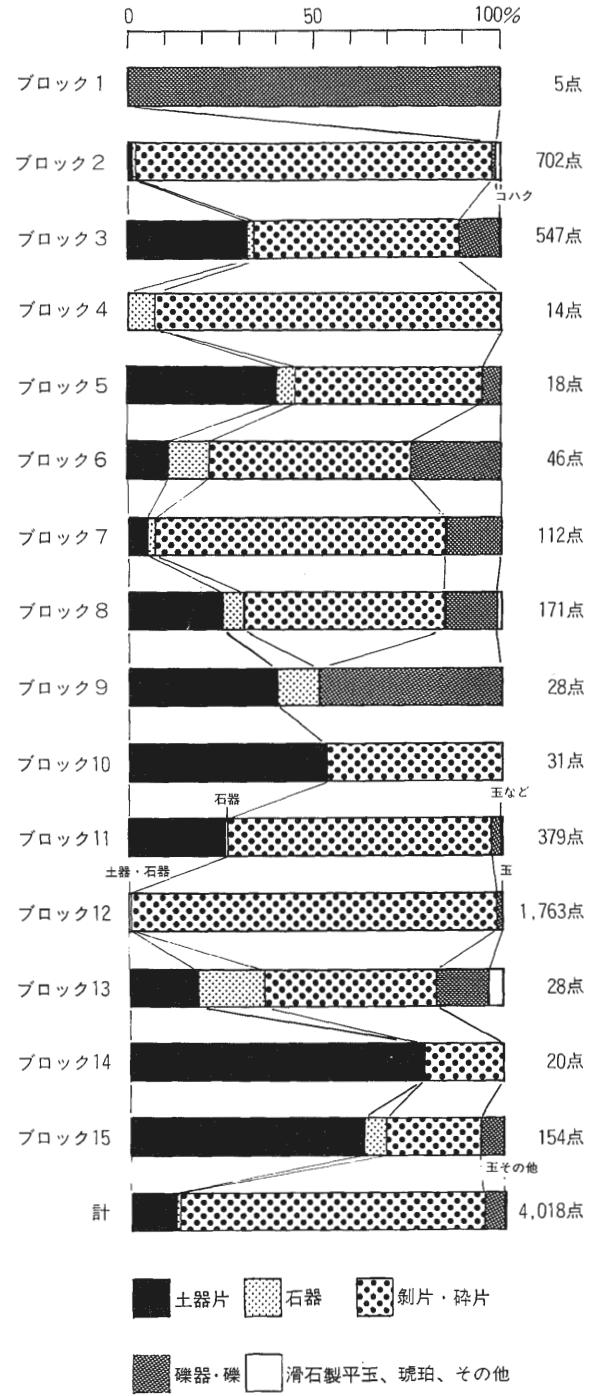
ブロック 6

土器 2 個体分 (土器個体番号 1, 9), 帰属不明土器片 3 点, スクレイパー 5 点 (石器番号12, 14, 19, 22,

43), 剥片・碎片25点, 分割礫 5 点 (礫番号 8, 13, 20, 26, 61), 礫剥片 2 点 (礫番号115, 116), 礫 4 点 (礫番号185, 199, 206, 210) からなる。

ブロック 7

土器 2 個体分 (土器個体番号 1, 11), 帰属不明土器片 2 点, スクレイパー 2 点 (石器番号 8, 28), 剥片・碎片88点, 分割礫12点 (礫番号 1, 5, 6, 9, 10, 14, 44, 50, 56, 67, 68, 76), 礫剥片 4 点 (礫番号108, 109, 119, 136), 礫 2 点 (礫番号183, 184) からなる。



第22図 ブロック別にみた遺物組成

ブロック 8

土器 5 個体分（土器個体番号 7, 9, 10, 11, 18）, 帰属不明土器片 23 点, スクレイパー 7 点（石器番号 16, 17, 30, 34, 67, 78, 90）, 石核 2 点（石器番号 105, 107）, 原石 1 点（石器番号 118）, 剝片・碎片 93 点, 分割礫 12 点（礫番号 2, 11, 12, 15, 17, 27, 31, 40, 46, 47, 51, 70）, 礫剝片 3 点（礫番号 138, 147, 151）, 礫・小礫 9 点（礫番号 180, 181, 182, 196, 197, 201, 211, 222, 232）, 瑪瑙^{のう} 1 点（番号 1）, その他 1 点（番号 2）からなる。

ブロック 9

土器 1 個体分（土器個体番号 7）, 帰属不明土器片 4 点, スクレイパー 3 点（石器番号 11, 40, 76）, 分割礫 10 点（礫番号 7, 16, 22, 23, 24, 37, 71, 74, 79, 91）, 礫剝片 5 点（礫番号 105, 117, 135, 148, 152）, 礫 1 点（礫番号 193）からなる。

ブロック 10

土器 1 個体分（土器個体番号 7）, 帰属不明土器片 2 点, 剝片・碎片 15 点からなる。

ブロック 11

土器 4 個体分（土器個体番号 3, 6, 24, 27）, 帰属不明土器片 9 点, スクレイパー 3 点（石器番号 3, 52, 79）, 剝片・碎片 266 点, 分割礫 3 点（礫番号 45, 81, 82）, 礫剝片 7 点（礫番号 120, 121, 145, 160, 161, 162, 165）, 小礫 1 点（礫番号 230）, 滑石製平玉 1 点（土壌水洗による）, 有孔礫 1 点（番号 1）, その他 2 点からなる。

ブロック 12

土器 1 個体分（土器個体番号 6）, 帰属不明土器片 1 点, スクレイパー 9 点（石器番号 13, 46, 55, 80, 83, 84, 85, 86, 98）, 石核 1 点（石器番号 109）, 剝片・碎片 1,722 点, 分割礫 16 点（礫番号 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100）, 礫剝

片 9 点（礫番号 166, 167, 168, 169, 170, 171, 173, 175, 192）, 滑石製平玉 4 点（土壌水洗による）からなる。

ブロック 13

土器 1 個体分（土器個体番号 3）, 帰属不明土器片 4 点, スクレイパー 5 点（石器番号 31, 32, 47, 49, 70）, 剝片・碎片 13 点, 分割礫 2 点（礫番号 30, 49）, 礫 2 点（礫番号 186, 216）, 有孔礫 1 点（番号 2）からなる。

ブロック 14

土器 1 個体分（土器個体番号 10）, 帰属不明土器片 2 点, 剝片・碎片 4 点からなる。

ブロック 15

土器 3 個体分（土器個体番号 10, 11, 23）, 帰属不明土器片 17 点, スクレイパー 9 点（石器番号 5, 20, 27, 36, 38, 71, 73, 81, 82）, 剝片・碎片 38 点, 分割礫 4 点（礫番号 28, 29, 39, 54）, 礫・小礫 5 点（礫番号 194, 195, 200, 220, 224）からなる。

b 遺物組成の特徴

各ブロックの遺物量をみると、多寡が目につく。もっとも遺物量が多いブロック 12 は、1,763 点と他のブロックの出土量を圧倒している。出土量が 300 点をこえるブロックは、ブロック 2（702 点）、ブロック 3（547 点）、ブロック 11（379 点）の 3 箇所、100 点以上 300 点未満のブロックはブロック 7（112 点）、ブロック 8（171 点）、ブロック 15（154 点）の 3 箇所である。出土量が 100 点以下のブロックはブロック 1（5 点）、ブロック 4（14 点）、ブロック 5（18 点）、ブロック 6（46 点）、ブロック 9（28 点）、ブロック 10（31 点）、ブロック 13（28 点）、ブロック 14（20 点）の 8 箇所である。

このように、出土遺物量が 300 点をこえるブロックが 3 割強、100 点以下のブロックが 5 割強、その中間の出土量のブロックが 2 割という割り振りになる。

各ブロックから出土する遺物は、つぎのように類別できよう。

① 基本要素：土器（片）、石器（スクレイパー）、剝片・破片、礫器・礫

② 追加要素：滑石製平玉、有孔礫、琥珀、瑪瑙
いま、①と②からなるものを「完全組成型ブロック」と呼ぶことにするなら、ブロック 2、3、8、11、12、13がそれに該当する。

また、②はみられずしかも①のうち 1～2 種類の遺物しか所有していないものを「不完全組成型ブロック」と呼ぶことにするなら、ブロック 1、4、10、14がそれに該当する。

そして、①からなり②が欠落している、いわば先の 2 種類の間間的なものを「中間組成型ブロック」と呼ぶなら、ブロック 5、6、7、9、15がそれに該当する。

このようにみると、この遺跡のブロックは、「完全組成型」と「中間組成型」で全体の約 7 割強を占めていたことになり、「不完全組成型」の 3 割弱を大きくうわまわっている、という特徴をうかがうことができる。さらに、「完全組成型ブロック」はおおむね100点以上の遺物からなる。ただ、ブロック13だけが例外である。「中間型組成型ブロック」は、ブロック7と15以外の3ブロックが100点以下、「不完全組成型ブロック」にいたってはすべて100点以下の少ない遺物量によって形成されている、という特徴を読み取ることができる。

それではつぎに、この3つの類型別にみたブロックの遺物組成の特徴を述べることにする。

まず「完全組成型ブロック」では、剝片・破片がそれぞれのブロックの中に占める割合が非常に多い、という点が目につく。つまり、3個所のブロック（ブロック2、11、12）で全体の7割以上、もっとも多いもので9割8分前後と高率を示し、15ブロックを総合した遺物量に占める剝片・破片の割合、8割強(第22図最下段)とほぼ同率かまたはそれを大きくうわまわっている。残る3ブロックでは、もっとも低率のもの（ブロック13）でも5割を

ややしたまわる程度で、おおよそ5割のラインを越えるという傾向がうかがえる。

ところが、「中間組成型ブロック」ではブロック全体に剝片・破片の占める割合・8割に達するものはない。ブロック7がそれにやや近い7割9分を示すのが最高で、5割強が2ブロック（ブロック5、6）、2割5分が1ブロック（ブロック15）、さらに全く剝片・破片を含まないブロックが1個所（ブロック9）と続く。剝片・破片のこのようなあり方は、土器片と礫器・礫（ブロック9）などが比較的バランスを保って組成し、ブロックを形成しているものを含んでいる、ということを示している。そのようななかで剝片・破片が卓越するブロック7や、土器片が卓越するブロック15のような、いわば前者が「完全組成型ブロック」に後者が「不完全組成型ブロック」にそれぞれ似た特徴を示すブロックもわずかにみられる点が注目される。

「不完全組成型ブロック」では、土器片と剝片・破片の組み合わせによるもの（ブロック10、14）のほかに礫剝片のみによるもの（ブロック1）と剝片・破片が石器を大きくうわまわるもの（ブロック2）がみられる。一種類の遺物で形成されるブロックは別として、複数の遺物で形成されるブロックでは、どちらか一方の遺物量が他を大きくうわまわる、という傾向をうかがうことができる。

(3) 類型別ブロックの配置と特徴

ここでは、5-5-(2)-①でみたⅠ群からⅢ群のブロックに、5-5-(2)-②で類型化した「完全組成型ブロック」、「中間組成型ブロック」、「不完全組成型ブロック」がどのように配置されているのかをみる（表9）。

まず、「完全組成型ブロック」はⅠ群、Ⅱ群にそれぞれ3個所ずつみられるが、Ⅲ群には含まれていない。さらに、Ⅱ群のブロックはもとよりⅠ群においても墓とは

表 9 類型別にみたブロックの配置

	完全組成型ブロック	中間組成型ブロック	不完全組成型ブロック
Ⅰ 群（9 個所）	2、3、8（3 個所）	5、6、7、9（4 個所）	4、10（2 個所）
Ⅱ 群（3 個所）	11、12、13（3 個所）	無	無
Ⅲ 群（2 個所）	無	15（1 個所）	14（1 個所）

注：ブロック 1 は不完全組成型だがⅠ～Ⅲ群外のため表からは除いた

全く重複せず一定の距離を保って配置される，という特徴を示している。

「中間組成型ブロック」はⅠ群に4個所，Ⅲ群に1個所みられるが，Ⅱ群には含まれていない。そのうち，Ⅰ群の3個所一ブロック5，6，7，はそれぞれ1号墓，5号墓，4号墓の墳口部と裾部とに配置される，という特徴を示している。

「不完全組成型ブロック」はⅠ群に2個所，Ⅲ群に1個所みられ，Ⅱ群には含まれていない。Ⅲ群のブロックはもとより，Ⅰ群においても墓とは重複しない，という配置上の特徴を読み取ることができる。

以上のように，墓の墳口部やその裾部に形成されるブロックは「中間組成型ブロック」のうちの3ブロックに

限定され，他のブロックは墓とは一定の距離を保ち，あるいは大きくかけはなれた地域に配置されることが理解できた。

それではつぎに，これらのブロック間の関係とブロックの形成についてあわせてみてみることにする。

(4) ブロック間の相互関係とその形成について

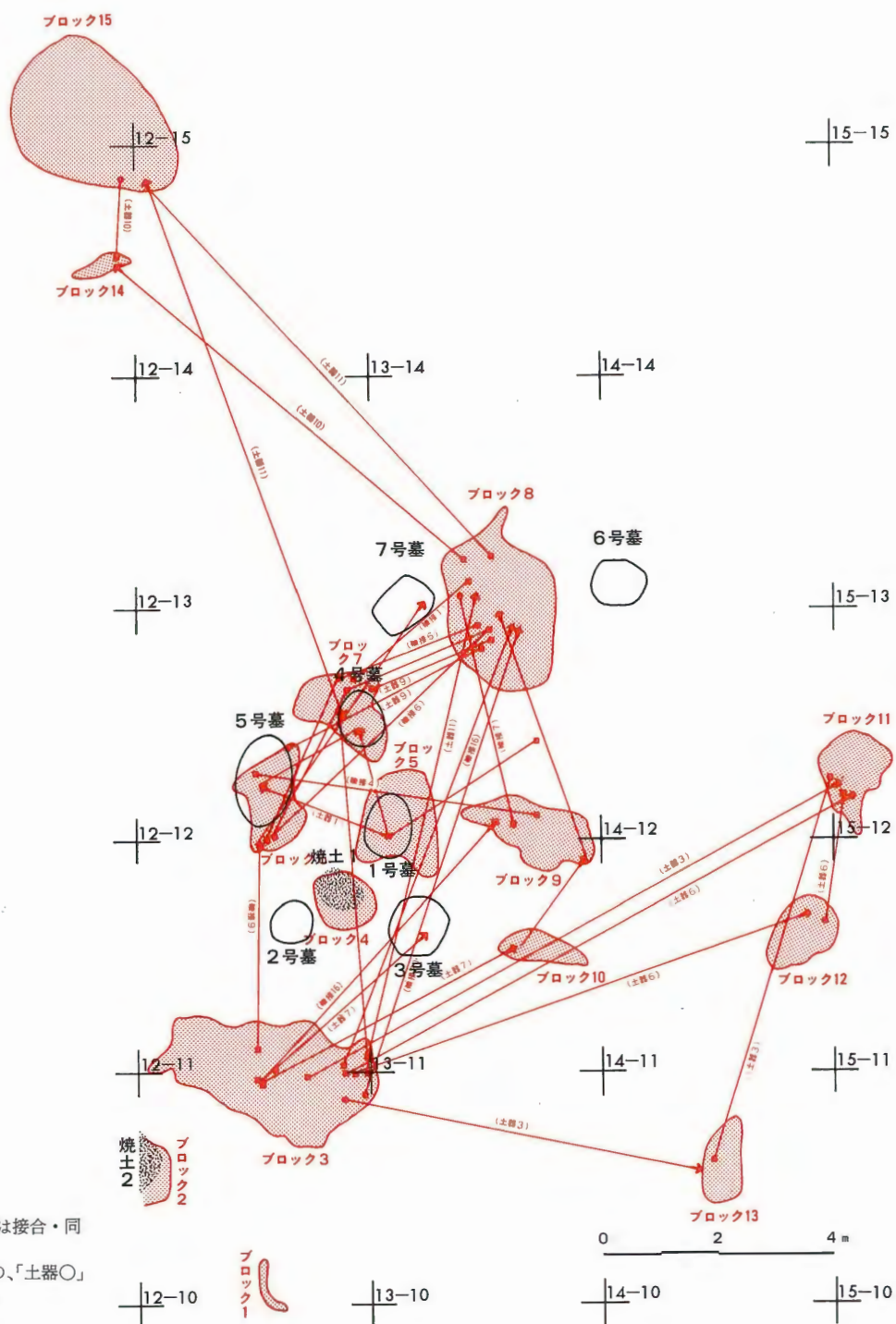
遺物の接合や同一個体破片の分布状況にもとづくブロック間の相互関係を表10に示す。接合や同一個体資料がみられず，したがって直接他のブロックとの関係がたどれなかったブロックは，ブロック1，ブロック2，ブロック4の3個所であるが，残りの12ブロックについては相互関係を示すことができた。

表10 ブロック間の相互関係

ブ ロ ッ ク	関連ブロック	接合・同一個体資料
ブロック 1	—	—
ブロック 2	—	—
ブロック 3 (9個所)	ブロック 6	礫接合資料番号 9
	ブロック 7	土器個体番号 11
	ブロック 8	土器個体番号 7
		土器個体番号 11
		礫接合資料番号 8
	ブロック 9	土器個体番号 7
		礫接合資料番号 16
	ブロック 10	土器個体番号 7
	ブロック 11	土器個体番号 3
	ブロック 12	土器個体番号 6
	ブロック 13	土器個体番号 3
	ブロック 15	土器個体番号 11
ブロック 4	—	—
ブロック 5 (2個所)	ブロック 6	土器個体番号 1
	ブロック 7	土器個体番号 1
ブロック 6 (5個所)	ブロック 3	礫接合資料番号 9
	ブロック 5	土器個体番号 1
	ブロック 7	土器個体番号 1
		礫接合資料番号 6
	ブロック 8	土器個体番号 9
		礫接合資料番号 6
	ブロック 9	礫接合資料番号 4
ブロック 7 (5個所)	ブロック 3	土器個体番号 11
	ブロック 5	土器個体番号 1
	ブロック 6	土器個体番号 1
		礫接合資料番号 6
	ブロック 8	土器個体番号 9
		礫接合資料番号 1
		礫接合資料番号 6
	ブロック 15	土器個体番号 11

ブ ロ ッ ク	関連ブロック	接合・同一個体資料
ブロック 8 (6個所)	ブロック 3	土器個体番号 7
		土器個体番号 11
		礫接合資料番号 8
	ブロック 6	土器個体番号 9
		礫接合資料番号 6
	ブロック 7	土器個体番号 9
		礫接合資料番号 1
		礫接合資料番号 6
	ブロック 9	土器個体番号 7
		礫接合資料番号 1
	ブロック 10	土器個体番号 7
	ブロック 14	土器個体番号 11
ブロック 9 (4個所)	ブロック 3	土器個体番号 7
		礫接合資料番号 16
	ブロック 6	礫接合資料番号 4
	ブロック 8	土器個体番号 7
		礫接合資料番号 7
	ブロック 10	土器個体番号 7
ブロック 10 (2個所)	ブロック 3	土器個体番号 7
	ブロック 9	土器個体番号 7
ブロック 11 (2個所)	ブロック 3	土器個体番号 3
		土器個体番号 6
	ブロック 12	土器個体番号 6
ブロック 12 (2個所)	ブロック 3	土器個体番号 6
	ブロック 11	土器個体番号 6
ブロック 13 (2個所)	ブロック 3	土器個体番号 3
	ブロック 11	土器個体番号 3
ブロック 14 (2個所)	ブロック 8	土器個体番号 10
	ブロック 15	土器個体番号 10
ブロック 15 (2個所)	ブロック 3	土器個体番号 11
	ブロック 7	土器個体番号 11

第23図 ブロック間の相互関係



それによると、他のブロックとの関係がもっとも多く認められたのがブロック3で、9個所のブロックと関係する。ついでブロック8の6個所、ブロック6、7の5個所、ブロック9の4個所と続き、残りの7ブロックは2個所のブロックとの関係を認めることができた。

さて、つぎに各ブロック間にみられた遺物の有無・あり方や頻度等が、個々のブロックの形成過程を反映していると仮定するなら、各々のブロックはつぎのように形成された、とみなされる。

まず、9個所ともっとも多くブロックと関連が認められたブロック3について、結論を述べれば、9個所のブロックは、ブロック3から土器や石器、剥片・碎片、礫などが移動した結果形成されたものである、ということである。つまり、ブロック3は、この発掘区のブロックの大半が形成される過程の起点にあたる、というわけである。そのうち、ブロック3からのみ器物が移動し形成されたと判断されるブロックは、ブロック10、11、12、13の4個所で、とくにブロック11、12、13の3ブロックは「土器個体番号3」あるいは「6」の双方もしくはどちらか一方を含む、ということできわめて接近した時期に形成されたものであろう。

ブロック5の形成についての直接の起点は解明されなかったが、ブロック6、ブロック7の2つのブロックとはほぼ同時に形成されたと判断されること、さらにブロック6はブロック3はもちろん、ブロック8(2個体分の接合)、ブロック9(礫接合番号4による)の3ブロックから土器や礫などがもたらされて形成されたこと、ブロック7はブロック3はもちろん、ブロック8(3個体分の接合)の2ブロックから土器や礫などがもたらされて形成されたこと、の理由によりその起点がブロック3かブロック8、あるいは双方に求められる、といえるだろう。ところでブロック8はその大部分がブロック3から器物がもたらされて形成されたと推定される(3個体分の接合)ので、ブ

ロック8から他のブロックへと器物がもたらされたとしても、その大部分の起点はブロック3である、と推定される。これと同じような解釈はブロック9にも適用されるだろう。

ブロック14はブロック8から、ブロック15はブロック3とブロック8から器物がもたらされて形成された、と推定されるブロックである。

以上のように、この墓地にみられたブロックは、ブロック3から土器や石器、剥片・碎片あるいは礫・礫器などが、直接あるいは間接もたらされて形成されたものである、ということが想定された。

(5) ブロックの性格

ここでは、(1)～(4)などの分析をもとにブロックの性格を考察する。

(1)～(4)までの分析によれば、この墓地に形成されたブロックはつぎに示す3～4の性格をもっていたと判断される。

1 作業場

ブロック2(焼土2)とブロック4(焼土1)の2個所がそれに相当する。

この墓地内での調理などは、これらの火焚場を中心に行われたものであろう。ただ、この2個所の火焚場が併用されたのか否か、あるいはⅠ期、Ⅱ期の特定などは直接確かめられたわけではない。

2 集積場

集積場にはつぎの4つの性格が与えられよう。つまり、中心的集積場、分枝集積場、中間的集積場そして墓の供献品としての集積である。

a 中心的集積場

ブロック3がそれに相当する。その特徴はつぎのようなものである。

- ① 遺物の分布範囲(床面積)が広く、もっとも大型

であること.

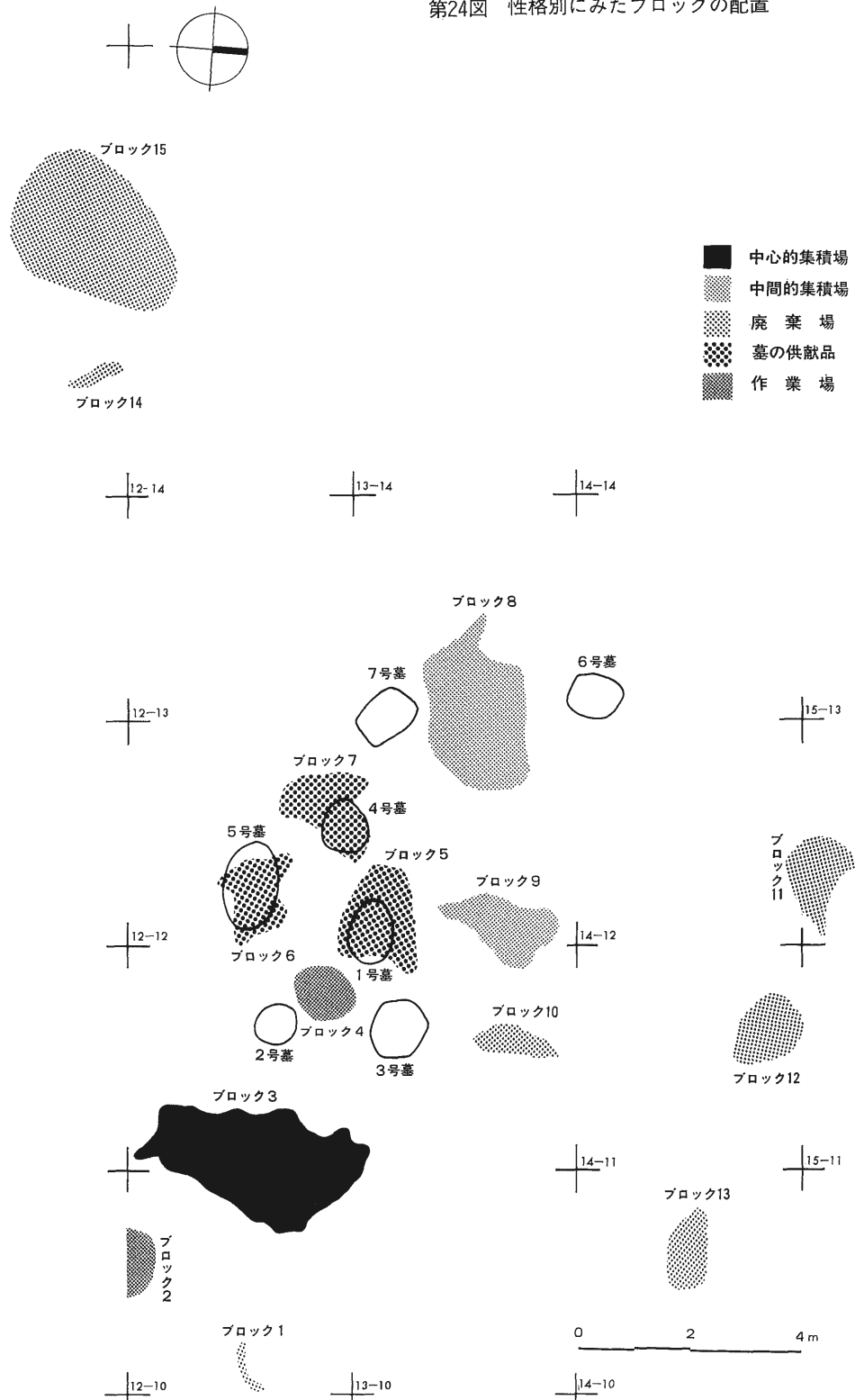
- ② 3〜5つの小ブロックから形成されていること.
- ③ 墓群に近接しているが重複しない場所に配置されること.
- ④ 遺物量が多く「完全組成型ブロック」であること.
- ⑤ 墓や他のブロックへはここを起点に器物がもたら

されたと想定されること.

b 中間的集積場

ブロック8と9がそれに相当する. いずれもブロック3から器物が持ち込まれている反面, d一墓の供献品などとして再度持ち出されている, という点でブロック3の性格に近いものである. しかし, とくにブロック9のよ

第24図 性格別にみたブロックの配置



うに形・内容とも小規模でありむしろ、ブロック8と組み合せとなって特定の埋葬—この場合5号墓が相当—に伴って形成されたとみられるものもある。

c 分枝集積場

中心的集積場から器物がもたらされて形成されたもので、ブロック10, 11, 12, 13を指す。いずれも小規模で、墓群から一定の距離をおいて配置されている。とくに、ブロック11, 12, 13で1群を形成している。ただ、これらの集積場はつぎに示すブロック14, 15のように廃棄の場、と断定できないまでもほぼそれに近い性格を想定することはできよう。

d 墓の供献品

ブロック5, 6, 7の3個所がそれに相当する。その形成過程や墓との関係などは先に示した(5-2-(4)や5-5-(4))とおりでである。

3 廃棄場

明らかに廃棄場の性格が与えられるのは、ブロック14と15の2個所である。これらは、墓群からかけ離れた沢に形成されるという点が第一の特徴である。さらに、ブロック15の「土器個体番号11」の破片分布(第29図)などは、投棄の状況をよく示しているものとみうけられる。

II-6 出土遺物

遺物の概要

ポプラ並木東地区遺跡の出土遺物の種類は、土器(片)、石鏃、スクレイパー、不定形石器、剝片・砕片、石核、荒割り礫、分割礫、礫剝片、剝離痕礫、磨石、琥珀、有孔礫、玉類(ガラス製、石製)などで総数7,143点である(表11)。

1 土器

(1) 出土土器概要

この遺跡からは、42個体分の土器と337点の帰属不明破片が出土した(表11)。そのうち、土壌墓から出土した土器は、6個体分の破片(14.3%)にすぎず、大部分は遺構外からのものである。遺構外ではほとんどが遺物集中区一ブロックを形成している(5-5参照)。

土器の器種は、坏、鉢、片口、注口、甕の5種類だが、破損品が多くを占めるため判別率は約4割程度である。

(2) 個体別にみた土器の特徴

個体番号1

出土・分布：1号墓埋土3層、同墓墳口部(ブロック5)、4号墓墳口部(ブロック7)、5号墓墳口部(ブロック6)のほか、3号墓に近接した所(13-11〔02〕)や13-12(21)～(22)、13-13(12)、14-13(13)の各グリッド第Ⅲ層から破片が出土した(第25図、第7図、第9図2、第15図1)。

表11 墓・ブロック・遺構外別出土遺物数量

	土器 個体数	土器破片 不明	石 鏃	スクレパー	不定形石器	削片・ 破片	石 核	荒削り 礫・石	分割 礫	礫 削片	剥離 痕礫	礫	小礫 その他	磨石・ 石皿	琥珀	有孔 礫	滑石製 卒玉	ガラス 玉	その 他
1号墓	1	3	0	1	0	320	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0
墳底						7												3	
埋土3	1	1				70													
埋土2		1				94													
埋土1		1		1		100													
第Ⅲ層	1					49													
2号墓	0	0	0	1	0	799	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
墳底						—													
埋土4						—													
埋土3						47						1							
埋土2						218													
埋土1				1		503													
第Ⅲ層				1		31													
3号墓	1	5	0	0	0	324	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	726	0	0
墳底						4											308		
埋土4・3	1	4				80											413		
埋土2		1				127											4		
埋土1						64											1		
第Ⅲ層	1					49							1						
4号墓	0	0	0	0	0	161	0	0	4	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0
墳底						0													
埋土3						0													
埋土2						84			2										
埋土1						46			2	2							2		
第Ⅲ層	1					31			2	1		2							
5号墓	2	3	0	1	0	115	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	17	0	0
墳底						0													
埋土3	1	2				37											13		
埋土2	1					28				2							2		
埋土1	1	1		1		24			1	1							2		
第Ⅲ層	1					26			3			2							
6号墓	0	0	0	0	0	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
墳底						0													
埋土3						1													
埋土2						0													
埋土1						7													
第Ⅲ層						15													
7号墓	2	1	0	1	0	87	0	0	2	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0
墳底						0													
埋土3						2													
埋土2						30			1				1						
埋土1	2	1		1		38			1				2						
第Ⅲ層		2				17													
小計	7	14	0	5	0	1,829	0	0	12	6	0	5	4	0	0	0	745	0	0
焼土1				1		13													
焼土2		4		3		693				3					1				
小計	0	4	0	4	0	706	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0
ブロック1						0				5									
ブロック2		4		3		693				3									
ブロック3	10	76		9		299		4	23	21	1	8	3	2	1				
ブロック4				1		13									3				
ブロック5	1	5		1		9			1										
ブロック6	2	3		5		25			5	2		4							
ブロック7	2	2		2		88			12	4		2							
ブロック8	5	23		7		93	2	1	12	3		7	2						2
ブロック9	1	4		3		0			10	5		1							
ブロック10	1	2				15													
ブロック11	4	9		3		266			3	7			1			1			2
ブロック12	1	1		9		1,722	1		16	9							4		
ブロック13	1	4		5		13			2			2				1			
ブロック14	1	2				4													
ブロック15	3	17		9		38			4			3	2						
その他遺構外	29	174	2	29	4	524	8	4	0	11	1	9	1	0	0	0	0	0	5
総計	42	337	2	92	4	5,644	11	9	100	76	2	41	13	2	4	2	750	3	9

凡 例 ①土器個体総数について、同一個体の破片が複数の遺構や地点にまたがる場合、その数に過不足のあることがある。それは墓出土の土器個体数についても同様である。例えば、5号墓の場合埋土3層からは個体番号22の破片が出土、埋土2層と埋土1層からは個体番号2の破片がそれぞれ出土している。この場合個体総数は当然2となる、などである。

②「焼土1」は「ブロック4」と、「焼土2」は「ブロック2」と重複するため、遺物組成や数量は同じである。

③墓の出土遺物の総数には、第Ⅲ層からの出土遺物を除いてある場合がある。

このような破片の出土・分布状況は、この土器が墓地内、例えばブロック3や13-12(21~22)グリッドなどで破壊の後、1号墓内には口縁部から胴部の破片を、また墳口部には同じく口縁部から胴部にかけての破片を副葬品として埋納したことを示す一方、残りの胴部あるいは底部破片を4号墓や5号墓の墳口部におそらく他の副葬品とともに供献したことを物語っている。

器種・文様など：口径16.6cm、器高18.7cm、底径8.7cmの甕。器表面は、細隆起線文(幅1~2mm)と縄文(RL)とによって装飾されている。まず、細隆起線文は頸部に限り、4~5mm間隔で5条巡っている。縄文は頸部下から胴部下半にかけて幅約3cmの斜行縄文と幅約1cmの横走縄文が組み合わせとなっている。施文手順は斜行縄文が最後に施文されている。

そのほかに、この土器の内面と表面の口縁部から胴部にかけてところどころに炭化物の付着や黒色化が著しく、煮沸に使用されていたことをうかがわせる。また、1号墓に副葬されていた破片の表面は赤色化しており、破壊後に顔料で塗彩、副葬品として埋納したことを示している(第32図3、第33図)。

個体番号2

出土・分布：5号墓の埋土1、2層に口縁部、胴部の破片計4点が埋納、遺構外(13-12〔10〕グリッド)では口縁部破片が1点出土している(第15図、第26図)。

器種・文様：波状口縁の鉢(計測不能)。胎土には砂利(径1~3mm)を多量に含んでいる。表面は摩滅が著しく観察はむずかしいが、羽状縄文が施文されているようである。

個体番号3

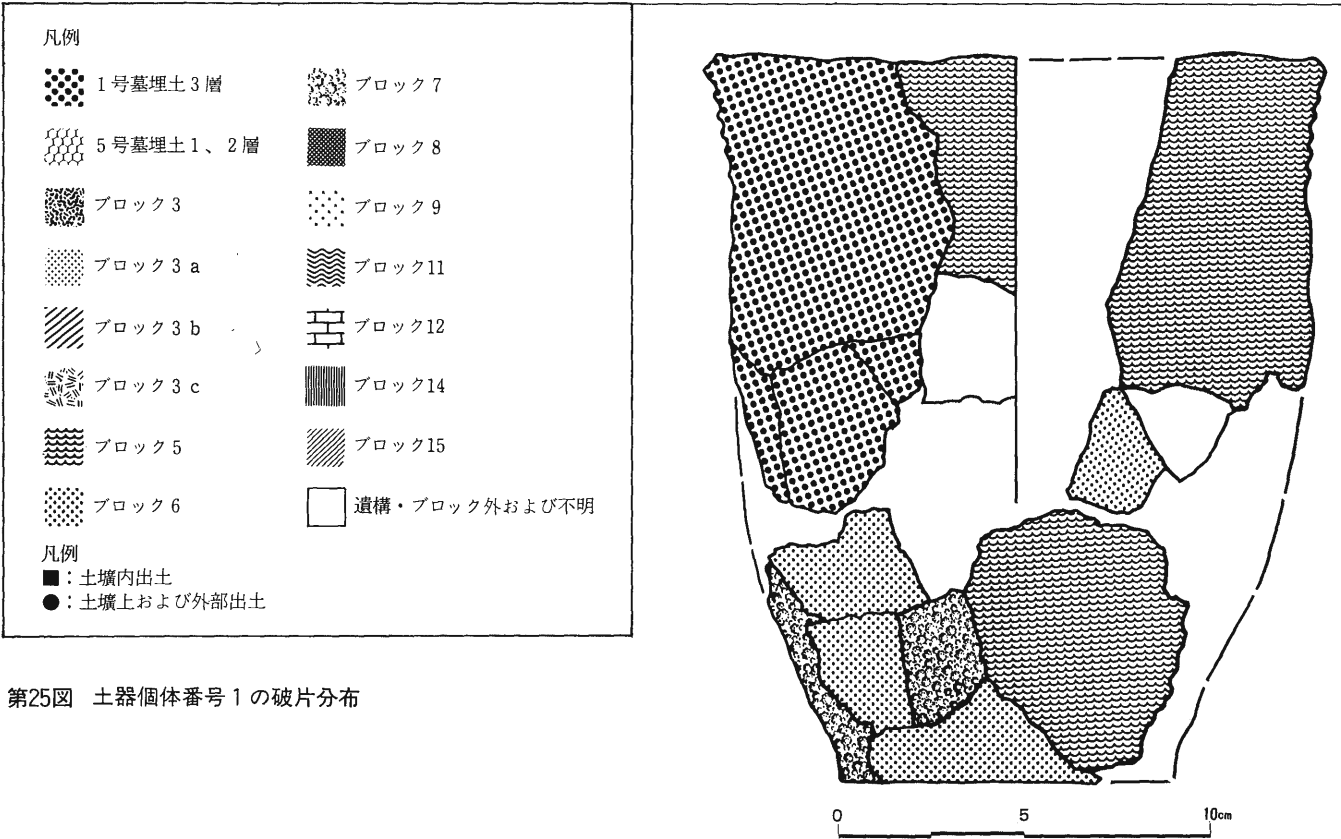
出土・分布：破片総数75点のうち、ブロック11、ブロック13、14-12(01)グリッドに各1点ずつ分布するほ

か、72点はブロック3に集中している。ブロック3のなかでは、長径140cm、短径80cmの範囲でひとつの集中区を形成しており、なかでも小ブロックa、bとした2個所に密集して出土した。

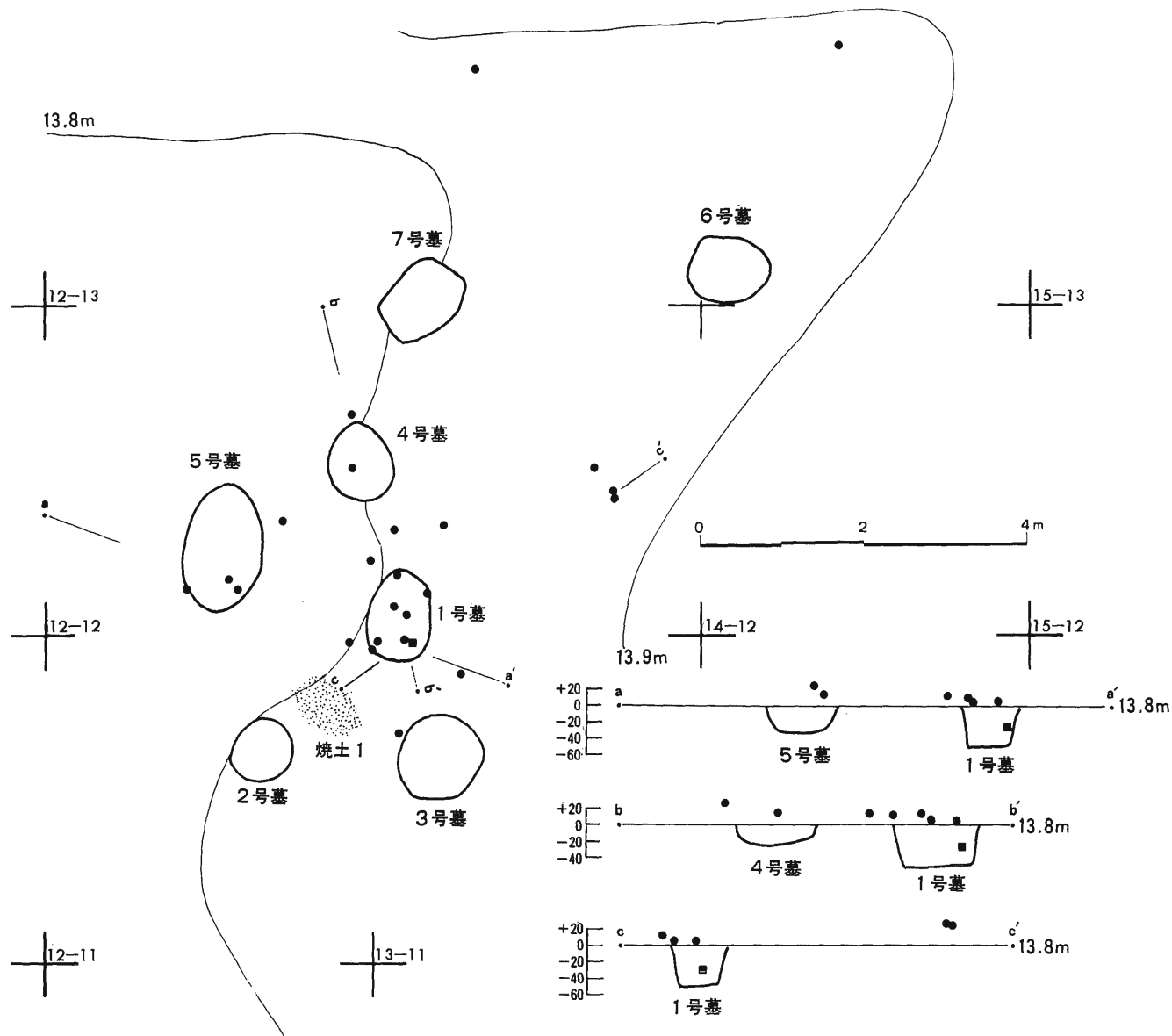
ブロック3での破片のあり方は、小ブロックaでは口縁部から底部まで比較的そろっているのに対し、小ブロックbではそれぞれの破片が不ぞろいで、とくに胴部下半の破片はみられない。小ブロックa、b以外には主に胴部破片が他の土器片などと混在している。このようなあり方は、この土器がこの場で破損した状況を物語っている。さらに、完形品にまでいたらないのは、ブロック11や13のほかにも破片が持ち出されていることを示している(第26図)。

器種・文様：口径22.8cm、器高26.6cm、底径10.0cmの甕。最大径は胴部にあるが、頸部が器高の約 $\frac{1}{6}$ と短く、ほぼ直立するという器形上の特徴は典型的な甕の形態を示してはいない。

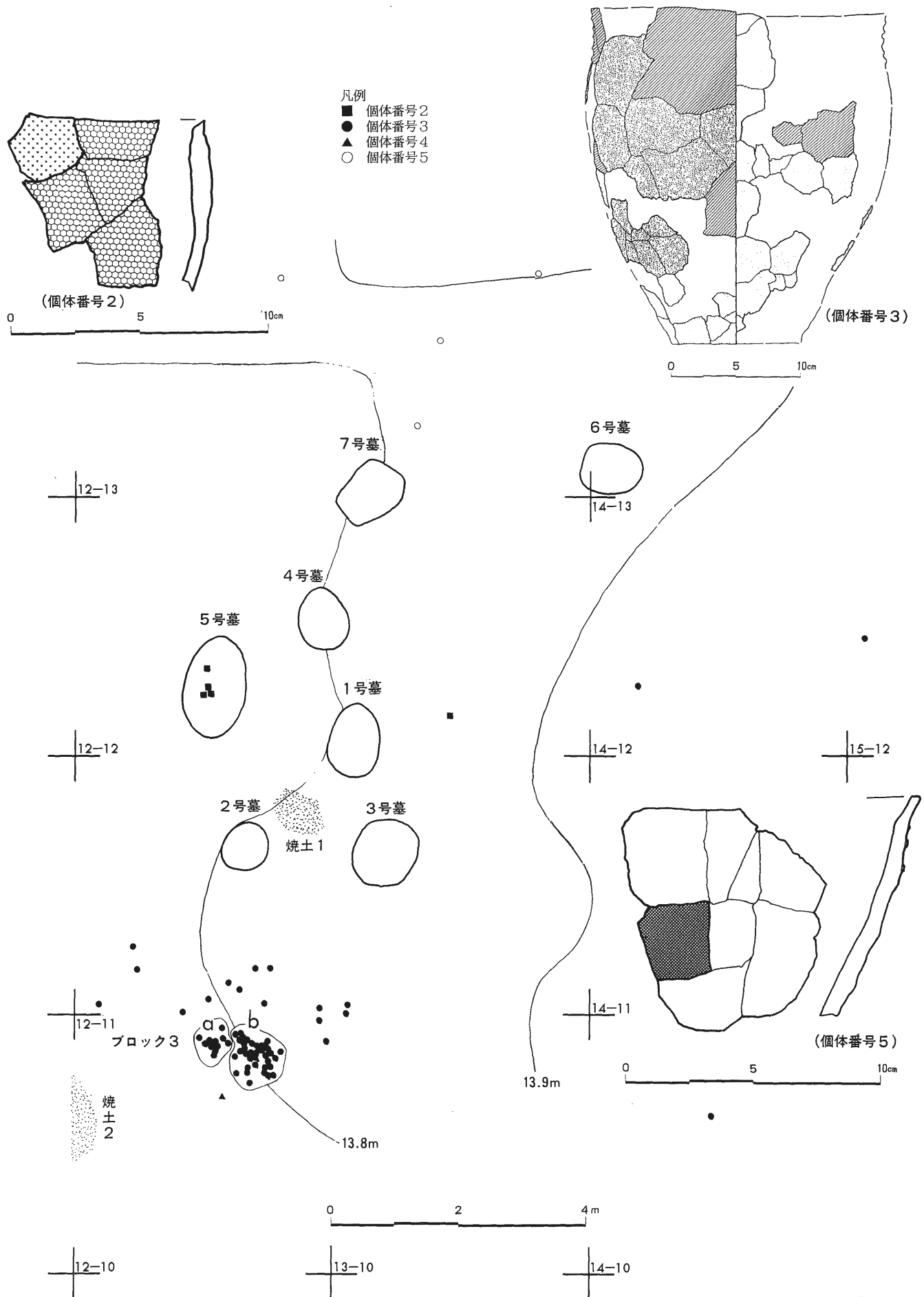
土器の表面は、隆起線文、刺突文、縄文(RL)によって装飾されている。まず、隆起線文は、頸部に限られ幅約2~3mmのものが5~8mm間隔で5列、横位に貼付された、いわば「貼付隆起線文」である。刺突文は2種類みられる。1つは径5~6mmの円形刺突文で、口縁部ないし頸部上半部に1~1.5cm間隔で口縁部にはほぼそうように巡らされる。器壁を貫通するものではなく、裏面に瘤状の脹らみを止めている。2つ目の刺突文は長さ約4mm、幅約2mmの小さな楕円状の浅いもので、つぎに記す縄文帯のへりにそって施文されている。観察が可能な部分から判断するなら、この刺突文の工具には、縄文原体の節の部分と棒又は篋状のものの先端との2種類が使い分けられている。前者は横位列の刺突に、後者は斜位列の刺突にそれぞれみることができる。さらに、この2種類の刺突文はいずれも縄文施文後に施されている。縄文は、胴部上半と下半が幅約2~2.5cmの横走、それには

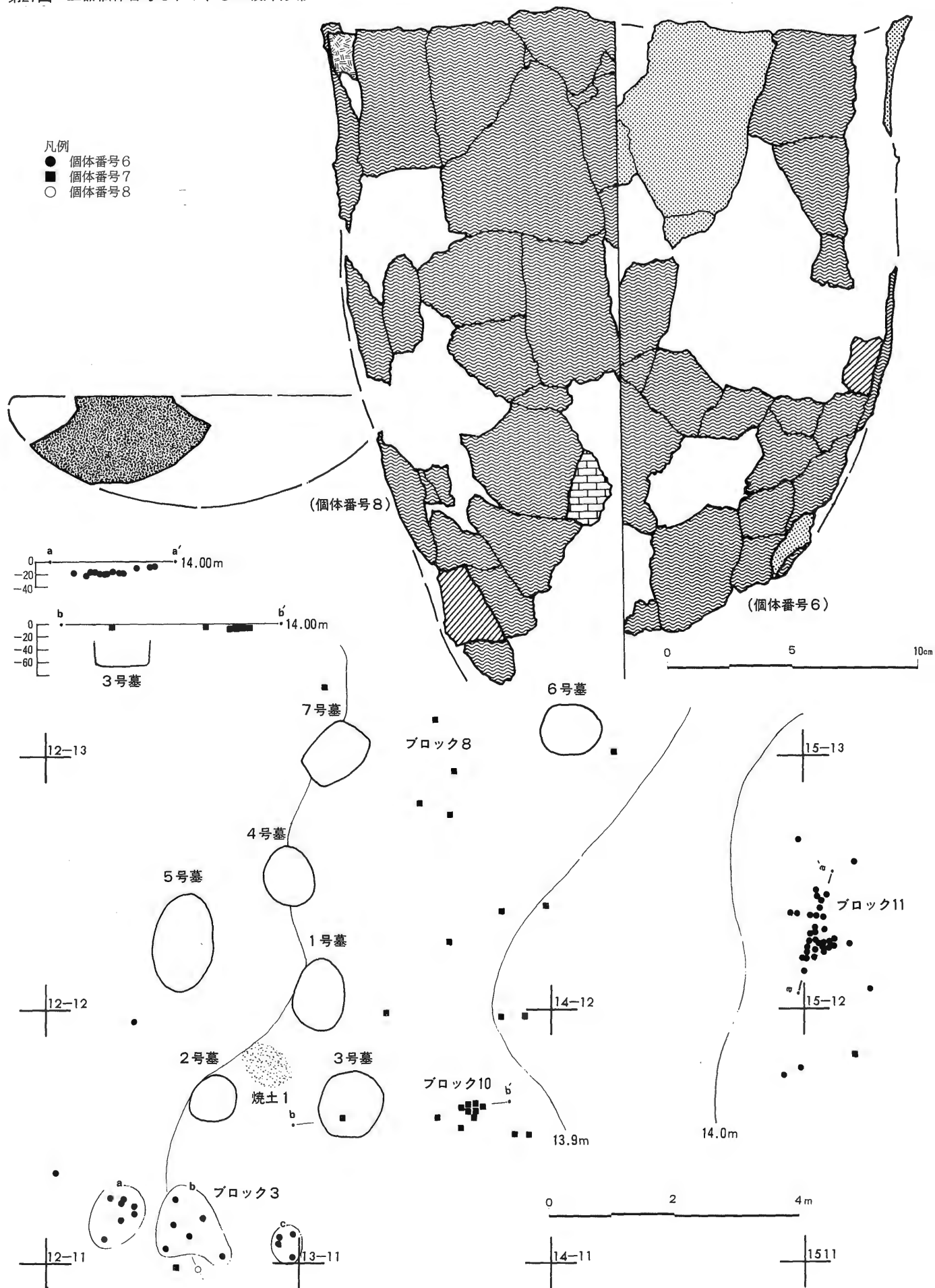


第25図 土器個体番号 1 の破片分布

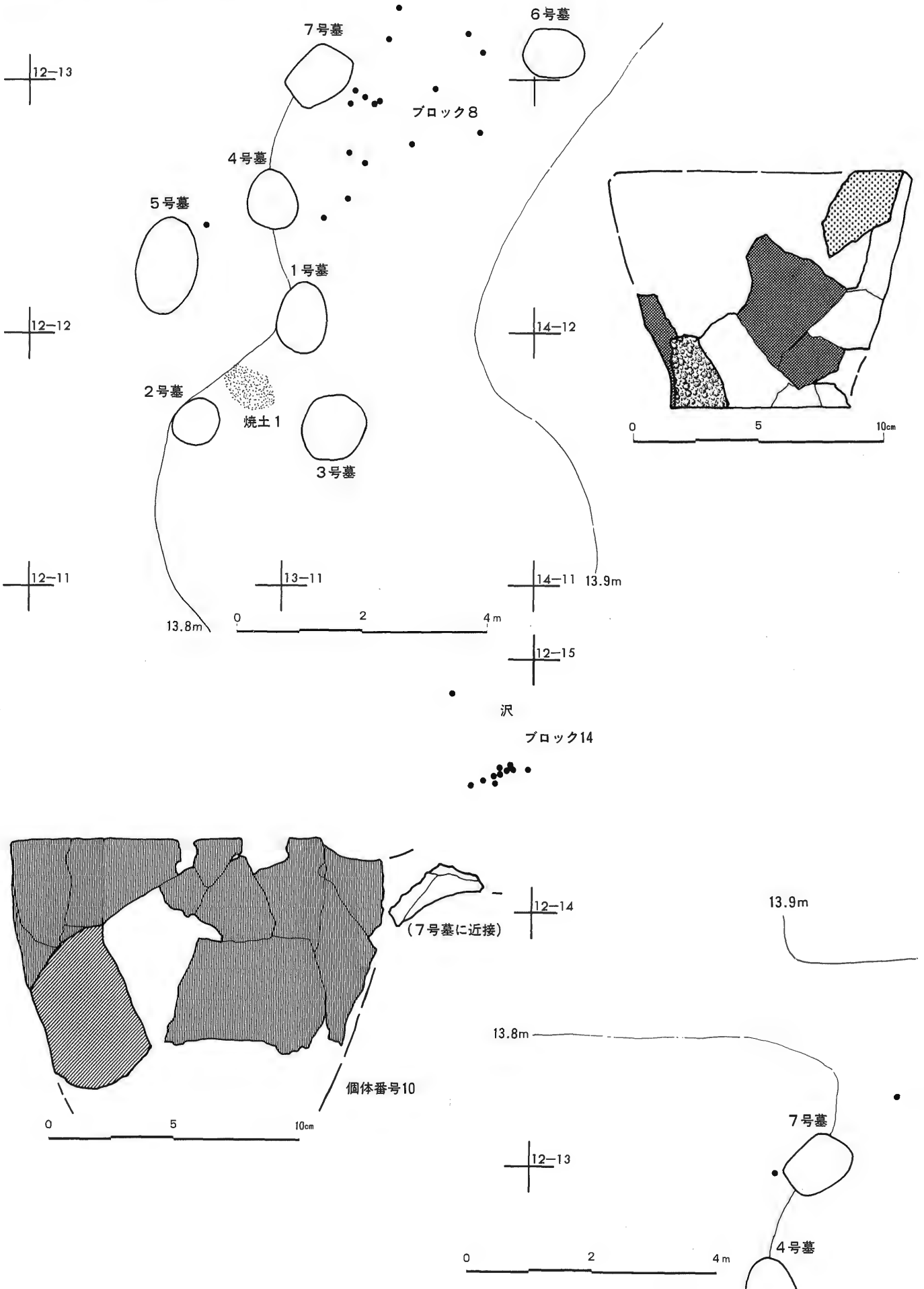


第26図 土器個体番号2、3、4、5の破片分布

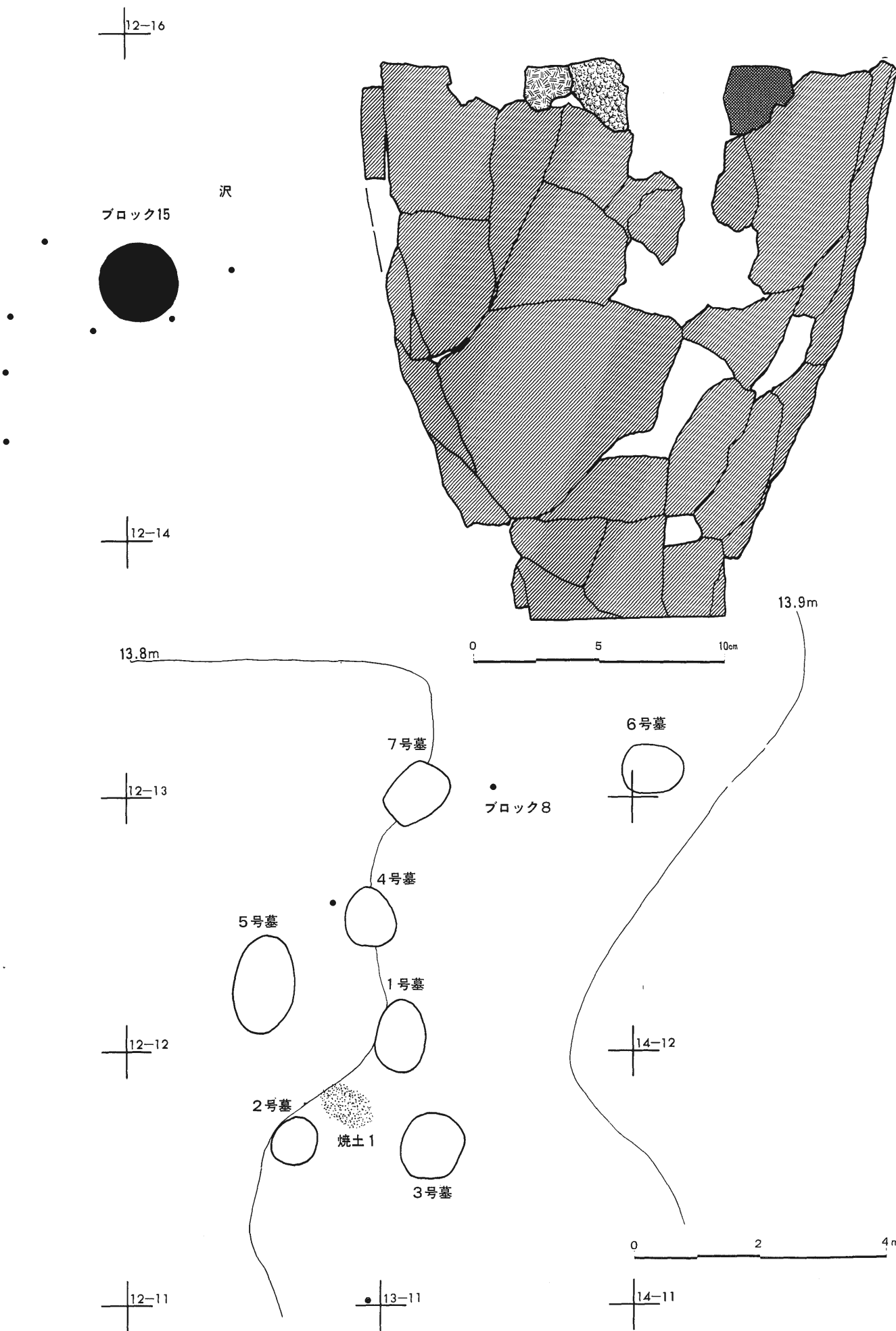




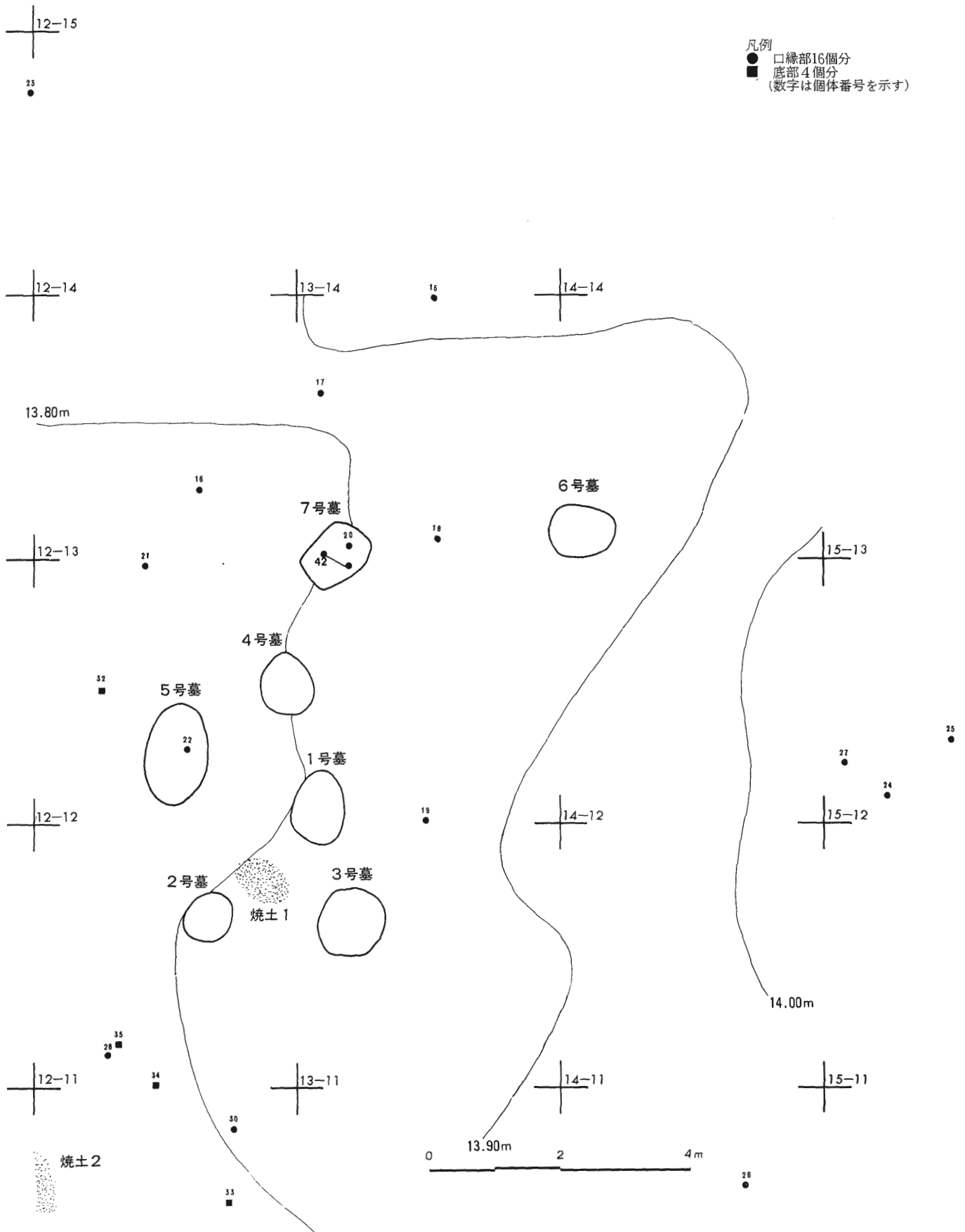
第28図 土器個体番号9(上)と10(下)の破片分布



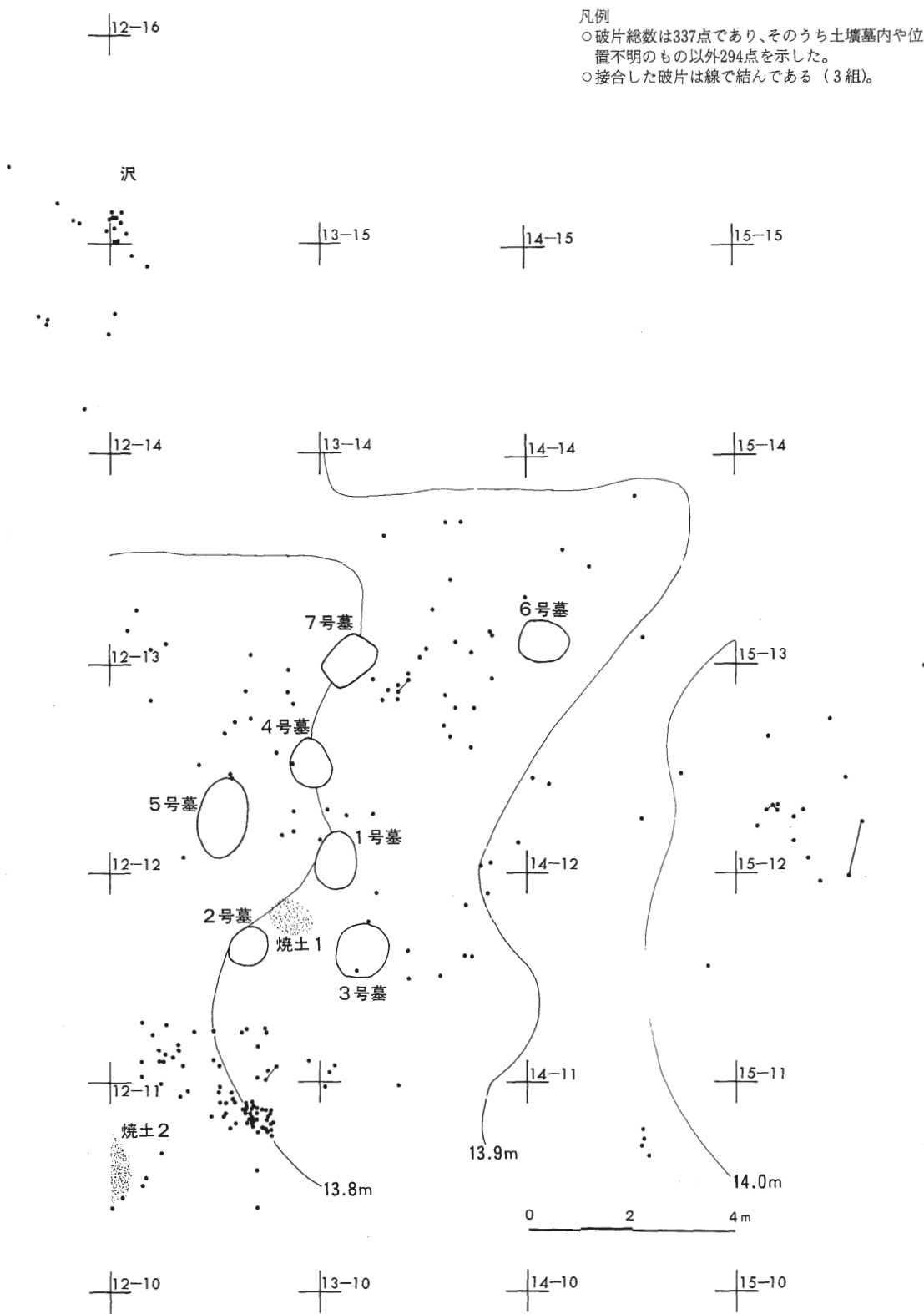
第29図 土器个体番号11の破片分布



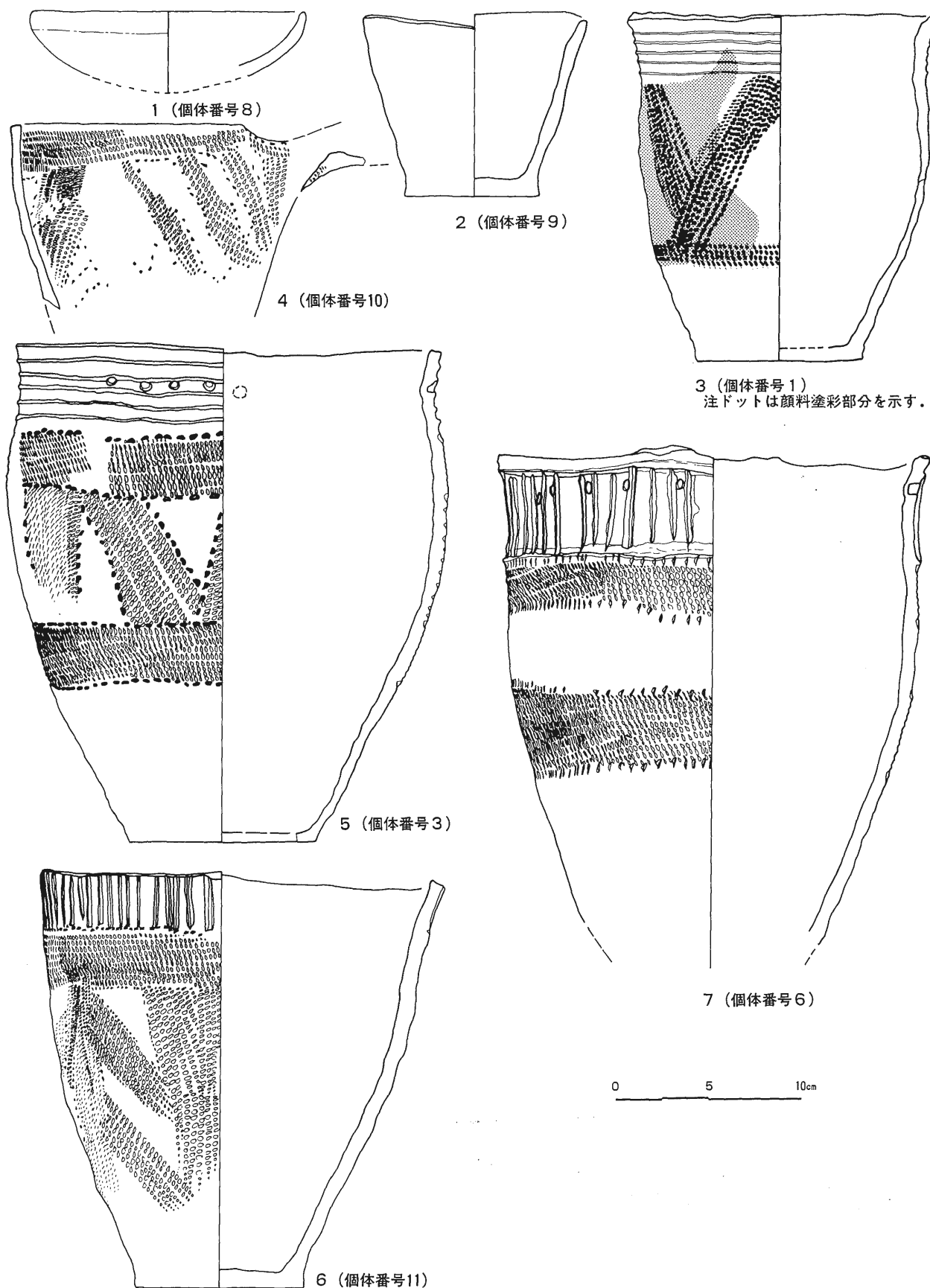
第30図 土器の破片分布



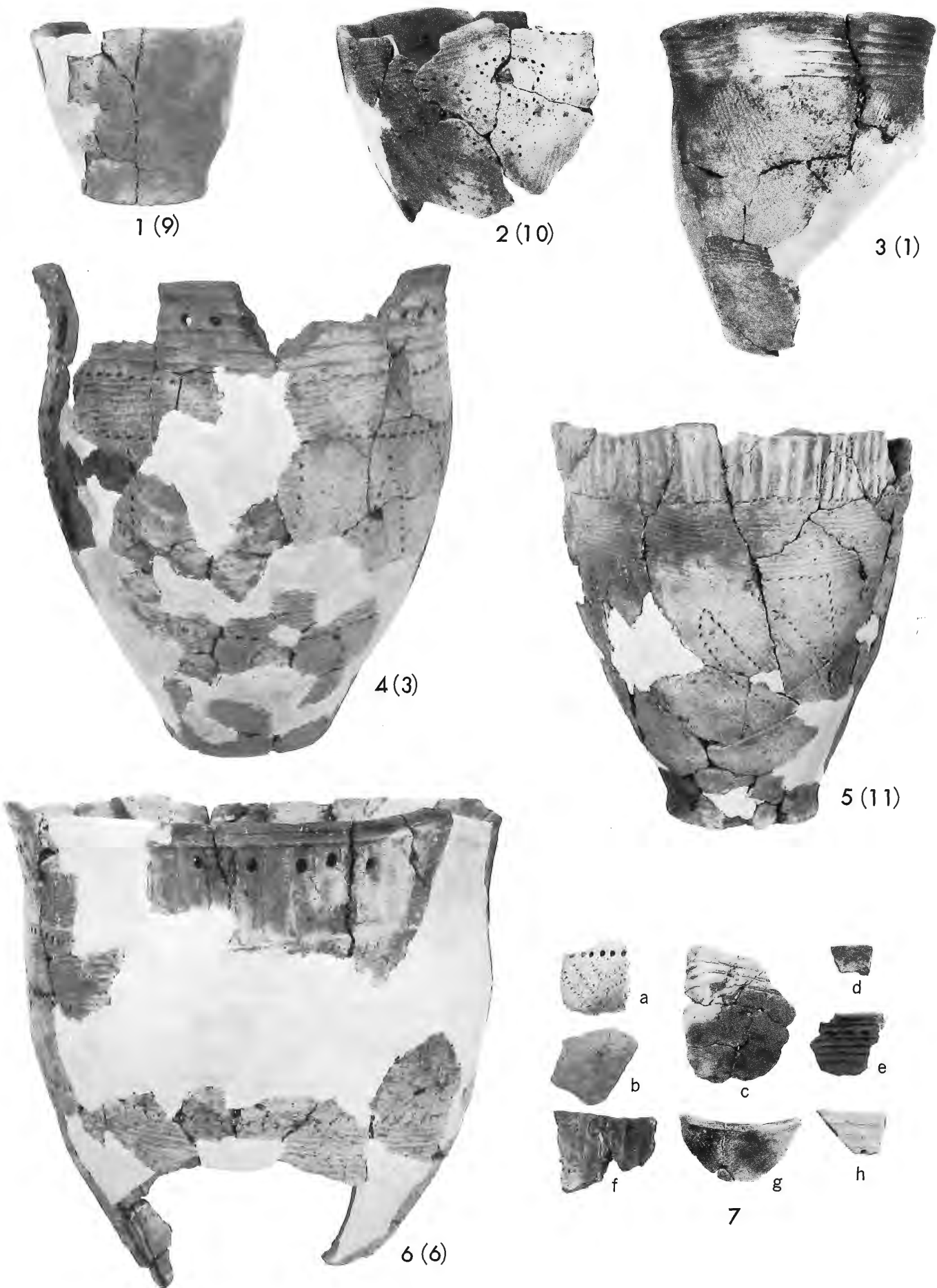
第31図 帰属不明土器
破片の分布



第32図 出土土器



第33図 出土土器 () 内は個体番号を示す



さまれた胴部中程は幅約4cmの斜行の縄文帯が無文部をはさんで交互に形成されている。

施文の手順について、文様が重なり合った部分から判断するなら貼付隆起線文と円形刺突文は、円形刺突文が先、小楕円状刺突文と縄文は、縄文が先、横走縄文帯と斜行縄文帯は横走縄文帯が先という先後関係が読み取れる(第32図5, 第33図4)。

そのほか、土器の表裏面には炭化物の付着や黒色化、あるいは表面剝離が観察され、この甕が煮沸に使用されていたことをうかがわせる。

個体番号4

出土・分布：口縁部破片が2点、ブロック3(12-10〔22〕グリッド)第Ⅲ層から出土した。土器個体番号3の小ブロックbに近接している(第26図)。

器種・文様：大きさについては計測不能。鉢(?)。口縁部の小破片にもとづけば、表面は円形刺突文と爪形文、沈線文によって装飾されている。円形刺突文は口縁部にそって一列施されている。爪形文は径が約2mmと小さく、斜位に連続して刺突され、沈線文はそれにそって施されている(第33図a)。

個体番号5

出土・分布：破片8点のうち、胴部破片1点がブロック8(13-13〔11〕グリッド)から出土したほかは遺構外、ブロック以外(12-13〔33〕グリッド, 13-13〔12〕グリッド, 〔33〕グリッド)に分布している(第26図)。

器種・文様：現存高で約9cm。残存部分が少なく全体形などは不明である。残存する口縁部の破片から判断すると、片口形の土器である。

表面の文様は、口縁部直下から横位の貼付隆起線文が4条施文されているのが観察される。以下、胴部は無文で器面がよくみがかれている(第33図7c)。

個体番号6

出土・分布：破片総数107点は、ブロック3, ブロック11, ブロック12の3個所から出土した。そのうち、破片数が多いのはブロック11の85点、ついでブロック3の17点、ブロック12の2点となり、残り3点はそれ以外の所に点在する。

ブロック3でのあり方をみると、これらの破片17点は、小ブロックa, b, cの3個所の小集中区を形成している。小ブロックaの分布範囲は長径70cm, 短径50cmの円、小ブロックbの分布範囲は長径120cm, 短径80cmの楕円、小ブロックcの分布範囲は長径50cmの楕円で、それぞれ小ブロックは50~80cmの間隔で南北に並列している。小ブロックaは7点の破片のうち、5点が口縁部破片、小ブロックbは6点の破片のうち、1点が口縁部破片、小ブロックcは4点の破片のうち、1点が底部破片で残り3点が胴部破片である。このように、ブロック3での破片のあり方は、この土器の口縁部から底部までが小ブロックaから小ブロックcへと土器の全体形にそったきわめて規則的な状況を示していることがわかる。一方、破片数をもっとも多かったブロック11では、口縁部から胴部の破片が混在し、また、ブロック12では底部破片1点を含むわずか2点の破片が礫や剝片・碎片などと混在し出土した(第27図)。

以上のような、各ブロック内での破片のあり方から判断するなら、この土器はブロック3で破損、その後ブロック11やブロック12へ大部分の破片が持ち出され、他の土器片や礫、剝片・碎片などとともに集中区を形成したといえる。

器種・文様など：口径23.3cm, 現存高26.6cm。最大径は口縁部にあり、頸部のくびれがそれ程顕著ではない長胴の甕である。

土器の表面は、円形刺突文、隆起線文、爪形刺突文、

帯状縄文（RL）によって装飾されている。

円形刺突文は、直径約5mmで裏面へは貫通しておらず瘤状の脹らみを止めており、口縁にそって一周している。それらの間隔は1～2.5cmと不ぞろいである。

隆起線文は口縁部直下と頸部下端に横位貼付隆起線文が各一本、さらにその間を縦位貼付隆起線文が約1cm間隔で充填されている。隆起線文の幅は約4～5mmと太い。

爪形刺突文は、つぎに記す帯状縄文のへりにそって付されている。

縄文は、胴部中程の無文部分をはさんで上下に、幅2.5～3cmの横走する縄文帯を形成している。

観察された部分での各文様の施文手順はおおよそつぎのようになる。

円形刺突文と縦位隆起線文とは、縦位隆起線文が先、横位隆起線文と縦位隆起線文は横位隆起線文が先、したがって、この3者間では、横位隆起線文→縦位隆起線文→円形刺突文という手順が読み取れる。

爪形刺突文と横位隆起線文（下段）とは横位隆起線文が先、爪形刺突文と縄文帯とは縄文帯が先という施文手順となる（第32図7、第33図6）。

そのほか、この土器の内面の大部分と表面の一部分は黒色化あるいはヒビ割れ現象が観察され、煮沸に使用されたことをうかがわせる。

個体番号7

出土・分布：破片総数33点のうち、 $\frac{1}{3}$ の11点がブロック10に集中している。このブロックでは口縁部から底部破片にいたるまでひととおり発見されているのに対し、ブロック3、8、9の各ブロックには1～4点が他の遺物と混在し出土している。そのほか、3号墓上の第Ⅲ層（第11図）や6号墓に近接し破片が出土している（第27図）。

器種・文様など：破片が焼けただけ、剝離が著しく接

合がむずかしいため器形など詳細は不明であるが、鉢形を呈するようである。

土器の表面は、円形刺突文が施文されており、他の文様はみられない。円形刺突文は、口縁部にそって1～2cm間隔で一周している。

そのほか、この土器の内面には炭化物が付着しており、表面の剝離などとともに煮沸に使用されたことをうかがわせる。

個体番号8

出土・分布：破片が1点しか発見されなかった。1点の破片はブロック3（12-10〔23〕グリッド）第Ⅲ層から、個体番号3の小ブロックb、個体番号6の小ブロックbあるいは個体番号7、30、34などの土器片と混在して出土した（第27図）。

器種・器面調整など：口縁部破片から推定すると、口径が約14.4cmの土師器の坏である。器形は口縁部がわずかに内弯し、背の低い（推定器高4.5cm）丸底を呈するようである。土器の表面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキによって調整されている（第32図1、第33図7b）。

そのほか、この土器の表面は褐色、内面は赤褐色で一見して他の土器とは異った印象を与える。

個体番号9

出土・分布：破片総数18点のうち、ブロック5、6にそれぞれ1点のほか、ブロック8に分布している。ブロック8では破片の集中化はみられず、むしろ他の土器片や礫などと混在する（第28図）。

器種・文様など：口径12.0cm、器高9.8cm、底径7.2cmの片口土器である。器形は小形の鉢で、一方に指で軽くつまみ出した程度の片口部を設けている。

土器の表面はよく磨かれ、部分的に光沢が観察される。

内面も同じように整形がゆきとどいているが表面程光沢はない（第32図2，第33図1）。

そのほか，この土器には炭化物の付着や黒色化がみられ，煮沸に使用されたことをうかがわせる。

個体番号10

出土・分布：破片総数16点のうち，ブロック8，15などに各1点分布するほか，ブロック14に集中している（第28図）。ブロック14は沢に形成されていることから判断するなら，この土器は沢に廃棄されたといえる。さらに，この土器は完形品にはいたってないこと，先に示した2～3ブロックに破片が分布することなどからみて，ブロック14以外で破損，その一部がブロック14に廃棄されたことは確かである。この土器だけでは破損の場を特定することはできなかったが，つぎに記す「個体番号11」の分布状況を援用するなら，ブロック3がそれに相当する可能性が強い。

器種・文様など：口径が約14cmの注口土器である。鉢の一端に注口部が付されたようなもので，注口部は体部の傾斜にほぼそってたちあがるようだが，この部分は接合しない。器体の口縁部は注口部の向い側とその左右，計三個所でわずかにつまみ出されている。

土器の表面は，縄文（RL）と小刺突文とによって装飾されている。縄文は，口縁部直下から約2cm幅が横位の帯状縄文，以下幅約1～1.5cmの斜縄文帯がくり返し施されるものである。小刺突文は帯状縄文の施文後そのへりにそって比較的等間隔に付されている（第32図4，第33図2）。

個体番号11

出土・分布：破片総数82点のうち，ブロック15に79点と大部分が出土，他にブロック3，ブロック7，ブロック8に各1点ずつ点在している（第29図）。ブロック15

は，沢の中に形成されていることと，この土器がある小さなまとまりを中心に沢の中央へ向けて破片が散在するというあり方とからみて，廃棄場であることは明確である。さらに，破損の場はブロック3にあったと思われ，そこで破損したほとんどの破片が沢に廃棄され，他の土器片や礫，石器などとともにブロック15という廃棄場を形成した，と判断される。

器種・文様：口径21.7cm，器高22.2cm，底径9.1cmの深鉢。口縁部は4つの波状を示している。

土器の表面は，隆起線文，小楕円状刺突文，縄文（RL）によって装飾されている。隆起線文は，幅約3mm，間隔が約5mmで口縁部に縦位に貼付されている。小楕円状刺突文は貼付隆起線文の下端や縄文帯のへりにそって比較的密に付されている。縄文は胴部に施文されるもので，2.5～3cm幅の帯状縄文である。貼付隆起帯の下は横位に，その下は斜位に施され無文部をはさんでくり返し展開されている（第32図6，第33図5）。

重なり合う文様の部分からみて，各文様の施文手順が判明したところを記すとつぎのようになる。

貼付隆起線文と小楕円刺突文とは貼付隆起線文が先，小楕円刺突文と縄文とは縄文が先，横位帯状縄文と斜位帯状縄文とは横位帯状縄文が先，という順序である。

そのほか，この土器の内面と表面の一部分は黒色化が観察される。煮沸に使用されたことをうかがわせるものである。

個体番号12

出土・分布：3号墓の埋土3層から口縁部破片が2点が出土した（第11図）。

器種・文様：小破片のため器種は不明だが，口縁部から判断するなら波状を呈している。

土器の表面は斜行する帯状縄文（RL）によって装飾されている（第34図-1，第33図7a）。

個体番号13から個体番号42までは小破片や胴部、底部などの破片なので、以下まとめて表12に示すことにする。

(3) 土器の出土・分布状況〈墓の副葬品とブロックの形成〉

この遺跡から出土した土器は、すべて破損品である、という点に第1の特徴がある。先に示した個体別資料でもわかるとおり（6-2-2）、破片となった土器は1号墓埋土3層、第Ⅲ層（個体番号1）、3号墓埋土3層（個体番号12）、5号墓埋土3層（個体番号22）、埋土2・1層（個体番号2）、7号墓埋土1層（個体番号20、42）から出土している。さらに、これらの土器はそれらを含む墓の副葬品である、と判断された（5-1-4）。つまり、この遺跡の墓に土器が副葬される場合、墳底部

に完形品を埋納することは全くなく、すべて墳中から墳口へかけて破片を埋納あるいは埋置する、という副葬法上の特徴を指摘できる。

それでは、これらの土器を副葬用に準備するための場がどこであるかが問題となろう。他の遺物と同じように、土器も墓地内に破片として、あるまとまりを示して出土している（6-2-2）。このまとまりをブロックとよび、性格などが分析された（5-5）。

ここでは、その分析をもとに土器の動向をまとめてみることにする。

まず、この墓地内での中心的集積場であるブロック3には、土器個体番号3、4、6、7、8、11をはじめとする10個体分の土器が破片として遺存していた。そのうち、他のブロックなどで破片が出土したのは、土器個体

表12 出 土 土 器 (番号13～42)

個体番号	出土位置、層位	部 位	器種	文 様	図
13	(テスト・ビット)	口 縁 部	甕	円形刺突文・細隆起線文(横)	第34図-4、
14	17-14(20)、Ⅲ層	口 縁 部	甕	細隆起線文(横、斜)	第34図-5、第33図7-e、
15	13-13(23)、Ⅲ層	口 縁 部	鉢	(無)	第30図
16	12-13(21)、Ⅲ層	口 縁 部	不明	円形刺突文	第30図
17	13-13(02)、Ⅲ層	口 縁 部	不明	(無)	第30図
18	ブロック8	口 縁 部	片口	(無)	第30図
19	ブロック9	口 縁 部	不明	円形刺突文・細隆起線文(横)	第34図-3、第33図7-h、 第30図
20	7号墓埋土Ⅰ層	口 縁 部	不明	細隆起線文(縦)	第15図2、 第30図
21	12-12(13)、Ⅲ層	口 縁 部	不明	(無)	第30図
22	5号墓埋土3層	口 縁 部	不明	(無)	第15図1、 第30図
23	ブロック15	口 縁 部	不明	(無)	第30図
24	ブロック11	口 縁 部	不明	口唇上に刻目文	第30図
25	ブロック11	口 縁 部	鉢	円形刺突文	第34図-2、第33図7g、 第30図
26	14-10(22)、Ⅲ層	口 縁 部	鉢	口唇上に円形刺突文	第30図
27	ブロック11	口 縁 部	不明	細隆起線文(横)	第30図
28	ブロック3	口 縁 部	不明	(無)	第30図
29	(テスト・ビット)	口 縁 部	甕	(無)	
30	ブロック3	口 縁 部	不明	(無)	第30図
31	14-11(03)、Ⅲ層	底 部	不明	無文	
32	12-12(12)、Ⅲ層	底 部	不明	無文	第30図
33	12-10(22)、Ⅲ層	底 部	不明	無文	第30図
34	ブロック3	底 部	不明	無文	第30図
35	ブロック3	底 部	不明	無文	第30図
36	17-14(20)、Ⅲ層、(テスト・ビット)	口 縁 部	不明	(紐通し孔)	
37	15-15(22)、Ⅲ層、(テスト・ビット)	胴 部 下 半	不明	細隆起線文(斜)	
38	18-14(00)、Ⅲ層、(テスト・ビット)	胴 部	不明	帯状縄文(横・斜、RL)	
39	(トレンチ、Ⅲ層)	胴 部	不明	帯状縄文(横・斜、RL)	
40	12-20、Ⅲ層、(テスト・ビット)	胴 部	不明	(無)	
41	17-13(20)、Ⅲ層、(テスト・ビット)	胴 部	不明	隆起線文(横)	
42	7号墓埋土Ⅰ層	口縁～頸部	鉢	隆起線文(縦)・小刺突文・帯状縄文(横、RL)	第34図-6、第33図7f、第15図2、第30図

第33図7e、第33図7h、

番号3, 6, 7, 11の4個体である。個体番号3や6は、大部分の破片がブロック11, 12, 13など分枝集積場に持ち出され、個体番号7の破片はブロック10のような分枝集積場やブロック8, 9の中間的集積場に持ち出されていた。個体番号11の大部分の破片は、ブロック15のような廃棄場へ投棄されていたが、わずかに1～2点の破片は、4号墓の供献品として用いられたり、中間的集積場に持ち出されたりしていた。

中間集積場のうち、ブロック8には土器個体番号7, 9, 10, 11, 18など5個体分の土器の破片が分布していた。このうち、動向がはっきりしているのは、個体番号7, 9, 10, 11の4個体で、個体番号7はブロック9にも破片がまたがって分布していた(6・2・2)。動向のはっきりしているものは、中心的集積場から破片として持ち込まれ、1号墓(個体番号9)、4号墓(個体番号11)、5号墓(個体番号9)などの供献品や追膳供献として用いられたものと、沢に廃棄されたもの(個体番号10, 11)などがみられた。

分枝集積場、ブロック10・11・12・13にみられた土器のうち、個体番号3, 6の2個体は中心的集積場で破損、その後破片が持ち込まれ集積されたことが確かめられている。

墓の供献品あるいは追膳供献品としては、個体番号1, 9, 11などがある。そのうち、個体番号11は中心的集積場からもたらされたと推定される。

廃棄場のブロック15へは個体番号11が、中心的集積場からもたらされ投棄されたと推定された。同様なことはブロック14にもいえるのであり、個体番号10は同11と破片が一部で混在することからみて、その出所は中心的集積場、と想定される。

以上のように、土器だけでいうならば土器の破片がブロックを形成しており、ブロックの性格などから判断されることは、土器の破片を墓の副葬品として使用する一

方で、埋葬儀礼の一環として煮沸などで使用済みの容器を中心的集積場に集合・破壊の後、中間的集積場や分枝集積場あるいは廃棄場へと持ち出す、という墓地内での土器の移動の状況が浮び上がってくることである。しかも、この墓地での土器のあり方は、墓への副葬品としてよりも、集積・廃棄といった側面が強く示されているといえる。ということは、土器の破壊は副葬用ということばかりでなく、それをうわまわる量の土器が墓地内で、おそらくその大部分が儀礼的に破壊・処理される、ということを示していよう。

土器片がブロックを形成している、ということは一方

表13 個体別にみた土器の共伴関係 (42個体)

個体番号	共 伴 個 体 番 号	個体数
1	2、5、7、9、22	5
2	1、22	2
3	4、6、7、8、11、26、28、30、34、35	10
4	3	1
5	1、9、10	3
6	3、7、8、11、24、27、28、34、35	9
7	1、3、6、8、9、18、19、34	8
8	3、6、7、30、34	5
9	1、5、7、10、11、18	6
10	5、9、11、17	4
11	3、6、9、10、23	5
12	—	—
13	—	—
14	—	—
15	—	—
16	—	—
17	—	—
18	7、9	2
19	7	1
20	42	1
21	—	—
22	1、2	2
23	11	1
24	6	1
25	—	—
26	3	1
27	6	1
28	3、6、35	3
29	—	—
30	3、8	2
31	—	—
32	—	—
33	—	—
34	3、6、7、8	4
35	3、6、28	3
36	—	—
37	—	—
38	—	—
39	—	—
40	—	—
41	—	—
42	20	1

では土器の共伴関係を知る上でも効果的である．これまで判明した土器の共伴関係を表13に示す．

(4) 土器の組成

土器の総個体数は42個体で，そのうち器形が判明したり計測値の割り出しが可能なのは18個体（42.9％）と少ない（表15）．

土器の組成比(第35図)から読み取れる特徴の一つは，鉢や甕など煮沸形態の土器が主体を占めていることである．埋葬儀礼に伴う調理作業の割合，その重要性の反映として受けとめる必要があろうかと思われる．第二の特徴は土師器坏の共伴である．

(5) 文様と施文手順

文様の種類には以下のようなものがある．

- 1 刺突文 ① 円形刺突文 ② 小楕円状刺突文
- ③ 爪形・方形刺突文
- 2 隆起線文 ① 縦位隆起線文 ② 横位隆起線文
- ③ 斜位隆起線文

なお，隆起線文は幅 1 ～ 2 mm の細隆起線文と幅約 3 mm

のものの2種類がみられ，特に後者は貼付隆起線文とよばれるものである．

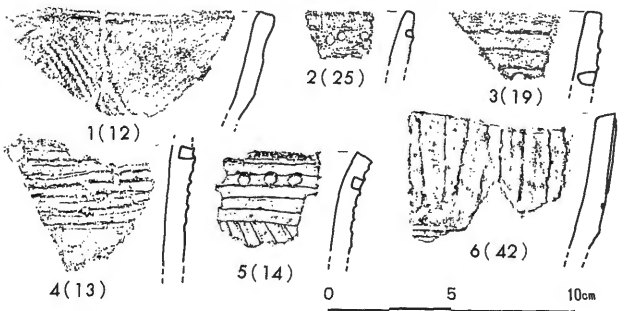
- 3 縄文（RL） ① 横走帯状縄文 ② 斜行帯状縄文 ③ 羽状縄文

4 刻目文

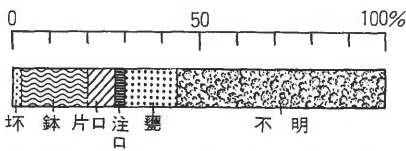
5 沈線文

以上の文様要素を器種別，部位別に示したのが表16である．それによると，総個体数42のうちなんらかの形で文様が施文されているものは25個体で約6割を占める．さらに，器種が確定したものとなると18個体で7割をやや上回る，きわめて高い比率となる．

器種別では，鉢は7個体に文様が施文されている．文様は口縁部から胴部にかけて，円形・小楕円状の刺突文，縦位の隆起線文，横走帯状縄文などが施文されている．



第34図 出土土器の拓影 ()内は個体番号

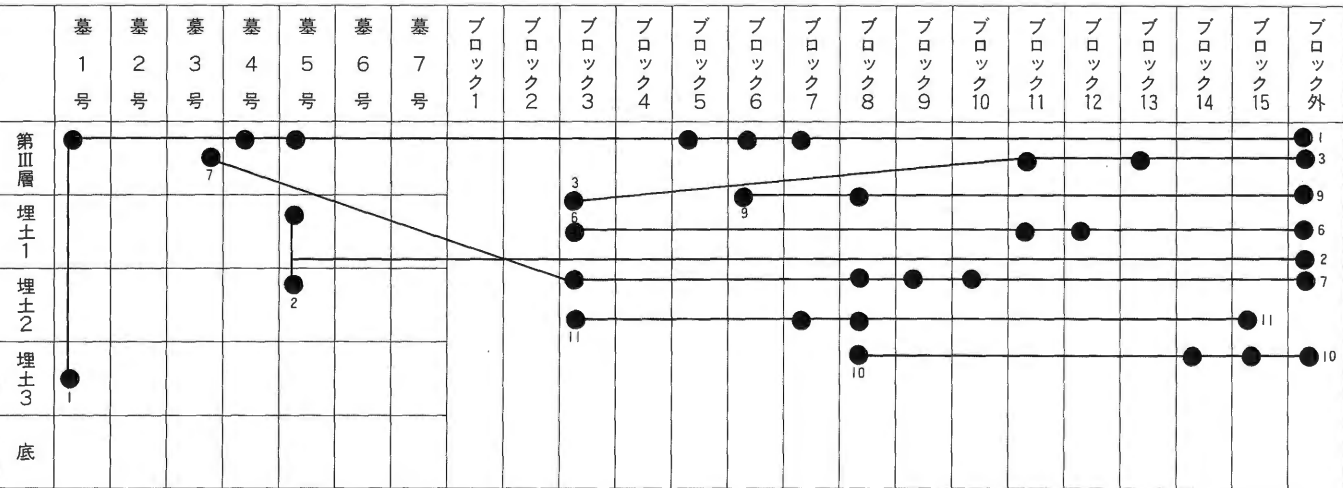


第35図 器種別にみた土器の構成

表15 器種別にみた土器の共伴関係

器 種	総数	個 体 番 号
土師器・坏	1	8
鉢	7	2、7、11、15、25、26、42
片 口	3	5、9、18
注 口	1	10
甕	6	1、3、6、13、14、29
不 明	24	4、12、16、17、19、20、21、22、23、24、27、28、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41

表14 個体別土器破片の散布状況



注： { 数字は「土器個体番号」である
 { 層位は墓に限る

表16 器種、部位別にみた文様

器 種	部 位	刺 突 文			隆 起 線 文			縄 文 (R L)			刻目文	沈線文	個体数
		円 形	小楕円	爪・方形	縦 位	横 位	斜 位	横 走	斜 行	羽 状			
鉢	口唇部上	▲ 26											1
	口 縁 部	▲ 7			▲								4
	胴 部	▲ 25	▲ 11		▲	▲		▲	▲				3
	底 部			▲ 42						▲ 2			0
	小 計	3	2	0	2	0	0	2	1	1	0	0	6
片 口	口唇部上												0
	口 縁 部				○ 5								1
	胴 部												0
	底 部												0
		0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
注 口	口唇部上												0
	口 縁 部			□ 10				□					1
	胴 部			□									1
	底 部												0
	注 口 部			□						□			1
	個 体 数	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1
甕	口唇部上												0
	口 縁 部	● 3	● 6										3
	頸 部	● 13			●	●	●	● 14					5
	胴 部		●	●	●	●	●	●	●	●			3
	底 部												0
	個 体 数	3	1	1	1	5	1	3	2	0	0	0	5
不 明	口唇部上										■ 24		1
	口 縁 部	■ 16	■ 4	■	■ 20	■	■ 27		■ 12				7
	頸 部	■ 19			■ 42	■ 42	■ 41						1
	胴 部			■				■ 42	■ 38	■		■	5
	底 部							■ 37	■ 39	■			0
	個 体 数	3	0	2	2	3	1	3	3	0	1	1	12
総 数		9	3	4	6	8	2	9	7	1	1	1	25

(注：印の数字は個体番号である)

非常に特異なのは、口唇部上に円形刺突文が施されるもの（個体番号26）と羽状縄文をもつもの（個体番号2）が1個体ずつみられることである。これは、他の器種や器種不明の個体には全くみられないものである。

片口は1個体に、縦位隆起線文のみが施文されている。また、1個体しか出土しなかった注口土器には爪状・方形刺突文と横走・斜行帯状土器が施文されている。

甕は、6個体中5個体に文様が施文されている。頸部文様がもっとも多く、口縁部、胴部がこれに次ぐ。文様の種類では横位隆起線文がもっとも多いが、横走帯状縄文や円形刺突文と併用される点に特徴がある。

個々の文様要素をみると、刺突文様では円形刺突文が9個体（36.0%）にみられ、鉢、甕に限られ用いられている。部位は口縁部にほぼ限定されるが、鉢の1例に口唇部上、というのがみられる（個体番号26）。隆起線文では横位貼付のものが8個体ともっとも多用されている（32.0%）。これは甕にはほぼ限られており頸部装飾文様の代表である。鉢や片口、注口にはみられず、むしろ鉢では縦位の貼付帯が特徴的である。縄文（RL）では横走の帯状縄文が9個体（36.0%）ともっとも多く使用されている。これは鉢と、甕とも胴部を装飾する文様の代表で、鉢では小楕円状刺突文、縦位隆起線文と組み合わせとなって用いられている。甕ではそれらに加え斜行帯状縄文と組み合わせとなる点に特徴がある。

つぎに、これらの文様の施文手順についてみてみよう。それぞれの文様が重なり合ったり、隆起線文の剝落痕などの観察にもとづけばつぎのようになる。

円形刺突文と隆起線文とでは2個体（個体番号3, 6）の観察からみて円形刺突文が先の場合と隆起線文が先の場合とがある。

縦位と横位隆起線は、横位の方が先に貼付される（個体番号6）。

横走帯状縄文と斜行帯状縄文とでは、6個体いずれも

横走→斜行という手順がみられる。

小楕円状、爪・方形刺突文は、隆起線文や縄文の施文後、というもっとも最終段階に施文されるものである。

2 石器・礫

(1) 剝片石器類

ここで言う剝片石器類とは、石鏃、スクレイパー、不定形石器、剝片・碎片のほか黒曜石製の石核、荒割り礫・原石を指す。各々の出土位置や数量などは表11に示した。

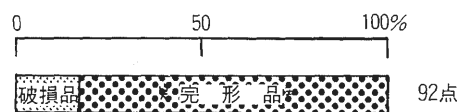
1 種類と特徴

① 石鏃 2点

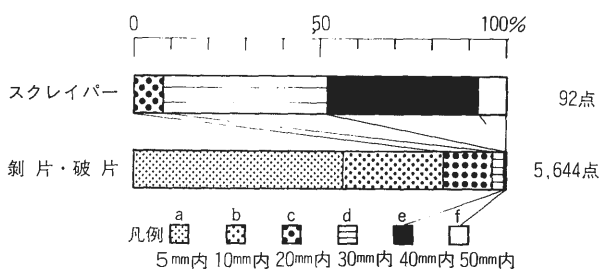
完形品、破損品が各1点ずつ出土した（第39図1, 2）。石質はいずれも頁岩である。完形品にもとづけば、有柄の鏃である。

② スクレイパー 92点

完形品が83%（76点）と破損品（17%, 16点）を大きく上まわっている（第36図）大きさは、2cm以上4cm以内のものが主体を占め、それより小さなものと大きなものがわずかにみられる（第37図）。剝片の大きさと比較

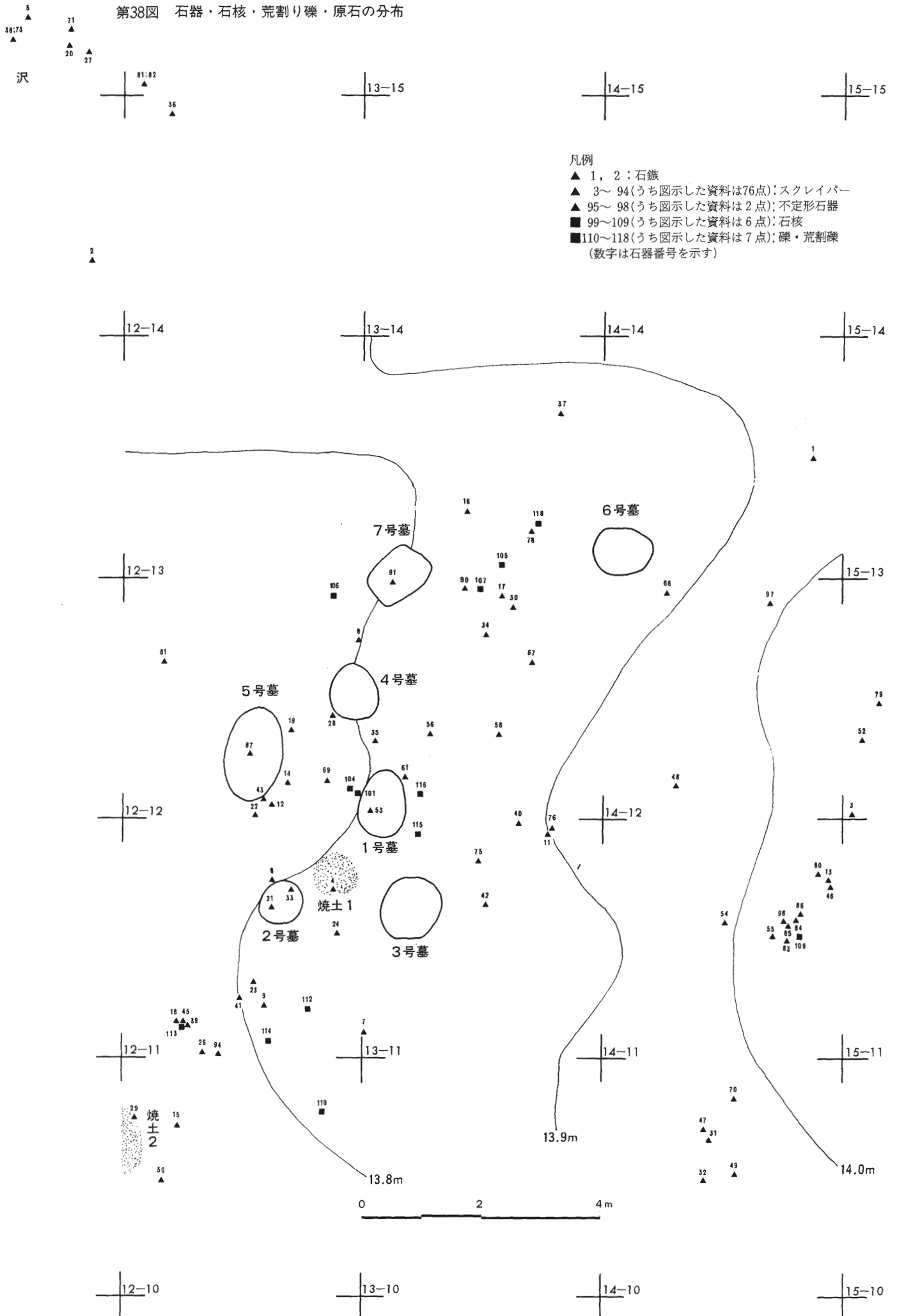


第36図 スクレイパーの破損

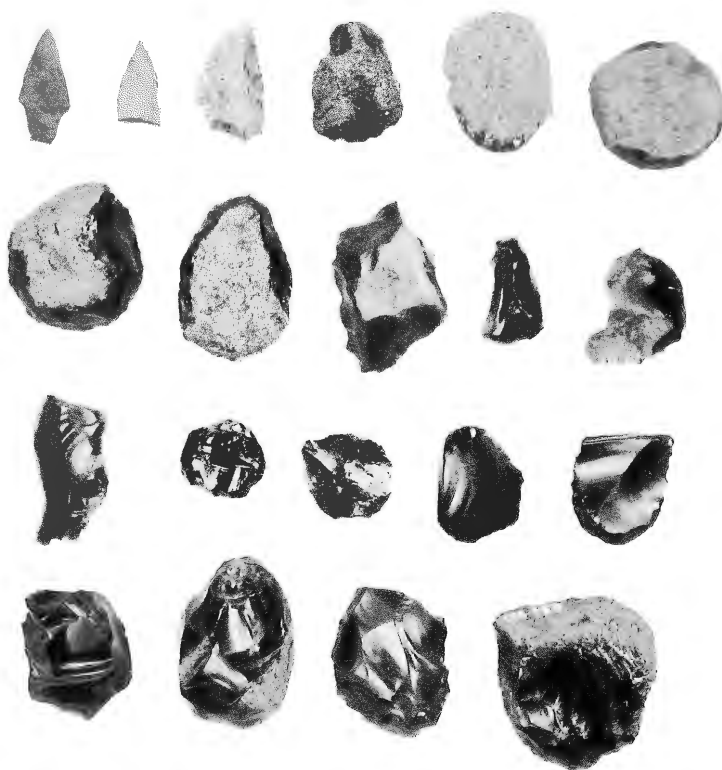
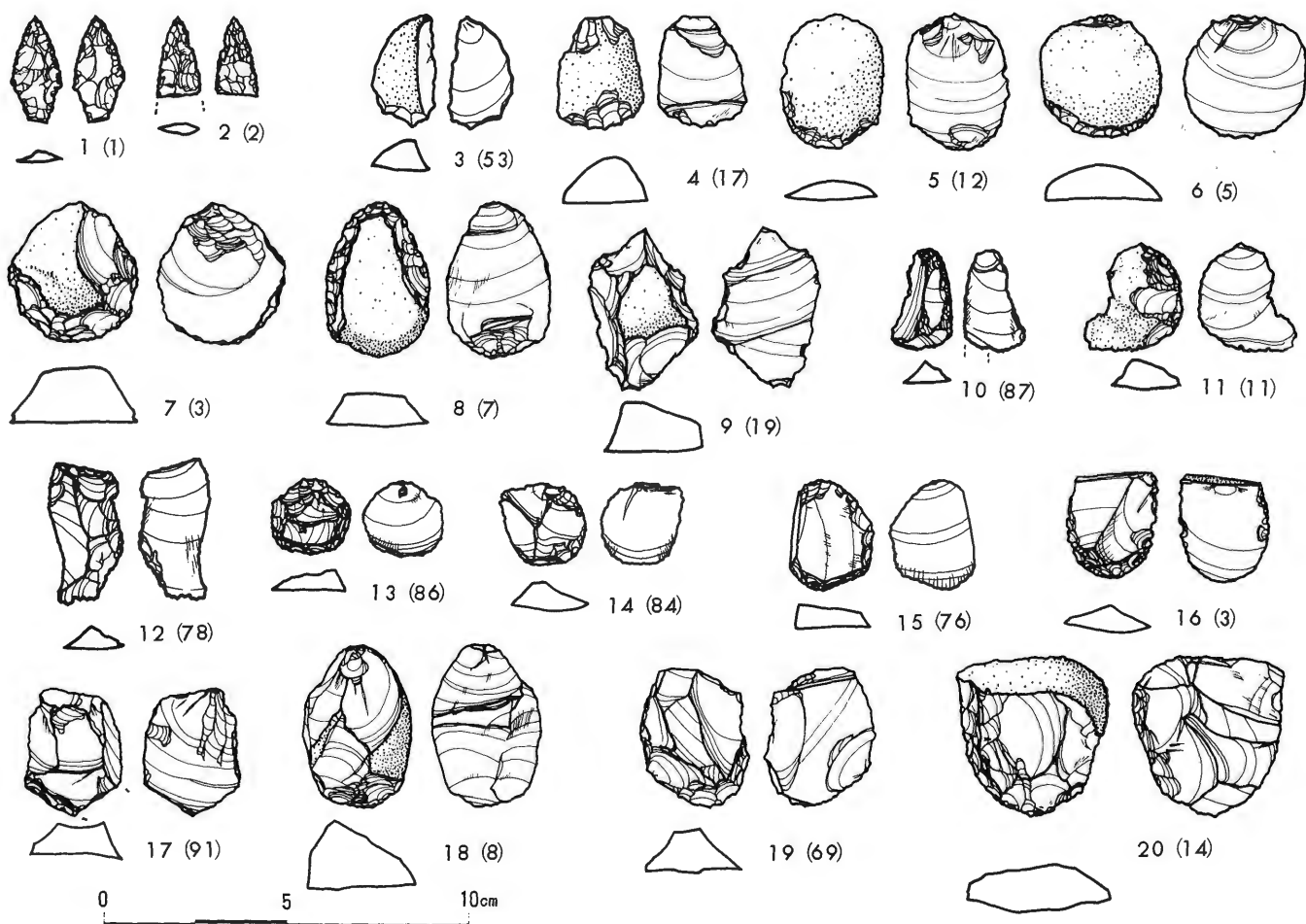


第37図 スクレイパーにみられる素材利用

第38図 石器・石核・荒割り礫・原石の分布



第39図 石器・石核 () 内は石器番号を示す

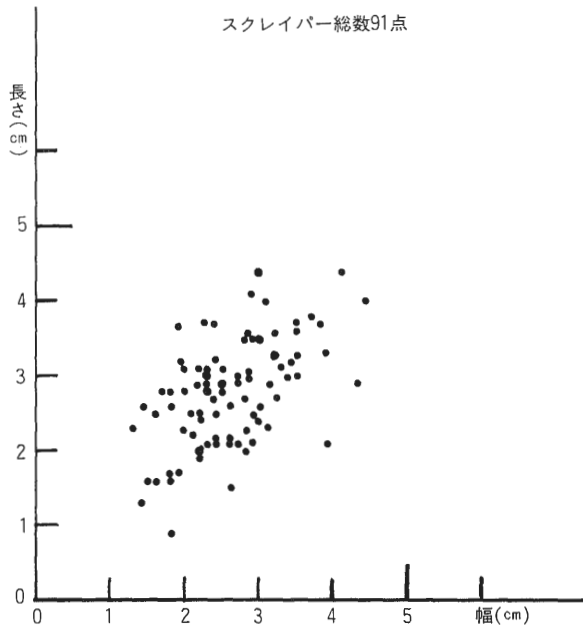


(109)

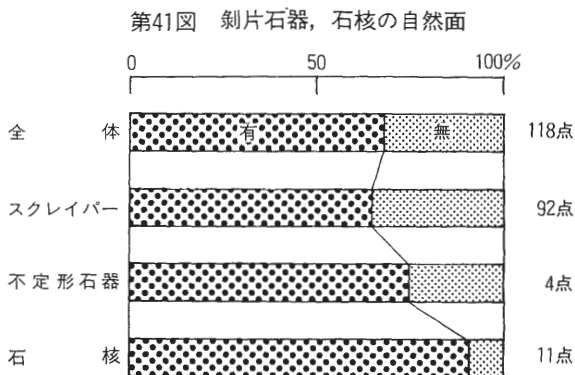


(104)

すると興味深い。長幅の関係をみても（第40図）、不定形を呈する形状のものが主体を占め、円、楕円、三角形など定形的なスクレイパー（第39図5～8）が非常に少ないことがわかる。しかも、定形的とはいっても礫皮を一面に残すファーストフレイクを素材としているもので、たまたまそのような形状に剝離されたものを利用したにすぎないようである（第41図）。一方、刃部の形状は、素材の縁辺にそって主要剝離面側からの二次加工に



第40図 スクレイパー長幅関係



もとづくものが一般的で、半弧状（第39図5, 6, 7, 11, 16, 20）の凸刃に定形化の現象を読み取ることができる。石質はすべて黒曜石であり、その65%に礫皮を残している（第41図）。

③ 不定形石器 4点

素材自体が不定形であり、その一部分に二次加工が連続的に、あるいは不規則に施されるものである。スクレイパーと異なる点は、刃部が一定の部位に設けられない点にある。石質はすべて黒曜石で、3点に礫皮を残している（第41図）。

④ 剥片・碎片

1 総数と分布

この遺跡から出土した剥片・碎片の総数は5,644点で、すべて黒曜石製である（表11）。

このうち、墓からの出土数は1,734点で、全体の約30%が副葬品などとして墓から出土している。

墓以外の剥片・碎片は、全体分布図にみるように（第42図）、土器片、礫器・礫などの集中域ブロックと符合する形で出土している。そのうち、もっとも数量が多いのは、ブロック12の剥片・碎片で1,722点にのぼり、ここだけで全体の約30%を占めている。ついでブロック2（焼土2）の693点、ブロック3の299点、ブロック11の266点と続く。その反面、ブロック1やブロック9などのばうに全くそれを含まないブロックもわずかにみられる。

2 剥片・碎片の大きさ

剥片・碎片の大きさについて、ここでは便宜的にaからfまで6段階に区切って示してみよう。

a—縦、横5mm以下のもの

b…縦、横5.1mm以上10mm以下のもの

c…縦、横10.1mm以上20mm以下のもの

d…縦、横20.1mm以上30mm以下のもの

e…縦、横30.1mm以上40mm以下のもの

f…縦, 横40.1mm以上50mm以下のもの

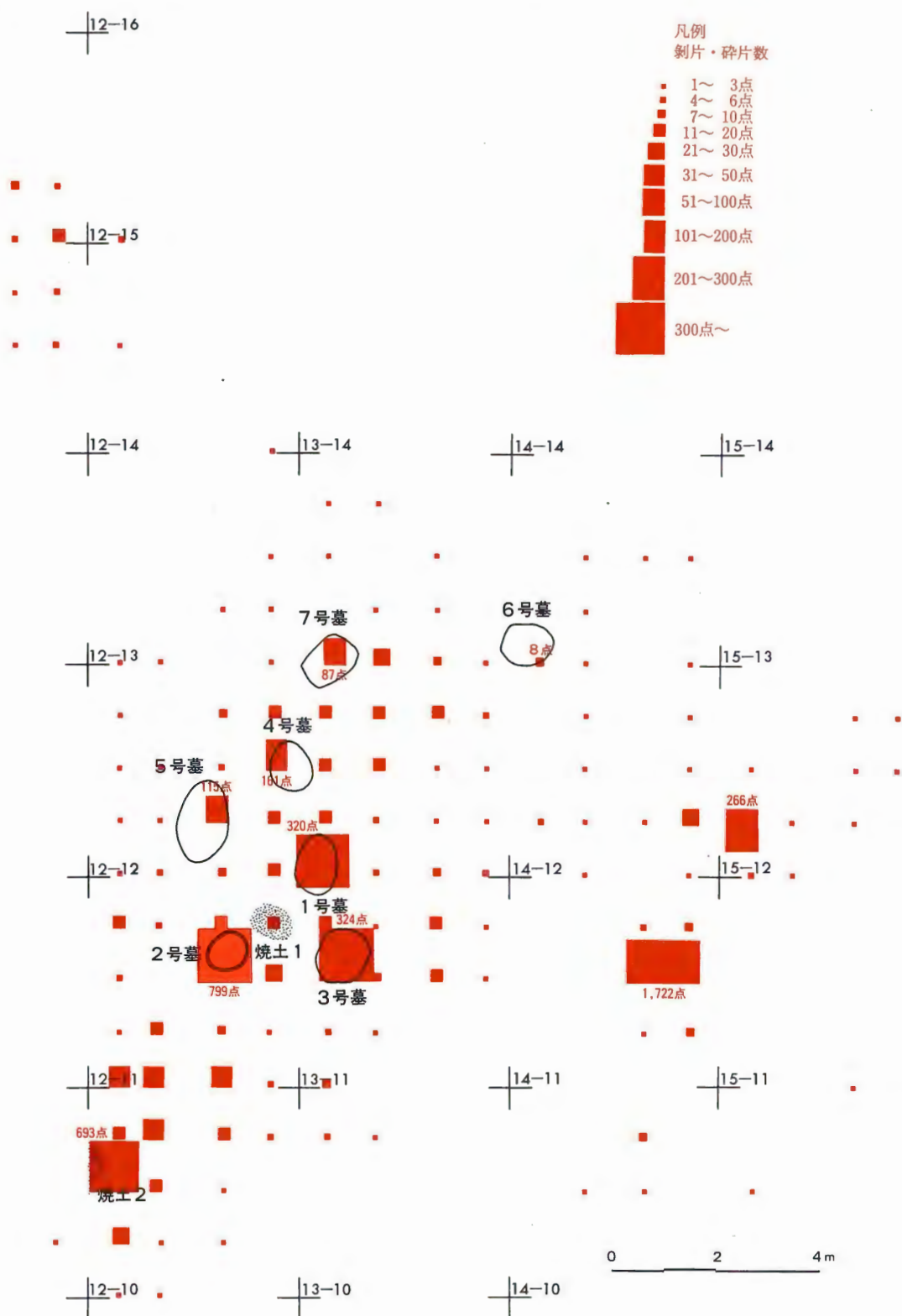
さて, 上記の区分が剥片・碎片の全体や墓あるいはブロックでどのような分布を示すかをみる (表17).

まず, 全資料ではaがもっとも多く(56%), e(0.6%), f(0.1%)はほとんどみられない。この傾向は墓でさらに一段と著じるしい様相を示すようになる。つま

り, aが77.7%に対しeが0.1%, fは0%という数字に表われる。それはブロックにおいてもほぼ同様な傾向を示すが, ブロック3だけが他と異なりaとbが逆転している(第43図)。

しかし, いずれにしてもこの遺跡の剥片・碎片の大きさは, aが主体を占めるといえる。さらにa, b, cを合わせると96.6%となりd, e, fを圧倒的にうわま

第42図 剥片・碎片の分布



わることがわかる。このような出土傾向は、ブロック3を除く墓やブロックに反映される。ブロック3の場合、そのもつ性格(5-4-(5))が強く示された点注目に値するだろう。

3 剥片・碎片の利用

この遺跡での剥片・碎片の利用は、① 石器として利用される場合と、② 副葬品に利用される場合とに大別でき、2つの側面をもっていることがうかがえる。

① 石器としての利用

この遺跡の剥片石器には、石鏃、スクレイパー、不定形石器などがあり、そのうち頁岩製の石鏃2点を除く黒曜石製石器の総数は、96点である。これは、剥片・碎片を加えた総数5,740点のなかでわずかに1.7%の比率でしかない。

また、剥片・碎片のうちでどのような大きさのものが石器に利用されているのかを、石器の大半を占めるスクレイパーについてみてみよう(第37図)。このグラフにみられるようにc, d, e, fがもっぱら利用され、a, bは全く利用されていないことが読み取れる。利用されているc, d, e, fのなかでは、d, eの両方で8割

強を占めている。

つぎに、剥片・碎片で使用痕もしくは微小剥離の施されているものは、19点(0.3%)と合わせて少ない。大きさ別では、cが6点、dが6点、eが7点で、a, b, eは全くみられない。

② 副葬品としての利用

4-1で示したように、剥片・碎片の約30%, 1,734点が副葬品として利用されている。

さらに、個々の墓別にみた副葬品としての性格づけは、5-2-(4)に詳しく分析した(pp. 50~52)。したがって、ここでは剥片・碎片が「墳中、墳口における散布を示す」きわめて重要な副葬品であり、副葬法上の大きな特徴であることを再確認し、説明の重複をさける。

⑤ 石核 11点

礫皮を残している資料にもとづけば(第44図-2)、握り拳の約1/2大の河原石を使用しているといえる。

石核の打面は、2点(石器番号102, 103)を除き、両

表17 剥片・碎片の大きさ別数量

1 剥片・碎片全資料の大きさ別数量

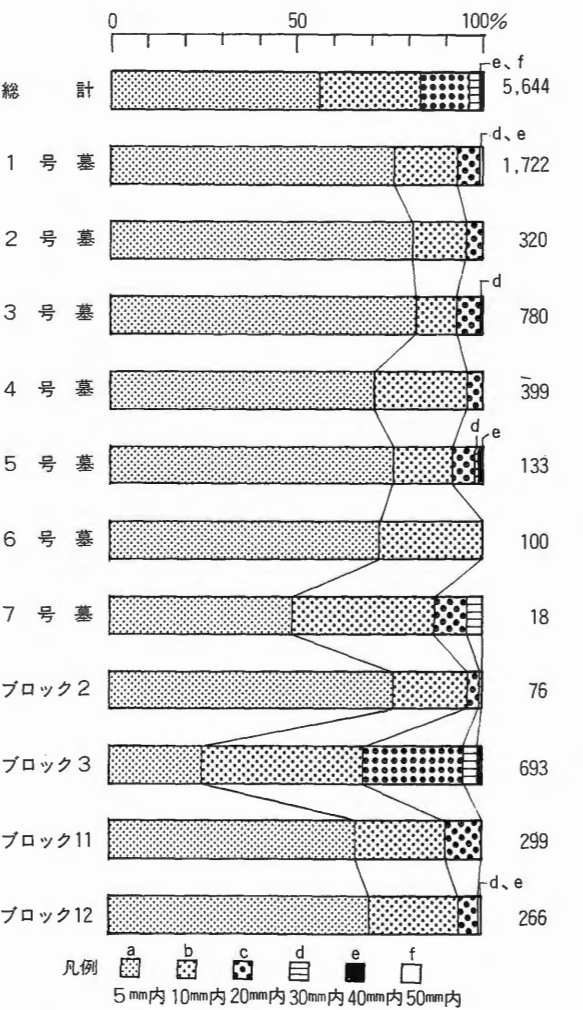
	a	b	c	d	e	f	総数
剥片・碎片	3,160	1,535	754	156	35	4	5,644

2 墓別にみた大きさ別数量(分類可能資料1,726点)

	a	b	c	d	e	f	合計
1号墓	243	54	20	2	1	0	320
2号墓	632	113	35	0	0	0	780
3号墓	246	34	18	1	0	0	299
4号墓	94	34	5	0	0	0	133
5号墓	76	16	6	1	1	0	100
6号墓	13	5	0	0	0	0	18
7号墓	37	29	7	3	0	0	76
合計	1,341	285	91	7	2	0	1,726

3 代表的ブロックにみられる大きさ別数量

	a	b	c	d	e	f	合計
ブロック2	528	142	22	1	0	0	693
ブロック3	74	129	80	13	3	0	299
ブロック11	177	65	24	0	0	0	266
ブロック12	1,194	417	102	6	3	0	1,722



第43図 墓およびブロック別にみた剥片・碎片の大きさの比較

設打面の形態をとっている。そこから剝離される剝片は、幅広、貝殻状など不定形が大半で、大きさもa～c段階が一般的である(第44図-1)。まれにd～f段階もみられるが同一剝離面の中で単発的にあらわれる現象で(第44図-2)、技法的には定型的なものではない。

⑥ 荒割り礫・原石 9点

9点のうち原石は、わずか1点で、半かん状のものである。

荒割り礫は、礫皮を大きく残すもので不規則な割れ口を示している。

⑦ 瑪瑙の碎片 7点

不規則に破碎した小片が出土している。分布(第52図)は、番号4(ブロック11)以外遺構外の包含層にみられた。

2 組成

総数は5,769点であり、黒曜石製剝片・碎片(5,644点)だけで97.8%を占めている。

石器だけをみると(第45図)、スクレイパー(92点)が93.9%で、石鏃(2点)、不定形石器(4点)を大きくうわまわっている。

このように、石器組成の主体はスクレイパーによって占められている、という点に特徴を見出すことができる。

3 出土および分布状況

(1) 遺構出土の剝片石器類

墓から出土した石器は、1号墓(表1)、2号墓(表2)、5号墓(表5)、7号墓(表7)の埋土内からスクレイパーが各々1点ずつ出土しているだけである(5-2)。

墓でもっとも多いのは剝片・碎片であるが、これについては先に詳しく説明した(pp.49～59)ので重複をさける。

(2) 遺構(墓)外での状況

土器や礫器・礫類などちがって、剝片石器だけで明瞭なブロックを形成していた痕跡は読み取れない(第38図)。むしろ、土器や礫器・礫類によって形成されたブロックに混在、という形で組み込まれているとみなし得よう。

各ブロックにどのような石器が組み込まれているかなどは既に述べた(5-4-(2))し、またそれらの性格なども先の分析(5-4-(3)～(5))で詳述した。

(3) 礫器・礫

ここで言う礫器・礫の石質は、火山岩系の凝灰岩、安山岩が主で、わずかに砂岩を含むものである。

総数は、接合以前で234点、接合以後で204点である。

1 種類、特徴、組成、破損

(1) 種類と特徴

種類は敲石、磨石、くぼみ石、剝離礫、礫剝片と礫である。

① 敲石 15点

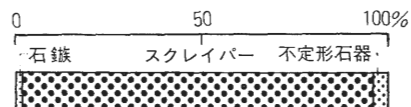
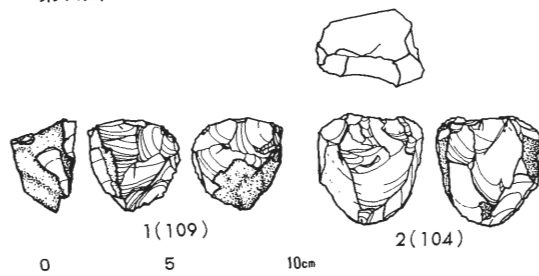
いずれも扁平な礫の周縁や一面に打痕をとどめており、敲打行為を示すものである。全資料とも割れており、4例の接合資料にも完形品はみられない。

接合資料番号5、接合資料番号7、接合資料番号8、接合資料番号9、礫番号28、29、33、35、40、44、52、53、73、79、83の15点である。

② 磨石 4点

扁平な礫の一面にこまかな擦痕が認められるもの(礫番号31、51)と板状の砂岩の両平坦面を使い込んだもの(礫番号233、234)とがみられる。完形品は出土していない。

第44図 石核 ()内は石器番号



第45図 剝片石器の組成比

③ くぼみ石 4点
扁平な礫の一面もしくは両面に1～3点の小さなアバ
タ状のくぼみがみられるもの。

接合資料番号14、礫番号36、礫番号46、礫番号54で、
完形品はみられない。

④ 剝離痕礫 4点

表18 剝片石器類の属性

石器番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備 考
1	2.83	1.32	0.34	頁岩、石鏃
2	2.15	1.18	0.41	頁岩、石鏃、×
3	3.60	3.49	1.53	自然面有
4	3.52	2.84	0.85	自然面有 焼土 1
5	3.26	3.22	0.96	自然面有
6	3.25	2.50	0.89	×
7	4.13	2.94	0.93	自然面有
8	4.36	2.96	1.95	自然面有
9	3.04	2.31	0.99	自然面有
10	3.29	3.15	1.04	自然面有
11	3.15	2.37	0.73	自然面有
12	3.46	2.98	0.62	自然面有
13	2.93	3.13	1.74	自然面無
14	4.39	4.06	1.48	自然面有
15	2.56	1.44	0.68	自然面有
16	2.12	2.59	0.76	自然面有
17	3.00	2.34	1.11	自然面有
18	2.10	2.38	0.51	自然面有
19	4.39	3.03	1.35	自然面有
20	2.32	1.95	0.61	自然面有
21	2.53	2.90	0.81	自然面有 2号墓第III層
22	3.69	3.46	1.55	自然面有
23	1.61	1.53	0.77	自然面有 焼け有
24	2.97	3.47	1.27	×
25	3.80	3.74	1.29	自然面有
26	2.22	2.41	0.79	×
27	3.71	1.89	1.40	自然面有
28	3.32	3.39	1.12	自然面有
29	2.47	2.41	0.62	×
30	2.38	3.02	0.81	自然面有 焼土 2
31	2.33	2.80	0.89	×
32	2.88	2.45	0.87	自然面有
33	2.98	3.40	0.89	自然面有 2号墓埋土1層
34	2.05	3.92	1.48	自然面有
35	4.03	4.41	1.22	自然面有
36	2.83	2.26	1.09	×
37	3.66	2.43	1.26	自然面有
38	2.43	2.21	0.80	×
39	2.84	2.00	0.90	自然面有
40	1.96	2.83	0.24	自然面有
41	2.22	2.10	0.42	自然面有
42	2.09	2.89	0.72	自然面有
43	3.45	3.04	0.79	自然面有
44	2.26	1.34	0.60	自然面有
45	2.69	2.77	0.58	×
46	2.08	2.66	0.80	自然面無
47	1.74	1.91	0.65	自然面有
48	3.14	2.75	1.26	×
49	3.02	2.68	0.62	×
50	2.47	1.59	0.44	自然面有 焼土 2
51	3.08	1.98	0.34	自然面有
52	2.20	2.62	1.23	自然面有 焼け有
53	2.49	2.05	0.90	自然面有 焼け有 1号墓埋土1層
54	3.04	2.79	1.31	自然面有
55	2.27	3.06	1.86	自然面有
56	3.28	2.47	1.07	×
57	3.14	2.32	0.85	自然面有
58	2.74	3.18	0.72	自然面有
59	2.55	2.95	1.00	自然面有

石器番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備 考
60	1.26	1.41	0.45	自然面有
61	1.59	1.62	0.28	×
62	3.70	3.83	0.98	自然面有
63	2.91	4.32	1.56	自然面無
64	2.90	2.73	1.20	自然面有
65	3.59	3.18	1.12	自然面有
66	3.96	3.10	0.87	自然面有
67	3.53	2.76	1.16	自然面有
68	2.88	2.45	0.60	自然面無
69	3.28	3.89	1.22	自然面無
70	1.66	1.79	0.43	自然面無
71	2.64	2.60	0.75	自然面無 焼け有
72	2.76	2.25	0.43	自然面無
73	1.59	1.80	0.52	×
74	3.07	2.22	0.53	自然面無
75	2.54	2.23	0.94	×
76	2.87	2.31	0.67	自然面無
77	2.65	2.41	0.58	自然面無
78	3.66	2.31	0.86	自然面無
79	2.76	1.81	0.97	自然面無 焼け有
80	2.84	1.72	0.93	自然面無
81	1.85	2.19	0.50	自然面無 焼け有
82	—	—	—	計測不能
83	2.90	2.20	0.95	自然面無
84	2.17	2.34	0.72	自然面無
85	2.89	2.47	0.82	自然面無
86	2.00	2.17	0.68	自然面無
87	2.57	1.80	0.66	自然面無
88	3.08	3.26	1.10	自然面無
89	2.01	2.24	0.75	自然面無
90	2.75	2.51	0.46	自然面無
91	3.48	2.85	1.25	×
92	3.24	1.85	0.64	自然面無 7号墓埋土1層
93	1.46	2.55	0.53	自然面無
94	0.87	1.84	0.27	×
95	3.15	4.04	1.64	自然面有 焼け有
96	3.35	2.54	1.33	自然面有
97	2.51	2.27	1.26	自然面有
98	3.30	2.62	1.37	自然面有 焼け有
99	3.28	2.00	1.85	自然面有
100	4.04	2.75	2.31	自然面有
101	3.79	3.66	1.93	自然面無
102	4.02	2.81	1.97	自然面有
103	2.68	3.03	1.30	自然面有
104	4.32	4.33	2.95	自然面有
105	3.99	4.00	1.67	自然面有
106	3.29	4.33	1.56	自然面有
107	4.01	2.86	1.63	自然面有
108	3.24	1.75	2.16	自然面有
109	3.86	2.90	3.01	自然面有
110	9.72	5.17	3.54	原 石
111	2.46	1.96	1.89	原 石
112	3.52	2.17	1.69	
113	6.77	6.32	2.69	
114	3.84	2.71	1.84	
115	4.55	5.03	1.94	
116	5.84	2.83	2.20	
117	3.54	3.72	2.95	
118	4.79	2.84	1.98	

凡 例 ①番号1、2：石鏃、番号3～94：スクレイパー、番号95～98：不定形石器、番号99～109：石核、番号110～118：荒割り礫・原石 である。
②出土位置は基などの遺構からのもののみ注記した。したがって特に注記していないものは遺構外出土である。
③石質については特に記載していないものは「黒曜石」である。
④計測の基準について、素材が剝片の場合、その長さをもとに、それに直交する値を「幅」とし、素材の厚みを「厚さ」とした。また、両面加工品や荒割り礫などの場合、長軸を「長さ」とし、それに直交する値を「幅」、素材の厚みを「厚さ」とした。
⑤×印は破損品である。

扁平あるいは棒状の礫に部分的に剝離を行なったり、火熱などによって剝離痕をとどめるものである。

2点（接合資料番号2，11）は割れており，2点（礫番号177，178）は完形品である。

⑤ 礫剝片 73点

大きさは，もっとも大きなものでも7cm未満，小さなものは8mm前後である。

形はいずれも不定形で，片面か一部分に礫皮を残す，という特徴がみられる。また，使用痕は全く認められず，前記の特徴とともにこの剝片は主として礫器や礫の割り取りにともなって得られたもので，使用目的のものはほとんどない，といえよう。

礫番号101～礫番号176が与えられている（但し接合2組みで73点となる）。

⑥ 礫 104点

礫のなかには礫器と同形状を示すものが41点（礫番号179～219）と小礫が13点（礫番号220～232）の2種類みられる。前者は，15点（礫番号182，184，187，197，199，201，202，203，204，209，210，211，215，216，218）に火熱や炭化物付着が観察され，2点（礫番号195，

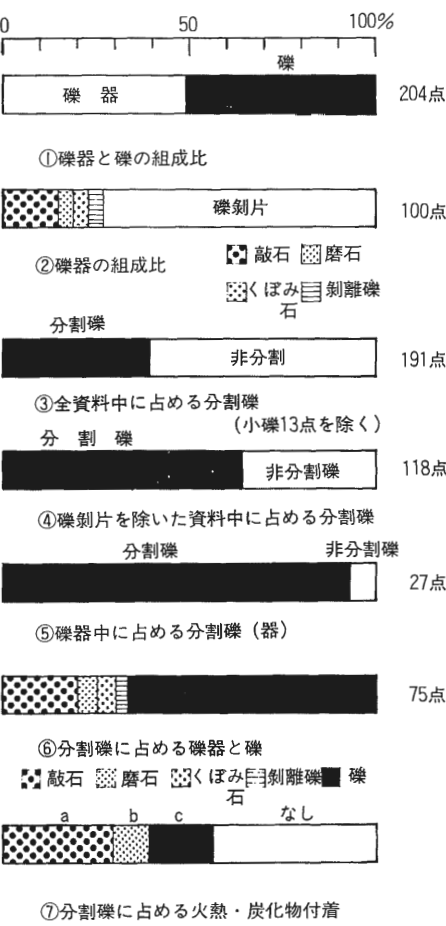
201）に小規模の打痕（？）が認められる。

以上のほかに破損した礫一分割礫が50点出土している。

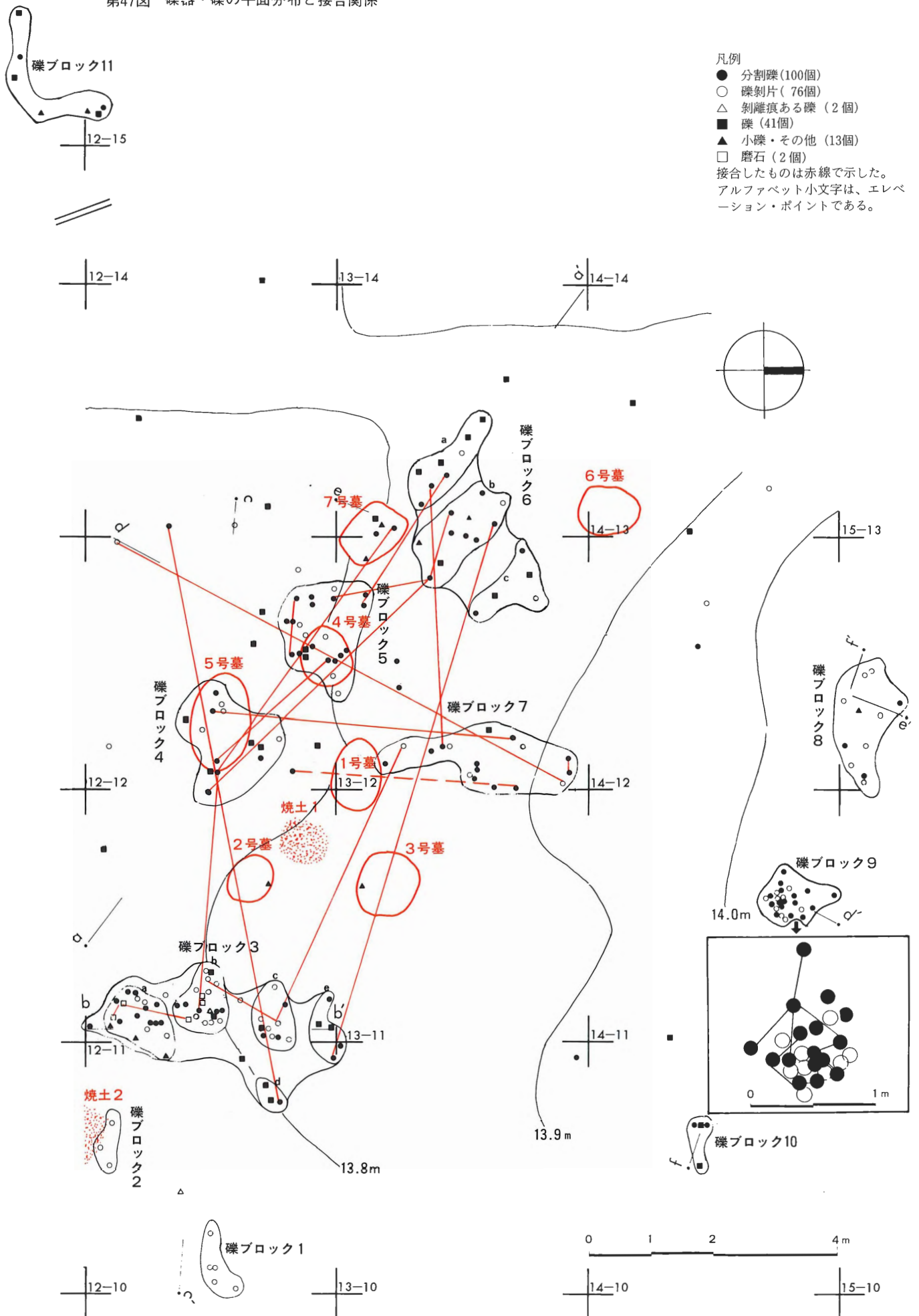
表19 礫の属性

礫番号	出土地 グリッド	遺構 ブロック	重量 g	使用痕	火 炭化物付着	熱 備	考
179	12-13(20)	遺構外	64	—	—		
180	13-13(11)	ブロック 8	34	—	—		
181	13-12(13)	ブロック 8	90	—	—		
182	13-12(23)	ブロック 8	90	—	有		
183	12-12(32)	ブロック 7	72	—	—		
184	12-12(32)	ブロック 7	260	—	有		
185	12-12(20)	ブロック 6	18	—	—		
186	14-10(12)	ブロック 13	22	—	—		
187	13-13(00)	7号墓・ 埋土1層	100	—	有		
188	12-12(21)	遺構外	110	—	—		
189	14-13(01)	遺構外	33	—	—		
190	12-11(30)	ブロック 3	60	—	—		
191	12-14(02)	遺構外	54	—	—		
192	13-13(20)	遺構外	11	—	—		
193	13-12(02)	ブロック 9	18	—	—		
194	12-15(00)	ブロック 15	27	—	—		
195	11-15(22)	ブロック 15	116	打痕(?)	—		敲石か?
196	13-13(21)	ブロック 8	—	—	—		
197	13-13(11)	ブロック 8	44	—	有		
198	15-12(33)	遺構外	132	—	—		
199	12-12(20)	ブロック 6	90	—	有		
200	11-15(21)	ブロック 15	139	—	—		
201	13-13(21)	ブロック 8	300	打痕(?)	有		敲石か?
202	12-12(22)	遺構外	412	—	有		
203	12-11(03)	遺構外	524	—	有		
204	12-10(23)	ブロック 3	158	—	有		
205	13-13(22)	遺構外	157	—	—		
206	12-12(11)	ブロック 6	47	—	—		
207	12-11(20)	ブロック 3	15	—	—		
208	14-13(02)	遺構外	24	—	—		
209	12-12(30)	遺構外	—	—	有		
210	12-12(20)	ブロック 6	30	—	有		
211	13-12(33)	ブロック 8	15	—	有		
212	12-10(23)	ブロック 3	117	—	—		
213	12-11(30)	ブロック 3	30	—	—		
214	14-11(10)	遺構外	42	—	—		
215	12-10(23)	ブロック 3	30	—	有		
216	14-10(12)	ブロック 13	51	—	有		
217	12-11(20)	ブロック 3	12	—	—		
218	12-11(11)	ブロック 3	35	—	有		
219	12-13(01)	遺構外	—	—	—		

第46図 礫器・礫の組成比



第47図 礫器・礫の平面分布と接合関係



(2) 組成

まず、単純に礫器が全資料204点中に占める割合をみると、およそ半分を占めている（第46図一①）。その要因は、なんといっても礫剥片にあらう。(1)―⑤でみたように礫剥片の性格は、分割礫など礫の割りに伴うもので使用を本来の目的とはしていない。したがって、それを除外して石器だけをみるなら27点と少なく、全資料の1割強を占めるにすぎない。

敲石、磨石、くぼみ石、剝離礫などの礫器では、敲石が他の約4倍に達する出土量ではあるが（第46図一②）

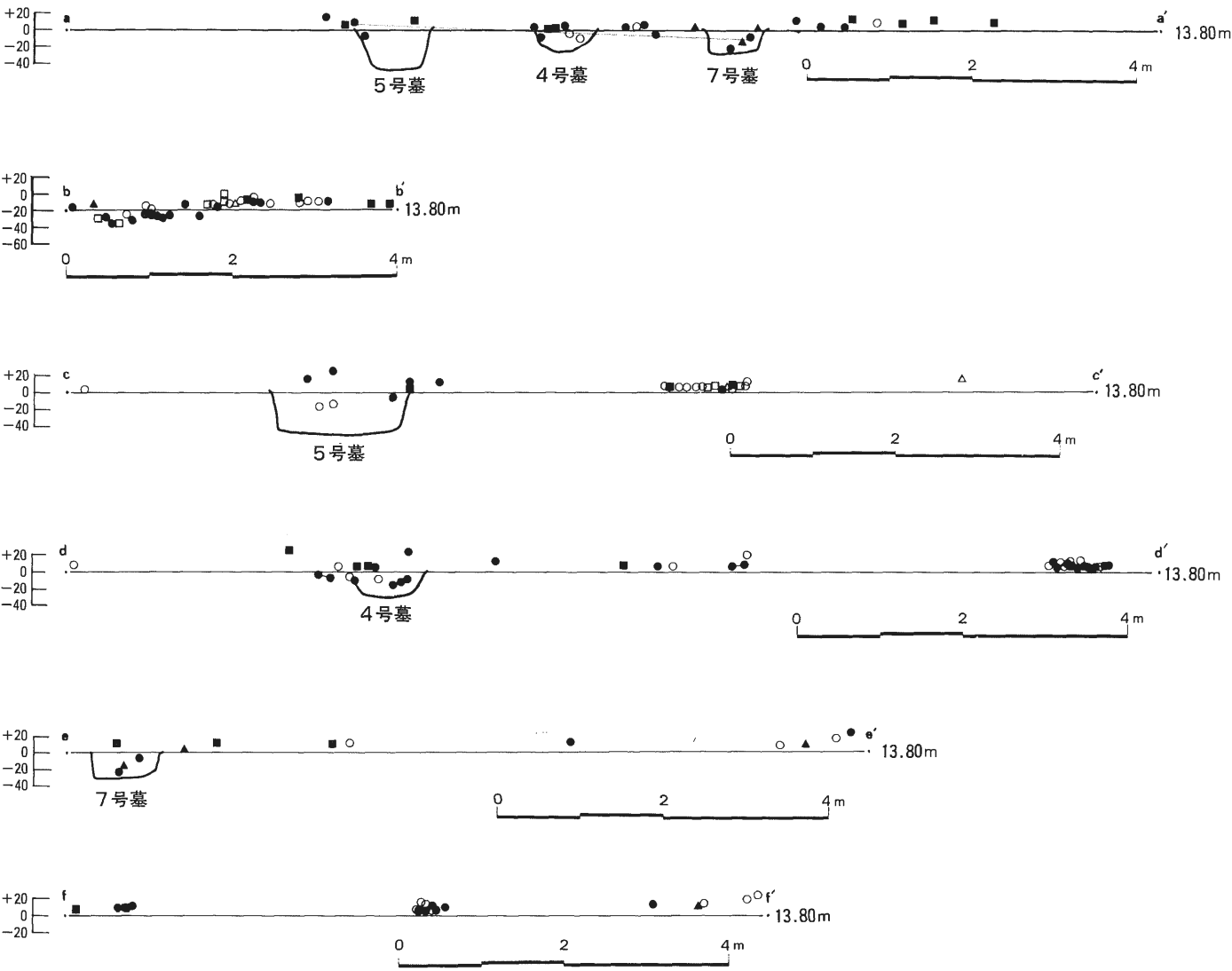
いずれにしても総点数が少ない、という特徴をもっている。

礫器や礫の特徴のひとつに破損品が目につくことをあげることができる。それは、総数191点（全資料204点から小礫13点を除いた数）で約4割弱を占めている（第46図一③）ことからもうなづける点である。つぎに、この点に注目しながら観察することにした。

(3) 礫器・礫の破損―「分割礫」についての分析

① 大きさと形状

第48図 礫器・礫の垂直分布と接合関係



凡例
① 遺構は基線を中心に50cmの範囲内のものを示した。
② 遺物は基線からの断面を示した。

表20 分割礫の属性

種番号	出土地 グリッド	遺構 ブロック	重量g	接合関係	使用痕	火熱・ 炭化物付着	割取り法
1	13-12(02)	ブロック7	148	接合資料 番号1	無	◎	中央部加撃
2	13-13(10)	ブロック8	304				
3	12-13(10)	遺構外	160	接合資料 番号2	片面に剥離痕	●	中央部加撃
4	12-10(33)	ブロック3	160				
5	12-12(32)	ブロック7	72	接合資料 番号3	無	無	中央部加撃
6	12-12(33)	ブロック7	202				
7	13-12(02)	ブロック9	158	接合資料 番号4	無	◎	中央部加撃
8	12-12(21)	ブロック6	150				
9	12-12(32)	ブロック7	58	接合資料 番号5	周縁に打痕	○	中央部加撃
10	12-12(32)	ブロック7	70				
11	13-12(13)	ブロック8	70				
12	13-13(10)	ブロック8	68	接合資料 番号6	無	◎	中央部加撃
13	12-11(13)	ブロック6	96				
14	12-12(33)	ブロック7	166				
15	13-13(10)	ブロック8	322	接合資料 番号7	片面や周縁 に打痕	●	中央部加撃
16	13-12(10)	ブロック9	282				
17	13-13(20)	ブロック8	224	接合資料 番号8	周縁に打痕	無	中央部加撃
18	12-10(33)	ブロック3	228				
19	13-13(00)	7号墓・ 埋土1層	180	接合資料 番号9	一端に打痕	無	中央部加撃
20	12-12(20)	ブロック6	124				
21	12-11(10)	ブロック3	88				
22	13-12(30)	ブロック9	26	接合資料 番号10	無	●	片面加撃
23	13-12(30)	ブロック9	24				
24	13-12(20)	ブロック9	1,300	接合資料 番号11	周縁割取り痕 片面に剥離痕	○	中央部加撃
25	12-12(03)	遺構外	282				
26	12-12(21)	ブロック6	378	—	無	○	片面加撃
27	13-13(10)	ブロック8	258	—	無	無	片面加撃
28	12-15(00)	ブロック15	210	—	両面・側縁 に打痕	無	片面加撃
29	11-15(20)	ブロック15	172	—	側縁に打痕	◎	中央部加撃
30	14-10(12)	ブロック13	180	—	無	無	片面加撃
31	13-12(23)	ブロック8	218	—	片面に擦痕	○	中央部加撃
32	12-11(10)	ブロック3	136	—	無	◎	中央部加撃
33	12-11(30)	ブロック3	560	—	片面に打痕	○	片面加撃
34	12-11(10)	ブロック3	108	—	無	無	片面加撃
35	12-11(20)	ブロック3	242	—	片面に打痕	無	片面加撃
36	12-11(00)	ブロック3	452	—	くぼみ石	無	片面加撃
37	13-12(10)	ブロック9	196	—	無	無	不明
38	12-10(33)	ブロック3	352	—	無	●	片面加撃
39	11-15(21)	ブロック15	142	—	無	無	不明
40	13-12(23)	ブロック8	186	—	周縁に打痕	●	片面加撃
41	12-11(20)	ブロック3	106	—	無	無	片面加撃
42	12-11(00)	ブロック3	526	—	無	無	中央部加撃
43	13-12(02)	4号墓・ 埋土1層	338	—	無	●	中央部加撃
44	12-12(33)	ブロック7	378	—	片面に打痕	◎	中央部加撃
45	15-12(01)	ブロック11	272	—	無	◎	片面加撃
46	13-13(10)	ブロック8	230	—	くぼみ石	○	片面加撃
47	13-13(20)	ブロック8	124	—	無	◎	火割れ
48	12-11(20)	ブロック3	184	—	無	◎	中央部加撃
49	14-10(12)	ブロック13	136	—	無	◎	中央部加撃
50	12-12(32)	ブロック5	206	—	無	◎	中央部加撃
51	12-12(22)	ブロック8	310	—	片面に擦痕	◎	片面加撃
52	12-11(10)	ブロック3	262	—	側縁に打痕	無	片面加撃
53	12-11(10)	ブロック3	166	—	片面に打痕	●	片面加撃
54	11-15(21)	ブロック15	306	—	両面くぼみ石	●	片面加撃
55	12-11(00)	ブロック3	196	—	無	◎	中央部加撃

注：火熱・炭化物付着について、◎は火熱・炭化物共にみられる、○は火熱のみがみられる、●は炭化物付着のみがみられるもの

種番号	出土地 グリッド	遺構 ブロック	重量g	接合関係	使用痕	火熱・ 炭化物付着	割取り法
56	13-12(02)	ブロック5	168	—	無	無	不明
57	12-11(00)	ブロック3	102	—	無	◎	火割れ(?)
58	12-11(00)	ブロック3	226	—	無	◎	中央部加撃
59	12-11(10)	ブロック3	78	—	無	◎	不明
60	12-11(20)	ブロック3	178	—	無	◎	中央部加撃
61	12-12(20)	ブロック6	44	—	無	無	不明
62	12-12(20)	5号墓・ 埋土1層	146	72と接合・ 番号12	無	●	中央部加撃
63	13-12(02)	遺構外	64	—	無	◎	片面加撃
64	13-10(03)	ブロック3	84	—	無	無	片面加撃
65	14-12(12)	遺構外	146	—	無	無	不明
66	12-11(00)	ブロック3	106	—	無	無	ハジケ
67	12-12(32)	ブロック7	82	—	無	無	片面加撃
68	13-12(03)	遺構外	36	—	無	無	不明
69	13-12(01)	遺構外	78	—	無	無	不明
70	13-13(20)	ブロック8	90	—	無	無	中央部加撃
71	13-12(22)	ブロック9	1,040	—	無	無	中央部加撃
72	12-12(32)	4号墓・ 埋土2層	300	62と接合・ 番号12	無	●	中央部加撃
73	13-12(00)	ブロック5	280	—	片面に打痕	無	中央部加撃
74	13-12(02)	ブロック9	180	—	無	無	不明
75	12-11(30)	ブロック3	300	—	無	無	中央部加撃
76	12-12(32)	4号墓・ 埋土1層	200	—	無	無	不明
77	12-11(00)	ブロック3	260	—	無	●	中央部加撃
78	12-11(30)	ブロック3	160	—	無	無	不明
79	13-12(20)	ブロック9	100	—	片面に打痕	無	中央部加撃
80	12-12(32)	4号墓・ 埋土2層	30	—	無	無	不明
81	15-12(00)	ブロック11	420	—	無	○	中央部加撃
82	15-12(00)	ブロック11	190	—	無	◎	中央部加撃
83	13-13(00)	7号墓・ 埋土2層	260	—	側縁に打痕	無	中央部加撃
84	14-11(32)	ブロック12	60	接合資料 番号14	くぼみ石	◎	不明
85	14-11(32)	ブロック12	60				
86	14-11(22)	ブロック12	20				
87	14-11(22)	ブロック12	86				
88	14-11(32)	ブロック12	240	—	無	●	不明
89	14-11(32)	ブロック12	190	—	無	●	不明
90	14-11(32)	ブロック12	210	—	無	◎	片面加撃
91	13-12(20)	ブロック9	180	—	無	無	不明
92	14-11(32)	ブロック12	230	接合資料 番号13	無	◎	火割れ(?)
93	14-11(32)	ブロック12	70				
94	14-11(32)	ブロック12	30				
95	14-11(32)	ブロック12	20				
96	14-11(22)	ブロック12	20				
97	14-11(32)	ブロック12	10				
98	14-11(32)	ブロック12	20				
99	14-11(32)	ブロック12	20				
100	14-11(32)	ブロック12	10				
233-1	12-11(10)	ブロック3	150	接合資料 番号17	磨石	無	不明
-2	12-11(10)	ブロック3	38				
234-1	12-11(00)	ブロック3	68	接合資料 番号18	磨石	無	片面加撃
-2	12-11(00)	ブロック3	110				
-3	12-11(10)	ブロック3	220				

14組の接合資料などにもとづけば、礫の通常の大きさは大人の握り拳大であり、もっとも大きなもの（接合資料番号1，同7，同11）でもその約2倍程である。

形状は、角の丸くなった扁平な礫が使用されることが一般的で、例外はほとんどないといってよい。

② 分割礫の構成

分割礫と認定したものは、総数75点である。その内訳は、敲石15点、磨石4点、くぼみ石4点、剝離痕礫2点、礫50点である。

これは、小礫13点を除いた全資料191点のなかで分割が行なわれた礫器・礫が約4割にのぼる（第46図―③）ことを示しているし、さらに礫剝片はその大部分が本来使用目的にそったものではなく分割などに伴うもの、ということだから（①―⑤）それを除くなら、6割強について分割が行なわれていることを示している（第46図―④）。

27点の礫器だけに限ると、9割強が分割されていることになり（第46図―⑤）、分割礫に占める礫器と礫の割り合いがいかに高かったかがうかがえる（第46図―⑥）。

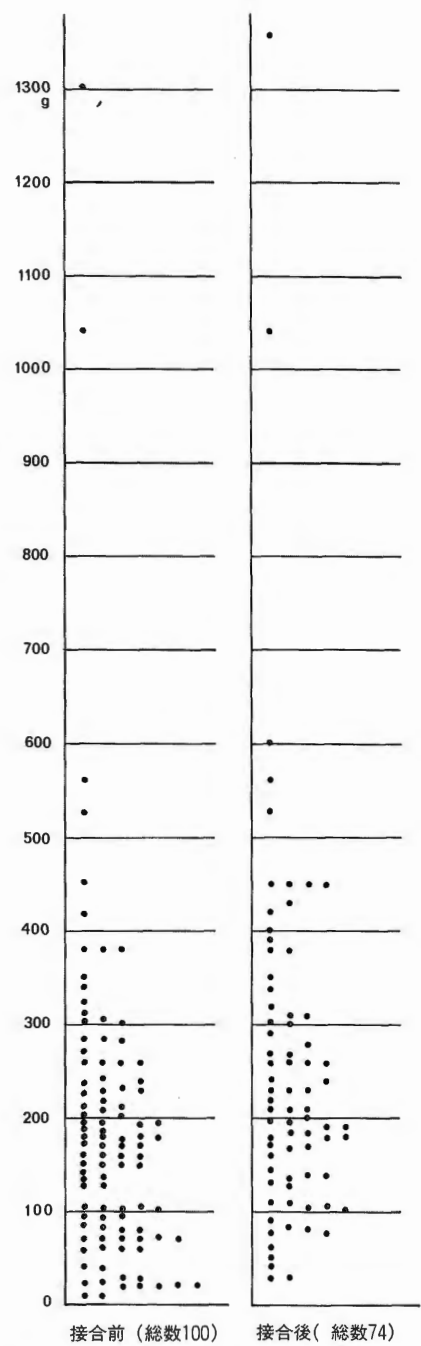
③ 重量

挿図18に重量分布図を示す。分割礫が接合する資料もあるため、接合以前の106点について左側に、接合後の75点について右側にそれぞれ示した。

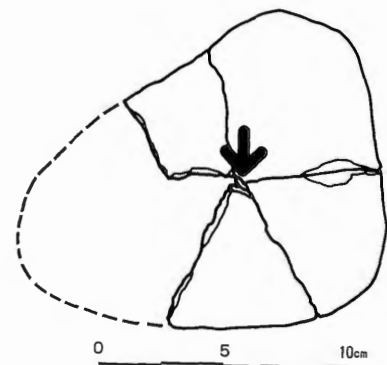
それによると重量が1,000gをこえるものは2点（接合資料番号11、礫番号71）ときわめて少ない。また、100g以下のものも10点で全体の1割強を占めるにすぎない。大半のものは100g以上、300g以下にまとまる傾向を示している。

④ 火熱・炭化物付着

総数75点のうち42点（56％）に火熱による赤化、ひび割れなどの現象や炭化物の付着による黒色化の現象が認められた。それらは、a 火熱、炭化物付着の両方の現象が認められたもの 22点、b 火熱による赤化現象だ



第49図 分割礫の重量分布



第50図 分割礫の割取り法
接合資料番号6にもとづけば、礫の片面、ほぼ中央部分に一撃を加えることによって（矢印）、すくなくとも5点の礫片に分割されたことがわかる。

けが顕著なもの 7点, C 炭化物付着による黒色化の現象だけが顕著なもの 13点にわけることができる(第46図-⑦)。

さらに重要な点は、これら a～c の現象がいずれも分割以前のもので、しかも敲石などの礫器については礫器使用後に行なわれた、ということである。これは、礫器としての用途(第一次用途)→火を伴う用途(第二次用途)を経て分割→廃棄・集積という経過を示すもので、礫器が他の多くの礫とともに第二次用途に転化された様子を読み取ることができる。

⑤ 分割方法

総数75点のうち、分割方法が判別できた資料は58点である。それによると、割り取りは礫の片面の中央部分付近を加撃する(第50図)もので、それによって55点が分割されたことが判明した。つまり、礫の分割は複雑な工程にもとづくものではなく、礫の一面にほとんど一撃を与えることによって2分割、3分割あるいは9点に分割といった、複数の礫片がほとんど同時に割り取られるわけである。

2 接合資料

分剝礫、礫剝片、磨石などで接合したものは、それぞれ14組、2組、2組の合計18組である。

(1) 接合資料番号と構成礫番号

接合資料番号1：礫番号1+2

接合資料番号2：礫番号3+4

接合資料番号3：礫番号5+6

接合資料番号4：礫番号7+8

接合資料番号5：礫番号9+10

接合資料番号6：礫番号11+12+13+14

接合資料番号7：礫番号15+16

接合資料番号8：礫番号17+18

接合資料番号9：礫番号19+20+21

接合資料番号10：礫番号22+23

接合資料番号11：礫番号24+25

接合資料番号12：礫番号62+72

接合資料番号13：礫番号92+93+94+95+96+97+98+99+100

接合資料番号14：礫番号84+85+86+87

接合資料番号15：礫番号139+148

接合資料番号16：礫番号141+142+152

接合資料番号17：礫番号233-①+233-②

接合資料番号18：礫番号234-①+234-②+234-③

(2) 接合状況(第47・48図)

1 接合資料番号1：2点が破断口で接合し、原石の約 $\frac{1}{2}$ になる。礫番号1は、「礫ブロック5」(13-12(02), 第Ⅲ層中)に、礫番号2は「礫ブロック6」(13-13(10), 第Ⅲ層中)にみられ、その距離は直線にして約2.5mである。

2 接合資料番号2：2点が破断口で接合し原石の約 $\frac{1}{2}$ になる。礫番号3は12-13(10), 第Ⅲ層中に、礫番号4は「礫ブロック3」(12-10(32), 第Ⅲ層)にみられ、その距離は直線にして約9.3mである。

3 接合資料番号3：2点が破断口で接合し、原石の約 $\frac{1}{3}$ 強になる。2点はいずれも、「礫ブロック5」(12-12(32), 第Ⅲ層中)で、その距離は直線にして約0.9mである。

4 接合資料番号4：2点が破断口で接合し原石の約 $\frac{1}{2}$ になる。礫番号7は「礫ブロック7」(13-12(20), 第Ⅲ層中)に、礫番号8は「礫ブロック4」(12-12(21), 第Ⅲ層中)にみられる。とくに、礫番号8は1号墓の上面にあるがそれが包含されている土層やレベル(14.04m)から判断してこの墓には直接伴うものではなく、5号墓形成後の生活面上にあると判断した。

5 接合資料番号5：2点が破断口で接合し原石の約1/3強になる。2点はいずれも「磔ブロック5」(12-12 (32), 第Ⅲ層中)にあり,わずか0.1mと近接している。

6 接合資料番号6：4点が破断口で接合し,原石の約2/3になる。磔番号11と磔番号12は,「磔ブロック6」(磔番号11は13-12 (13), 第Ⅲ層, 磔番号12は13-13 (10), 第Ⅲ層中)にあってその距離は直線にして約1.1mである。磔番号13は「磔ブロック4」(12-11 (13), 第Ⅲ層中)に, 磔番号14は「磔ブロック5」(12-12 (32), 第Ⅲ層中)にある。磔番号13は, 番号14と直線にして約3.6m, 磔番号11と直線にして約1.6m, 磔番号12と直線にして約2.3mの距離にある。磔番号12と磔番号13は直線にして約5.8mの距離にある。

7 接合資料番号7：2点が破断口で接合し原石の約1/2になる。磔番号15は「磔ブロック6」(13-13 (10), 第Ⅲ層中)に, 磔番号16は「磔ブロック7」(13-12(10), 第Ⅲ層中)にあって, その距離は直線にして約4.1mである。

8 接合資料番号8：2点が破断口で接合し原石の約1/2弱になる。磔番号17は,「磔ブロック6」(13-13 (20), 第Ⅲ層中)に, 磔番号18は「磔ブロック3」(12-10 (33), 第Ⅲ層中)にあって, その距離は直線にして約8.7mである。

9 接合資料番号9：3点が破断口で接合し原石の約3/4になる。磔番号19は7号墓の埋土1層中にみられた。磔番号20は「磔ブロック4」(12-12 (20), 第Ⅲ層中)

に, 磔番号21は「磔ブロック3」(12-11 (10), 第Ⅲ層中)にそれぞれみられた。磔番号19と磔番号20の距離は直線にして約4.7m, 磔番号19と磔番号21の距離は直線にして約8.2mである。また, 磔番号20と磔番号21の距離は直線にして約3.7mである。

これらの3点の出土および分布状況は, この磔が「磔ブロック3」で割り取られ,そのうちの1点(磔番号19)が7号墓の埋土1層に土砂とともに埋められた, ということを示していよう。また磔番号20は5号墓の東壁に近接して出土しているが, 第Ⅲ層中に含まれていたものでこの墓に伴うものではない。

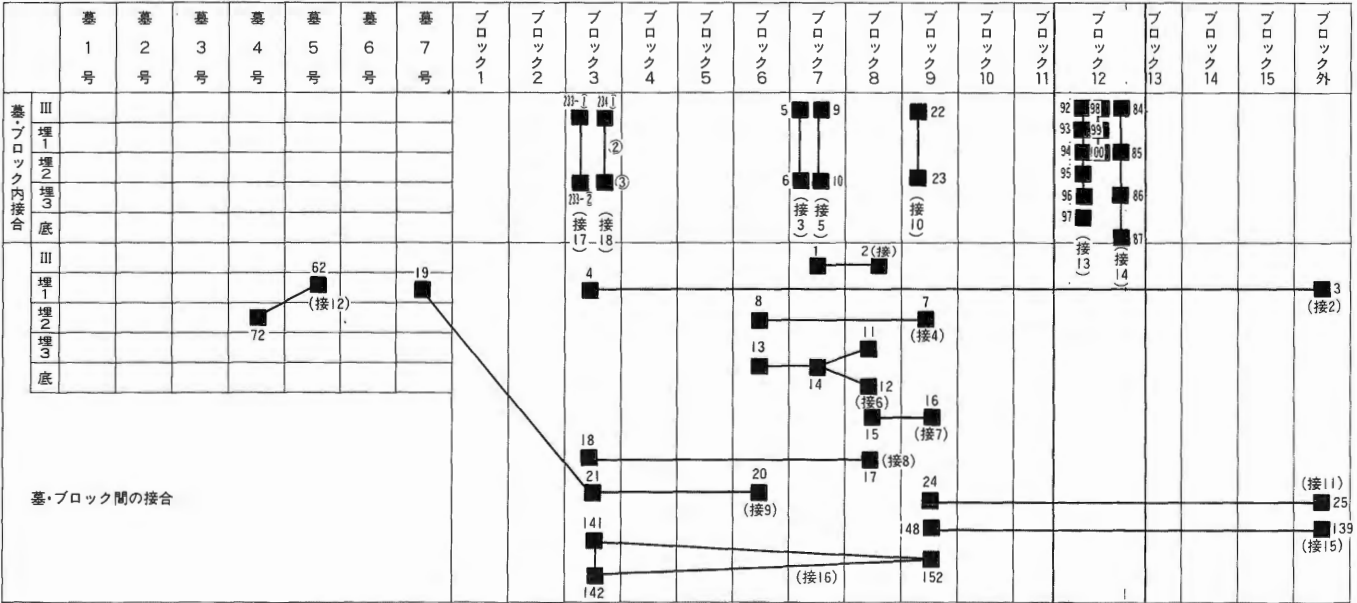
10 接合資料番号10：2点が節理面で接合し原石の約1/4になる。2点とも「磔ブロック7」(13-12 (30), 第Ⅲ層中)にあり,その距離は直線にして約0.2mである。

11 接合資料番号11：2点は直接接合しないが, 色調・含有物質・形状などからみて明らかに同一個体である。磔番号24は「磔ブロック7」(13-12 (20), 第Ⅲ層中)に, 磔番号25は12-12 (30) グリッド, 第Ⅲ層にみられる。その距離は直線にして約3.6mである。

12 接合資料番号12：2点が接合し原石の約1/2になる。磔番号72は4号墓(埋土2層), 磔番号62は5号墓(埋土1層)から出土しており, その距離は直線にして約2.4mである。

13 接合資料番号13：9点が破断口や節理面で接合し原石の約3/5になる。分割磔, 磔剥片, 磔などが70×80(cm)の範囲内に集中する「磔ブロック9」(14-11 [22~31

表21 磔器・磔接合資料の散布状況



注：(接)とは「接合資料番号」の略である。

～32))に含まれている。

14 接合資料番号14：4点が破断口で接合し原石の約1/2になる。主に接合資料番号13と共に「礫ブロック9」を形成している。

15 接合資料番号15：礫剥片2点が破断口で接合する。礫番号139は12-12(03)グリッドで第Ⅲ層中に、礫番号148は「礫ブロック7」(13-12(30),第Ⅲ層中)にあって、その距離は直線にして約8mである。

16 接合資料番号16：礫番号141と142は破断口で接合、礫番号152は直接接合しないが、含有物・色調・形状などからみて同一個体である。礫番号141と142は「礫ブロック3」(12-11(30),12-11(10),第Ⅲ層)のなかにあり、その距離は直線にして約1.3mである。礫番号152は「礫ブロック7」(13-12(14),第Ⅲ層中)にあって、礫番号141、142との直線距離は、約4.8mである。

17 接合資料番号17：磨石が破断口で接合したものである。「礫ブロック3」(12-11(10),第Ⅲ層中)にあり、ほぼ接して出土した。

18 接合資料番号18：破片4個が破断口などで接合した。「礫ブロック3」(12-11(00～10),第Ⅲ層)内であり、その距離は直線にして約0.2～1.1mである。

3 出土および分布状況

(1) 遺構(墓)出土の礫器・礫

まず、表22に遺構出土の礫器・礫を示す。これをみてわかるように、墓からの出土例は、4号墓、5号墓、

表22 墓出土の礫器・礫属性

墓	点数	種類	礫番号	層位	備考
2号	1	小礫	229	埋土3	
4号	6	分割礫	43	埋土1	
		分割礫	76	埋土1	
		礫剥片	119	埋土1	
		礫剥片	155	埋土1	
		分割礫	72	埋土2	炭化物付着、62と接合＝接合資料番号12
		分割礫	80	埋土2	
5号	4	分割礫	62	埋土1	炭化物付着、72と接合
		礫剥片	159	埋土1	
		礫剥片	163	埋土2	
		礫剥片	174	埋土2	
		礫	187	埋土1	20、21と接合＝接合資料番号9
7号	5	小礫	232	埋土1	
		分割礫	83	埋土2	
		小礫	227	埋土2	
		小礫			

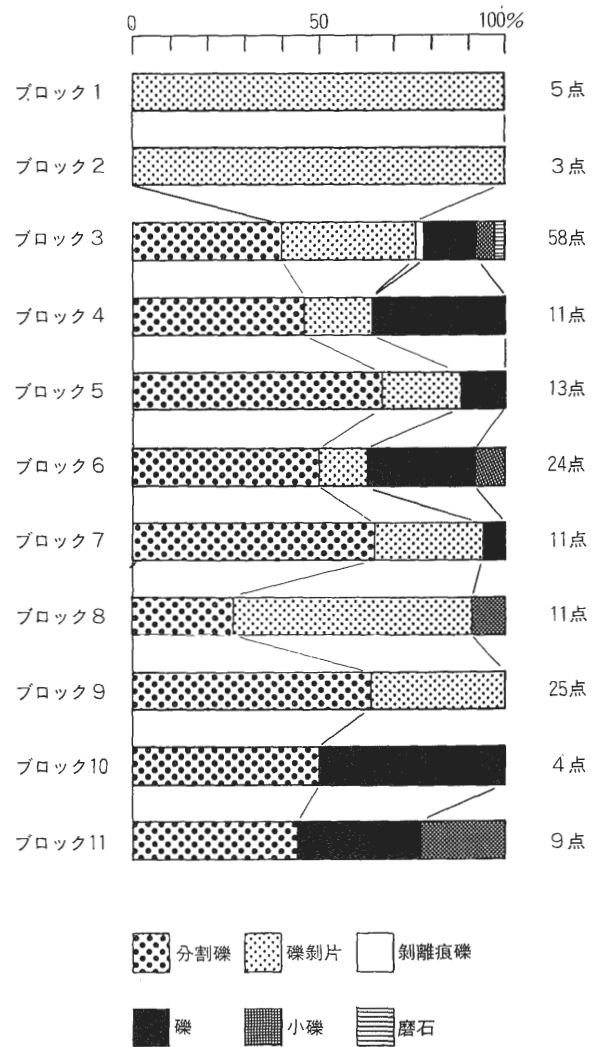
7号墓から6点、4点、3点の合計13点で、全体(204点)の6.4%にすぎない(小礫は除く)。

それらは、いずれも墳口から墳中にかけての出土であり、墳底からの出土は皆無である。

墓に含まれている礫器・礫の種類は、敲石(礫番号19、83)2点、礫剥片(礫番号119、155、159、163、174)5点、礫(礫番号43、62、72、76、80、187)6点であり、火熱や炭火物付着のもの(礫番号43、62、72、187)がわずかに4点みられる。また、7点(礫番号19、43、62、72、76、80、83)が分割礫である。

一方、墓と墓あるいは墓と遺構外での接合資料が2組みられた(接合資料番号9と12)。

接合資料番号9にもとづけば、7号墓の埋土1層に礫番号19の分割礫がみられ、遺構外のやはり分割礫2点(礫番号20、21)と接合した(第47図)。また、接合資料番号12にもとづけば、4号墓の埋土2層の分割礫(礫番号72)と5号墓の埋土1層層の分割礫(礫番号62)と



第51図 礫ブロック別組成比

が接合した（第47図）。

(2) 遺構（墓）外出土の礫器・礫

この遺跡から出土した礫器や礫の9割以上が墓以外の生活面から出土した。

これらは遺跡のなかに雑然と分布しているのではな

く、礫器や礫ばかりではなく他の遺物と組み合わせとなつて、あるまとまりをもって出土している。

以下、その分析を記述することにする。

表23 礫ブロックの属性

礫ブロック番号	位置グリッド	全体ブロック番号	規模 cm・形状	礫器・礫	小ブロックの有無・状況	ブロック内接合・同一個体と距離	礫ブロック間接合
1	12-10(10-20)	1	100×40 帯状	礫刻片5点（礫番号103、104、110、131、132）	—	—	—
2	12-10(02)	2	70×20 円	礫刻片3点（刻番号113、129、134）	—	—	—
3	12-10(22)、12-10(23) 12-10(32)、12-10(33) 12-11(00)、12-11(01) 12-11(10)、12-11(11) 12-11(20)、12-11(21) 12-11(30)、13-10(03)	3	410×140 不整	分割礫23点（礫番号4、18、21、32、33、34、35、36、41、42、48、52、53、55、57、58、59、60、64、66、75、77、78）、礫刻片21点（礫番号101、102、107、111、112、122、123、124、125、126、127、128、133、134、141、142、144、146、149、150、156）、剝離痕礫1点（礫番号177）、磨石2点（礫番号233、234）、礫・小礫11点（礫番号190、204、207、212、213、215、217、218、221、226、228）	5つの小ブロック a：140×70、分割礫11点、礫刻片4点、小礫3点、擦石1点、計19点 b：90×80、分割礫5点、礫刻片9点、剝離痕礫1点、擦石2点、礫2点、計19点 c：90×50、分割礫3点、礫刻片6点、礫1点、計10点 d：40×10、分割礫1点、礫2点、計3点 e：100×30、分割礫3点、礫2点	3組が接合 接合資料番号18は小ブロックa内とa-b 接合資料番号17は小ブロックb内 接合資料番号16は、小ブロックc-e間	3組が他の礫ブロックと接合 接合資料番号8は礫ブロック6と、番号9は4、7号墓と、番号16は7とそれぞれ接合 そのほか番号2が遺構外（12-13）の礫と接合
4	12-12(10) 12-12(11) 12-12(20) 12-12(21) 12-12(30)	6	110×90 不整	分割礫5点（礫番号8、13、20、26、61）、礫刻片2点（礫番号115、116）、礫4点（礫番号185、199、206、210）	3～4点づつ3個所にわかれて いる。 5号墓の上部～裾	—	3組が他のブロックと接合 接合資料番号4は礫ブロック7と、番号6は礫ブロック5、6と、番号9は3、7号墓とそれぞれ接合
5	12-12(31)、12-12(32) 12-12(33)、13-12(01) 13-12(02)、13-12(03)	7	170×140 不整	分割礫11点（礫番号1、5、6、9、10、14、44、50、56、67、68）、礫刻片4点（礫番号108、109、136、140）、礫2点（礫番号183、184）	4号墓の上部～裾に分布	2組が接合 接合資料番号3と、接合資料番号5	2組が他のブロックと接合。 接合資料番号1は礫ブロック6と、番号6は番号4とそれぞれ接合
6	13-12(13)、13-12(22) 13-12(23)、13-12(32) 13-12(33)、13-13(10) 13-13(11)、13-13(20) 13-13(21)、	8	300×160 不整	分割礫12点（礫番号2、11、12、15、17、27、31、40、46、47、51、70）、礫刻片3点（礫番号138、147、151）、礫・小礫9点（礫番号180、181、182、196、197、201、211、222、232）	3つの小ブロック a：170×40、分割礫3点、礫刻片1点、礫4点、計8点 b：180×60、分割礫7点、礫刻片1点、礫3点、計11点 c：130×10、分割礫2点、礫刻片1点、礫2点、計5点	1組が接合 接合資料番号6は小ブロックb内	4組が他の礫ブロックと接合。 接合資料番号6は礫ブロック4、5と、接合資料番号7は礫ブロック7と、接合資料番号8は礫ブロック3とそれぞれ接合
7	13-12(00)、13-12(10) 13-12(20)、13-12(21) 13-12(30)、	9	300×90 不整	分割礫10点（礫番号7、16、22、23、24、37、71、74、79、91）、礫刻片5点（礫番号105、117、135、148、152）、礫1点（礫番号193）	—	1組が接合。 接合資料番号10	3組が他の礫ブロックと接合。 接合資料番号4が礫ブロック4と、番号7が6と、番号16が3と接合
8	15-12(00)、15-12(01) 15-12(02)	11	180×90 不整	分割礫3点（礫番号45、81、82）、礫刻片7点（礫番号120、121、145、160、161、162、165）、小礫1点（230）	—	—	—
9	14-11(21)、14-11(22) 14-11(31)、14-11(32)	12	120×80 不整	分割礫16点（礫番号84、85、86、87、88、89、90、92、93、94、95、96、97、98、99、100）、礫刻片9点（礫番号166、167、168、169、170、173、175、192）	—	2組が接合。 接合資料番号13と14	—
10	14-10(11)、14-10(12)	13	60×30 不整	分割礫2点（礫番号30、49）、礫2点（礫番号186、216）	—	—	—
11	11-15(20)、11-15(21) 11-15(22)、11-15(30) 11-15(31)、12-15(00)	15	250×170 不整	分割礫4点（礫番号28、29、39、54）、礫・小礫5点（礫番号194、195、200、220、224）	—	—	—

4 礫ブロック

(1) 礫ブロックの様相

礫器や礫が、あるまとまりを示して出土した。それらを「礫ブロック」とよび、「礫ブロック1」から「礫ブロック11」まで11個所に区分した（第47図）。

礫ブロックは礫だけで構成されるものもある（礫ブロック1）が、このような例は稀れで、大部分は土器片など他の遺物と組み合わせとなって、遺跡全体のなかのブロックを形成している（表23参照）。

礫ブロックの規模は、もっとも大きなもの（礫ブロック3）で径が4m強、もっとも小さなもの（礫ブロック10）で径が60cmと差がある。しかし、その形状は帯状（礫ブロック1）や円形（礫ブロック2）のような定形は少なく、不整形が主体を占める。

礫ブロックのなかには複数の小ブロックによって構成されているものがみられる。礫ブロック3は、5つの小ブロックから構成されている。もっとも南側から北側へ順にa, b, c, eとした小ブロックが20~30cm間隔で並列、d小ブロックがC小ブロックの東側に突出した状態で位置する。礫ブロック4は、5号墓の上部から裾部にかけて形成されているが、礫は裾部に3~4点ずつ3個所に分布している。礫ブロック5は、4号墓の上部から裾部にかけて形成されているもので、礫は墓の西半分の上部と、西側の裾部にひろく分布している。礫ブロック6は、3つの小ブロックから構成されている。もっとも西側から東側へ順にa, b, cとした小ブロックが約40cm間隔で並列している。

以上述べた4つの礫ブロック以外は明瞭な小ブロックを伴わず、礫類が一様に分布している。

(2) 礫ブロックの構成

3点から5点と少ない礫器あるいは礫によって構成さ

れている礫ブロックは、礫ブロック1, 2, 10の3個所である。そのうち、礫ブロック1と2は、礫剥片だけによって構成されるものである。また、礫ブロック10は、火熱・炭化物付着礫（礫番号49, 216）を2点含む分割礫（礫番号30, 49）と礫（礫番号186, 216）から構成されるものである。

9点から25点によって構成されている礫ブロック（礫ブロック4, 5, 6, 7, 8, 9, 11）が7個所と多くみられる。分割礫、礫剥片、礫の3者で構成される点が特色であるが、礫ブロック8のように礫が欠落しているブロックや礫ブロック11のように礫剥片が欠落しているブロックがわずかにみられる。そのうち、火熱もしくは炭化物の付着がみられる礫は、礫ブロック4で5点（礫番号8, 13, 26, 199, 210）、礫ブロック5で7点（礫番号1, 9, 10, 14, 44, 50, 184）、礫ブロック6で13点（礫番号2, 11, 13, 15, 31, 40, 46, 47, 51, 182, 197, 201, 211）、礫ブロック7で5点（礫番号7, 16, 22, 23, 24）、礫ブロック8で3点（礫番号45, 81, 82）、礫ブロック9で16点（礫番号84~90, 92~100）、礫ブロック11で2点（礫番号29, 54）、それぞれ含まれている。それによると、火熱・炭化物付着が認められる礫は、もっとも多いもので6割強（礫ブロック9）、もっとも少ないもので2割弱（礫ブロック11）、平均すると4割~5割含まれている、ということになる。

礫類がもっとも多いのは礫ブロック3で、58点で構成されている。分割礫、礫剥片、礫のほかに剝離痕礫や磨石（これも分割されている）などが組み合わせとなり、礫器の種類も他の礫ブロックより豊富である。しかし、火熱・炭化物付着のみられる礫は14点で、2割強とやや低い比率にとどまる。

(3) 礫ブロック内および礫ブロック間の関係について

礫の接合資料にもとづけば（pp. 87~89）、礫ブロック内で接合・同一個体が確認されているものにつぎのよ

うなものがある。

礫ブロック 3 では、接合資料番号16, 17, 18の 3 組が確認された。そのうち、接合資料番号18によれば小ブロック a, b 間にまたがっており、すくなくともこのふたつの小ブロックの同時性を示している。

礫ブロック 5 では、接合資料番号 3 と 5 の 2 組が確認された。これは、このブロックの形成にそれ程時間を要しなかった、ということを示している。同様なことは、礫ブロック 6, 7, 9 にもあてはまるであろう。

礫ブロック間で接合・同一個体が確認されているものにつぎのようなものがある。

礫ブロック 3 からは、礫ブロック 4（接合資料番号 9）、礫ブロック 6（接合資料番号 8）、礫ブロック 7（接合資料番号16）のすくなくとも 3 箇所へと礫が持ち出されている。礫ブロック 4, 5, 6 は接合資料番号 6 によって、礫ブロック 4 と 7 は、接合資料番号 4 によって、礫ブロック 5 と 6 は接合資料番号 1 によって、礫ブロック 6 と 7 は接合資料番号 7 によって、それぞれ関連づけられる（表21）。

そして、土器なども含むブロックの相互の関係は第23図のごとくまとめられよう。

3 装身具, その他

(i) 玉類

玉類は、ガラス製と石製との 2 種類が出土した。

1 ガラス玉

3 点出土している。いずれも 1 号墓の墳底部に副葬品

表24 ガラス玉の属性

玉番号	外径	内径	厚さ	色調その他	
1	11.0mm	2.9mm	8.4mm	濃青色、気泡孔	第53図 2
2	11.3	2.5	8.3	濃青色	第53図 1
3	10.0	3.7	7.2	淡青色	第53図 3

として埋納されていたものである（5-2-(2)-①および(4), 第 7 図, 第 8 図, 第53図①）。属性については、表24に示す。

2 滑石製平玉

石質は滑石Talc（№. 86にもとづく）である。

総数750点で、3 号墓に726点と最も多く（そのうち墳底部出土の数点に赤色顔料が付着しているのが観察された）、4 号墓に 2 点、5 号墓に17点、そしてブロック11に 1 点、ブロック12に 4 点出土した（表11, 5-1, 5-4-(2)-②および第53図②, 第54図）。

そのうち、もっとも出土量の多い 3 号墓のなかから、計測可能な資料106点について（表25）その大きさをみるとつぎの二類に大別できる。

1 類—内径（孔径）が $1.3 \pm 0.1\text{mm}$ の玉。外径の平均は 2.6mm で、最大3.0mm（番号60）、最小1.9mm（番号35）を含む。厚さは平均1.5mm で、0.4mm（番号102）から2.7mm（番号33）までみられる。

106点中101点が 1 類に属し、3 号墓の平玉の典型的な大きさを示している。

2 類—内径（孔径）が $1.6 \pm 0.1\text{mm}$ の玉。外径の平均は 2.9mm で、最大3.6mm（番号101）、最小2.6mm（番号21）を含む。厚さは平均0.96mm で、0.4mm（番号101）から1.3mm（番号35）までみられる。

106点中わずかに 5 点しかない。

この結果を他の墓やブロックから出土した平玉と比べてみるとつぎのようになる。

4 号墓の 2 点の平玉は、1 類、2 類が各 1 点ずつみられる。5 号墓の平玉は、2 類の範囲内に入るものである。ブロック11の平玉は 2 類、ブロック12の平玉は 1 点（番号112）以外 2 類に属する。番号112はこの遺跡から出土した平玉のうちもっとも大きい。仮にこれを 3 類としておく。

平玉の製作（予察）

平玉の製作に関してはつぎの3点から判断する見通しである。というのは、この遺跡からは未完成品、失敗品、あるいは滑石製剥片や石鋸など、製作過程や製作そのものを裏付ける遺物が出土していないためである。その3点とは、

- 1 平玉の接合関係をしらべること
- 2 分割面の観察

3 計測値、とくに孔径（内径）に斉一性があるか否かを検討すること、である。

現在、これらの作業・検討は途上にあり、結果はまだ得られてはいない。とりあえず現状を述べるとつぎのようになる。

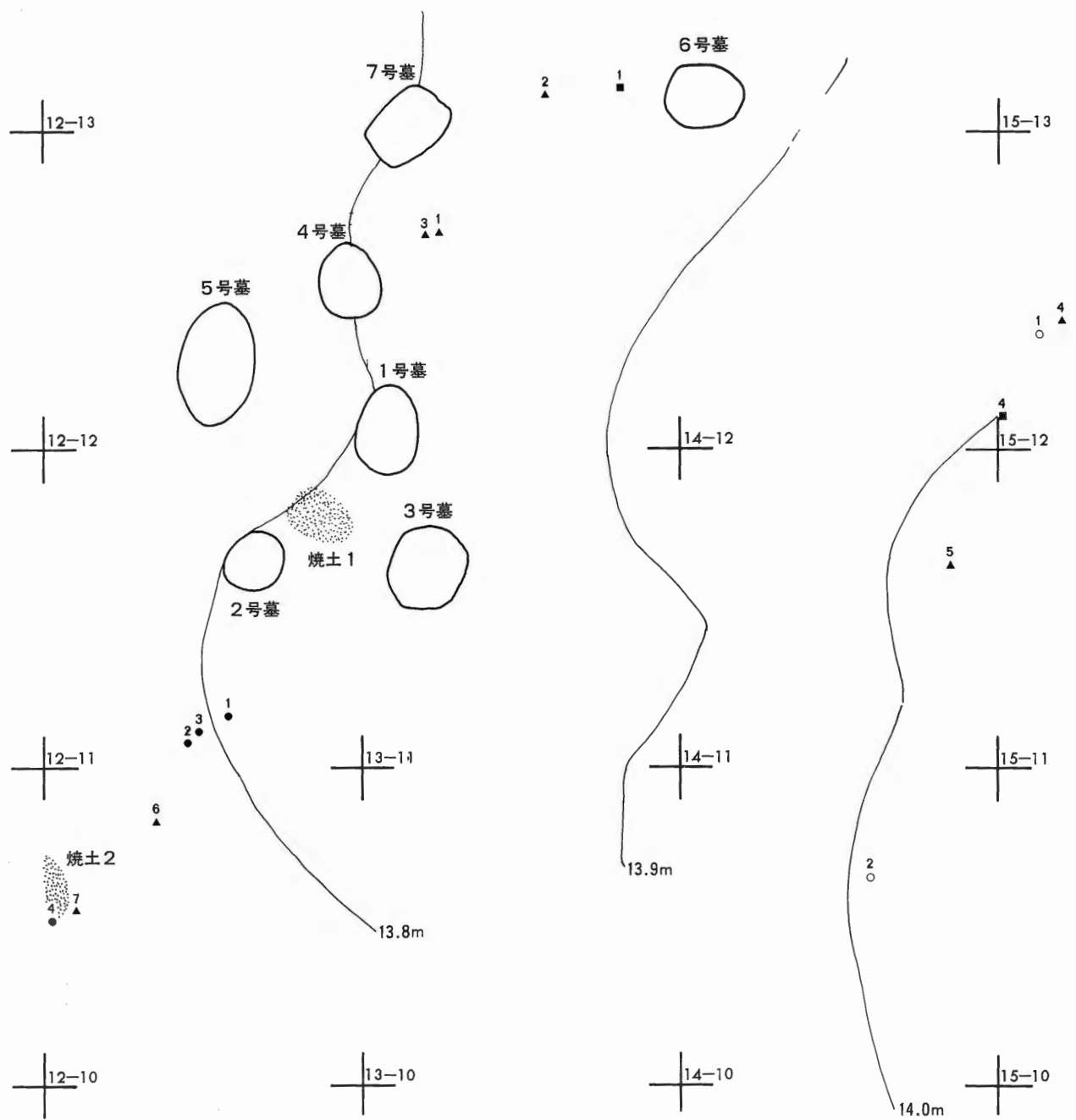
1の平玉の接合は、2組（No. 88の①+②、No. 227+No. 228）が確認されている。接合面は分割面で、二次的な研磨など施していない。2の分割面の観察の結果

表25 滑石製平玉の計測値

番号	外径 (mm)	内径 (mm)	厚さ (mm)	番号	外径 (mm)	内径 (mm)	厚さ (mm)	番号	外径 (mm)	内径 (mm)	厚さ (mm)
1	2.1	1.3	2.0	46	2.6	1.4	1.7	87	2.0	1.3	1.3
2	2.5	1.4	2.0	47	2.6	1.3	1.3	88	2.7	1.4	1.5
3	2.7	1.2	1.5	48	2.8	1.4	1.6	〃	2.3	1.3	1.3
4	2.8	1.2	1.5	49	2.6	1.3	1.3	〃	2.7	1.3	1.1
5	2.7	1.3	1.4	50	2.3	1.3	1.5	89	2.6	1.3	1.2
6	2.6	1.2	1.1	51	2.4	1.3	1.0	90	2.6	1.3	1.0
7	2.6	1.2	1.5	52	2.6	1.4	1.0	91	2.5	1.3	1.5
8	2.6	1.3	1.1	53	2.6	1.3	1.4	92	2.7	1.3	1.7
9	2.7	1.3	1.7	54	2.8	1.3	1.7	〃	2.7	1.3	2.2
10	2.7	1.3	1.8	55	2.2	1.3	1.6	〃	2.5	1.3	1.9
11	2.8	1.2	1.0	56	2.7	1.3	1.8	〃	2.6	1.3	1.6
12	2.6	1.3	1.6	57	2.9	1.4	1.6	〃	2.5	1.3	1.3
13	2.6	1.3	1.2	58	2.9	1.3	1.7	93	2.8	1.4	1.4
21	2.6	1.6	1.0	59	2.3	1.3	0.9	94	2.8	1.3	1.6
22	2.4	1.3	1.5	60	3.0	1.4	1.9	95	2.9	1.5	1.1
23	2.8	1.3	1.5	61	2.3	1.3	1.3	96	2.8	1.3	2.3
24	2.8	1.3	1.4	62	2.6	1.3	1.7	97	2.5	1.3	1.4
25	2.3	1.3	1.6	63	2.6	1.4	1.3	98	2.7	1.3	1.7
26	2.5	1.4	1.5	64	2.4	1.2	1.0	99	2.7	1.4	1.5
27	2.7	1.3	1.5	65	2.6	1.3	1.3	100	2.7	1.3	1.5
28	2.8	1.3	1.8	66	2.5	1.3	1.0	〃	2.8	1.4	1.3
29	2.1	1.3	1.7	67	2.5	1.2	1.6	〃	2.9	1.3	1.7
30	2.7	1.3	1.3	68	2.4	1.3	1.3	〃	2.5	1.3	0.9
31	2.6	1.3	1.6	69	2.5	1.3	1.3	〃	2.7	1.3	1.6
32	2.4	1.3	2.6	70	2.6	1.3	1.2	〃	2.7	1.3	0.9
33	2.6	1.3	2.7	71	2.9	1.3	1.9	221	3.6	1.7	0.4
34	2.7	1.3	1.5	72	2.7	1.7	0.9	222	2.6	1.4	1.6
35	2.8	1.6	1.3	73	2.9	1.4	2.0	223	破 損		
36	2.7	1.4	1.6	74	2.8	1.7	1.2	224	3.6	1.8	1.2
37	2.7	1.3	1.5	75	2.7	1.4	2.2	225	3.5	1.3	1.8
38	2.7	1.3	1.2	76	2.7	1.3	1.5	226	3.7	1.8	1.0
39	2.7	1.3	1.6	77	2.7	1.3	1.5	227	3.6	1.7	1.7
40	2.6	1.3	1.4	78	2.5	1.3	1.3	228	3.6	1.7	1.0
41	2.3	1.2	1.2	79	2.5	1.3	2.1	229	3.5	1.9	1.2
42	2.5	1.3	1.5	80	2.9	1.3	1.5	230	3.6	1.9	1.6
43	2.6	1.3	1.6	81	2.7	1.3	1.6	231	3.7	1.6	1.6
44	2.6	1.3	1.2	82	2.8	1.4	1.6	232	5.8	2.3	2.2
〃	2.5	1.3	1.7	83	破 損			233	4.1	1.9	1.9
45	2.5	1.3	1.6	84	2.6	1.3	1.7	234	3.0	1.7	2.2
〃	2.6	1.3	1.6	85	1.9	1.3	1.4				
〃	2.5	1.3	1.6	86	破 損						

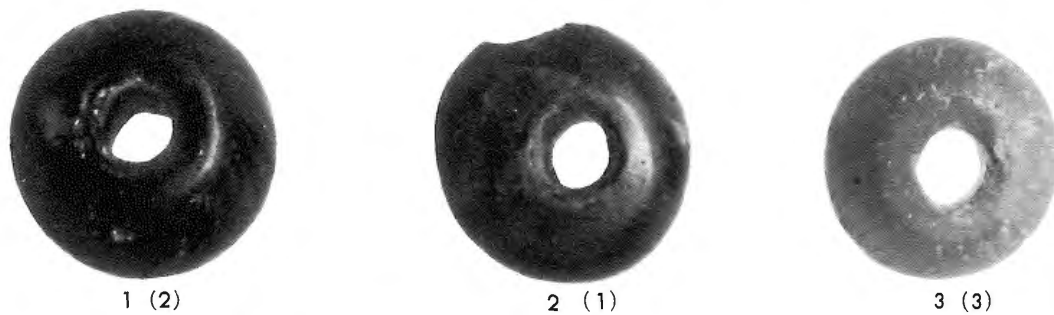
注：3号墓 : 番号1～100、221～223
 4号墓 : 番号224、225
 5号墓 : 番号226～230
 ブロック11 : 番号231
 ブロック12 : 番号232～234

第52図 琥珀、有孔礫、瑪瑙、その他の分布



凡例
●琥珀 (番号 1～4)
○有孔礫 (番号 1～2)
■瑪瑙 (番号 1、4 を図示)
つぎの 5 点については、
番号 2 (13-13グリッド)、番号 3 (13-14グリッド)、番号 5 (12-10グリッド)、番号 6 (13-11グリッド) までしかわからず、番号 7 は出土地点が不明のため図示していない。
▲その他 (番号 1～7 まで図示)
つぎの 2 点については、
番号 8、9 とも 13-11(20)グリッドまでしかわからず図示していない。

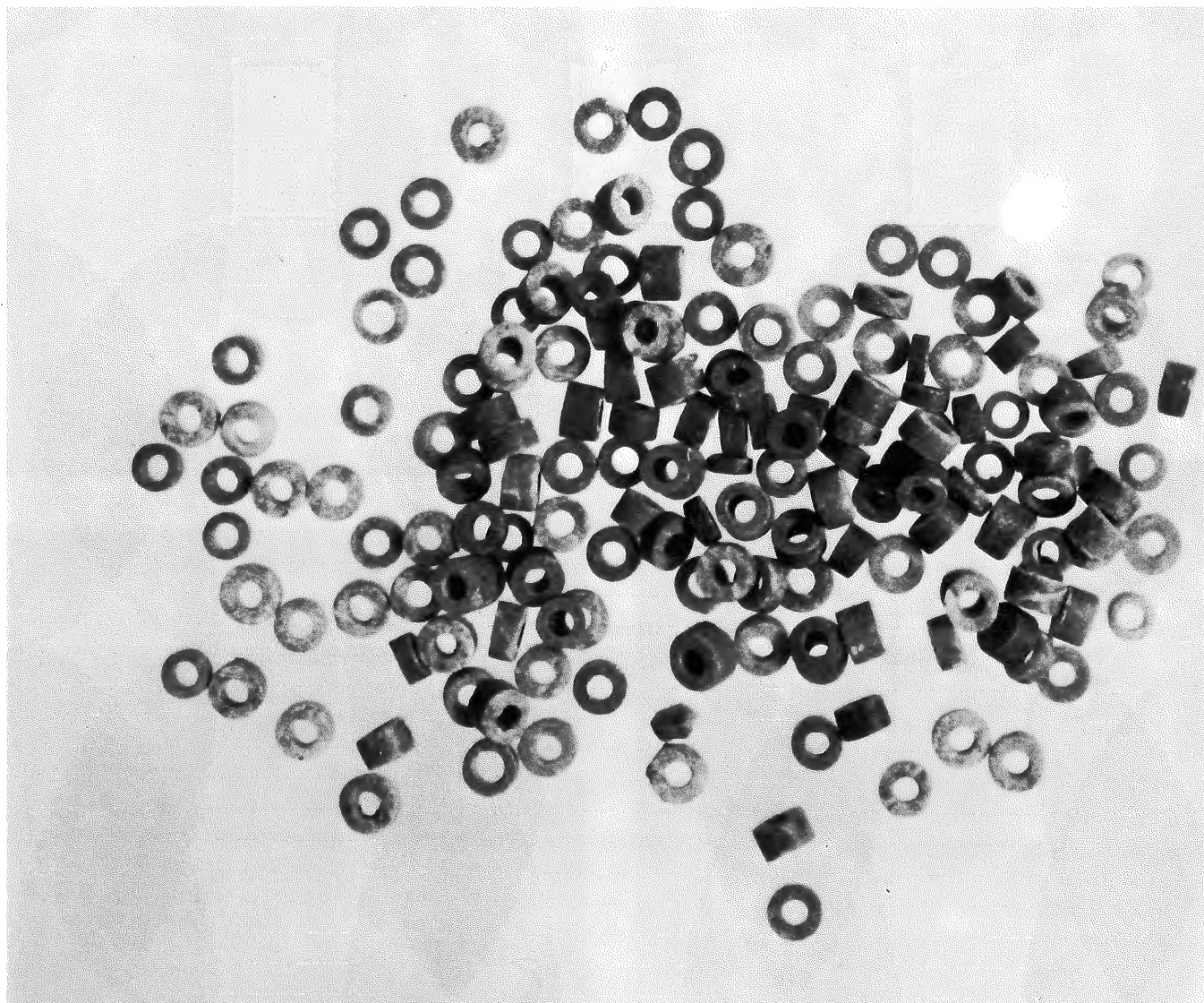
第53図 玉類



1 (2)
1 1号墓出土のガラス玉(左で径10.08mm)
()内は玉番号を示す。

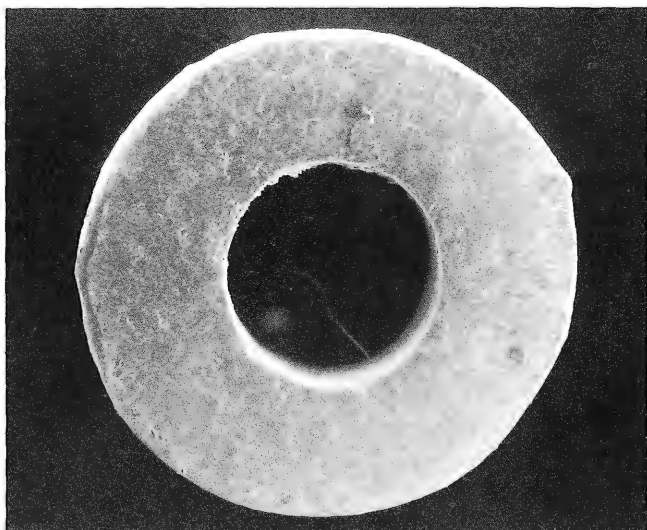
2 (1)

3 (3)

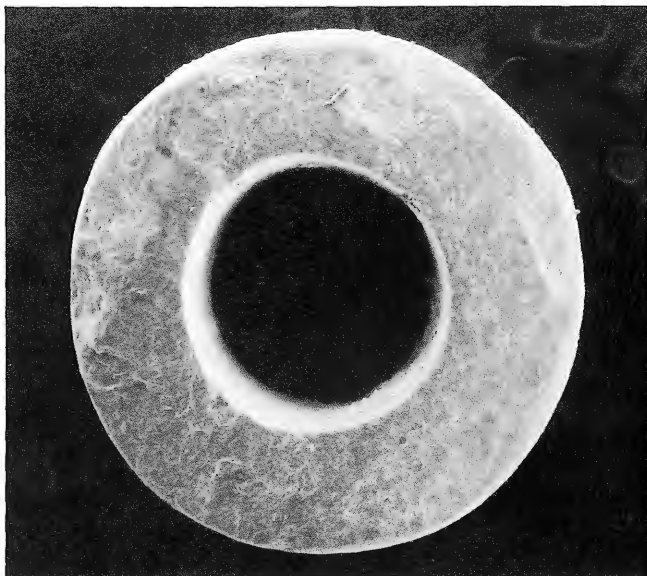


2 3号墓出土の滑石製平玉

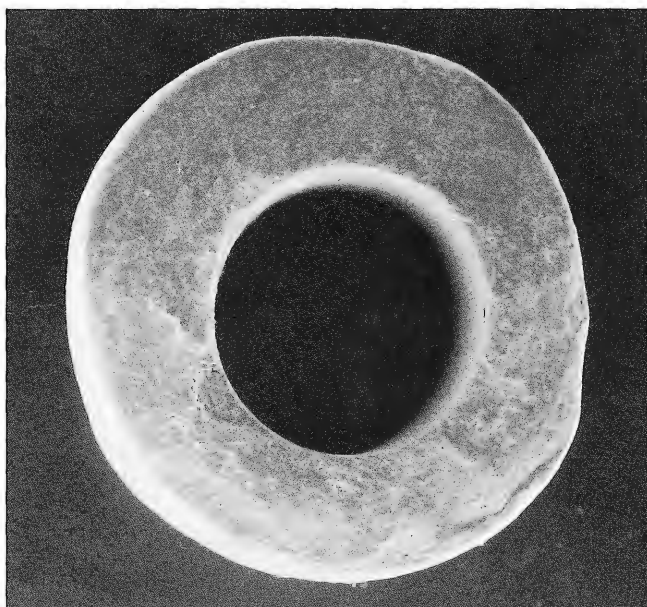
第54図 3号墓出土の滑石製平玉



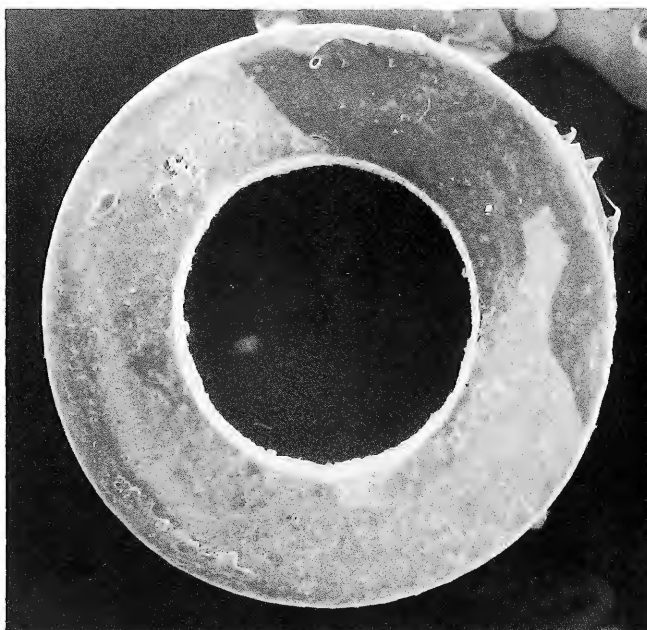
1 玉15(×35)



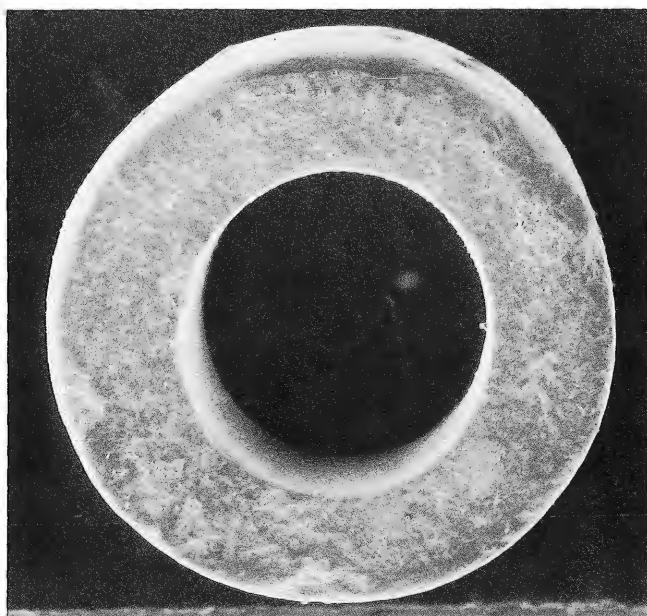
4 玉17(×35)



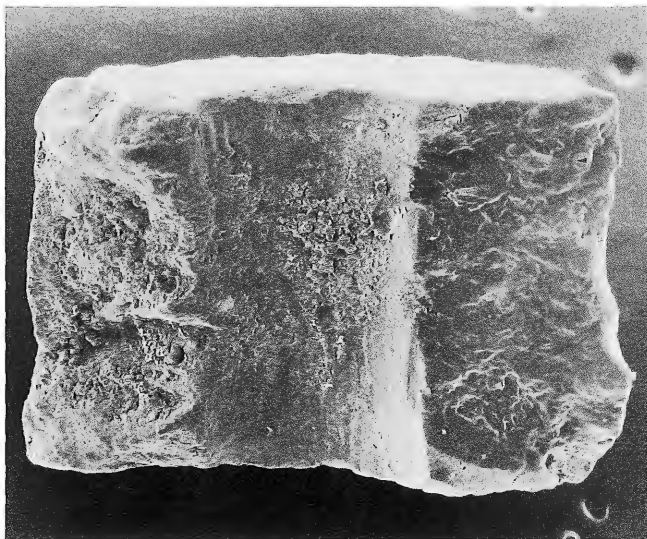
2 玉16(×35)



5 玉20(×35)



3 玉14(×35)



6 玉19(×35)

も同様に、二次的に研磨を施したものが以外に少ないことがわかっている。3については先に述べたように1類一内径が $1.3 \pm 0.1\text{mm}$ の玉が主体を占めていた。

以上を総合的に判断するなら、平玉は管玉状の素材を分割して作られた、とみなし得る。

3 有孔礫

親指大の扁平な自然礫に小さな穴がみられる装飾品である。

番号1はブロック12、番号2はブロック15から出土した(第52図)。

4 琥珀

琥珀の碎片が4点出土した。いずれも穿孔などはみられない。

番号1～3はブロック3、番号4はブロック2(焼土2)に分布している(第52図)。

5 その他

高師小僧が9点検出された(第52図)。いずれも人為的に他の遺物とともに移動・集積されたと考えられる。

Ⅱ-7 考察

1 墓地の性格

今回の発掘区では、7基の土壙墓と2個所の標式痕、2個所の火焚場が15の遺物集中区一ブロックと組み合わせになって、墓地を構成していたことがつきとめられた。しかし、墓地には溝など区画を意図した遺構は検出されなかった。

一方、この遺跡は未発掘部分、とくに南東部へと続いていることも確かであるが、発見された7基の墓を中心とするまともは、ある完結した墓域を示すもの、と考えてよいだろう(5-2-(3))。さらに、墓の形状、副葬品などから判断して、この墓地は血縁関係のもとにある集団によって営まれたものとみなされる。とくに、複数の墓にまたがる副葬品の存在は、それらの墓の形成にそれ程長期間を要したものではないことを示すとともに、被葬者間にきわめて強い結び付きがあったとことをうかがわせる。

その好例が滑石製平玉である。この副葬品のあり方は、3号墓の被葬者を中心に、4号墓、5号墓の各被葬者へ分配され、埋納されていたと解釈された(pp.40～41)。したがって、これらの3被葬者の埋葬がきわめて短期間

表26 墓とブロックの対応関係

墓名	直接関連するブロック名	間接的に関連するブロック名
Ⅰ期	3号墓	11、12
	4号墓	11、12
	5号墓	11、12
Ⅱ期	1号墓	5、6、7
	7号墓	3、6
		3、8、9、10、11、12、13、14、15
		5、7、8、9、10、11、12、13、14、15

に行なわれたことを示すとともに、この3者は強い血縁関係にあった、と判断しておきたい。

また、「土器個体番号1」のあり方からも、同じように1号墓、4号墓、5号墓の被葬者の間に強い血縁関係を想定することができる。

そして、このような血縁墓の埋葬にともなう儀礼行為の反映の一端が墓地のなかに遺存していたブロックであり、その中核をなしていたのがブロック3であった(5-5-5)。

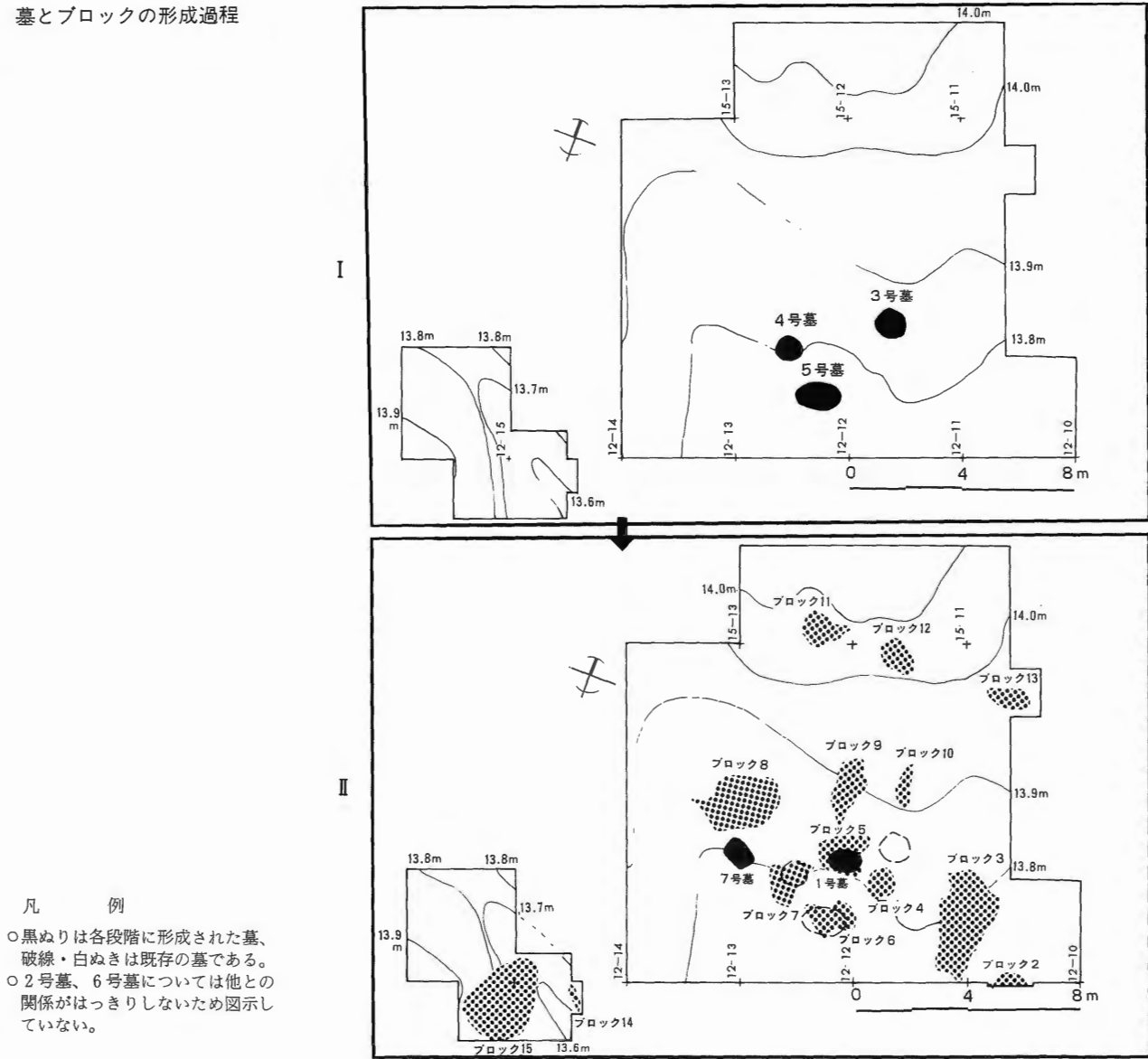
2 墓地の構造―墓とブロックの形成過程―

墓の形成は、I期・II期に大別されること(pp. 40～41)、ブロックの形成は、ブロック3を起点にそれぞれが形成されたこと(pp. 59～61)が解明された。さ

らに、ブロック3などから墓の副葬品がもたらされた類例も検出された(pp. 59～61)ので、それらにもとづき、墓とブロックとの関連を想定することができる(表26)。

それによると、I期の墓に伴うブロックはその大部分がすでに原形をとどめておらず、ブロック3などにわずかにその面影をうかがうことができるだけである。つまり、I期の墓は、副葬品として用いられていた滑石製平玉によってブロック11、12あるいはブロック3と直接、間接的に関連があったと推定される。しかし、ブロック11や12はブロック3から土器片や礫器・礫などがもたらされて形成されたと推定されるから、滑石製平玉こそ検出されなかったが、その起点もまたブロック3である可能性が強い。この推論が正しいものとする、3号墓、4号墓、5号墓の滑石製平玉の起点も、すくなくともこ

第55図 墓とブロックの形成過程



の墓域に限定するならブロック3, ということになるだろう。ブロック3は, この墓地での埋葬や儀礼的行為の中核をなす場として存在した(pp. 61~63)が, それはⅠ期からⅡ期へ引き続きみられる現象である, ということになる(第55図)。つまり, この墓地に残されていた遺物の集中区—ブロックや焼土は, Ⅱ期の墓に伴うもの, 換言すればⅡ期の埋葬に伴う儀礼的行為の一端を示す痕跡である, ということになる。先に示したブロックの性格付け(pp. 61~63)が正しいものだとしたら, 煮沸作業—共食, 器物の集積・破壊, 副葬品の準備, 廃品・廃物の廃棄などが埋葬に伴って行なわれたということになり, 墓地のなかはかなり複雑な様相を呈していたことになる。

3 墓制の系統

この墓地の墓には遺骸が遺存していなかったので, 墓壇の大きさなどから広義の屈葬を推定するにとどまる。また, 頭位も1号墓における東頭位と推定されたものが唯一の例であった。

墓に紅殻を散布する明確な事例はなく, かりうじて3号墓の墳底部に微量を確認しただけである。それに代るものと言えるか否かは議論の別れるところであろうが, 各墓に黒曜石の剥片・破片が散布されるという, 埋葬上の共通点を知ることができた。

副葬品の種類は五品目だが, 墓ごとの差が顕著である。墳底部の副葬品は玉類のみであり, 他の副葬品は墳中から墳口にみられた。とくに, 土器や礫器・礫は破片や分割品で, 完形品が用いられている例はなかった。これは, 副葬用器物の破壊行為を示すもので, 他の器物の破壊とともに墓域内で行なわれた儀礼的行為として理解できる。

いま一度, 礫器・礫を例に上げ, 破壊と副葬にいたる

経緯の概略を示そう。

① 第一次機能を示す少量(27点—約10%)の礫器がみられたこと。

これは, 墓地内で埋葬に伴って「敲く」, 「磨る」, 「火を起す」などの作業が行なわれたことを示している。

② 第一次機能を目的とする礫器をも含め, この墓地から出土した礫器や礫には火熱や炭化物の付着したものが多く, しかもそれらの大部分は分割以前に使用された状況を示していた。

これは, 埋葬儀礼に伴う礫器・礫の役割の大半が火に関連する作業—調理にあったことを示すものであり, その役割が終了した後, 大部分のものが分割されたということをはうかがわせる。

③ ブロックの分析結果は, 役割済みの礫器・礫の大部分が中心的集積場—ブロック3に集積され, それらの大半が中間的集積場や分枝集積場, あるいは廃棄場へと持ち出される, という経過を想定しうる。

④ さらに, 副葬品のなかには, ブロック3などと接合するものもみられた(礫接合資料番号9)ことから, 副葬品としての分割礫の起点が中心的集積場にあったという想定も成り立つ。

いままで示したような, この墓地における墓制の系統は, 後に示す土器の編年の位置づけなどから判断して, 後北期までの墓制(瀬川 1983)に求められる, ということに異論はないであろう。

ただ, 紅殻を散布した墓と散布量そのものが減少すること, 副葬品の品目が少なくなり(石鏃や石斧など生産具や琥珀製平玉の欠落), しかも墳底部に乏しくなるといふ現象など, 後北C式の段階と細部にわたる違いもうかがえよう。

一方, この墓地にみられた墓制は, 基本的には後続する北大Ⅱ式へと継承されて行くと考えてよいだろう。

4 墓地の営まれた時期—墓地出土土器の編年的位置について—

この墓地から出土した土器は、埋葬用はきわめて少なく、大半のものが墓地内での煮沸あるいは供膳に使用されたものであった(6-2)。これは、土器が埋葬用として特別に製作されたというより、日常品としての組成にきわめて近いものである、ということを示している。

この墓地から出土したような土器、とくにそのもつ文様要素は、「北大式土器」と命名された土器群(河野 1959)のなかで、続縄文期の後半に編年的位置が与えられる「北大Ⅰ式」(森田 1967, 斉藤 1967)の範疇に入る。

ここで、この墓地から出土した土器の特徴を再度簡単にまとめるとつぎのようになる。

① 器種は、鉢、甕、片口、注口からなり、甕や鉢などの煮沸形態の土器が主体を占める。

② 文様要素は、刺突文、隆起線文、横走・斜行・羽状縄文(RL)で、主として煮沸形態の土器に単独かあるいは併用し、施文されている(6-2)。

以上のような特徴をもつ「北大Ⅰ式」は、後北式土器の諸段階のうち、後北C₂・D式に後続する段階の型式であり(大沼 1982)、北海道全域に比較的広範囲に分布している(田才 1983)。石狩低地帯では、恵庭市柏木B遺跡第65号、第66号、第68号、第210号土壌墓(木村編 1981)、江別市吉井の沢1遺跡E-7, 13, P-210, 238など(中村・大沼 1982)、千歳市末広遺跡I P-27土壌々外の土器(大谷・田村 1982)などで類似の土器が出土している。

また、「北大Ⅰ式」土器の大きな特徴は、分布が東北地方にまでおよぶことである。もっとも、このような現象はいまのところ後北C₁式の段階から認められ、新潟

県にまで分布がおよぶ(横山ほか 1983)。ついで、後北C₂式の段階では、青森県から宮城県にかけて濃密に分布するようになる(佐藤 1986)。「北大Ⅰ式」では、このような前段階の分布圏を踏襲するが、そのなかでも青森県北部(江坂 1961, 佐藤 1976)と宮城県北部(興野・遠藤 1970, 佐藤 1976)に集中している。

以上のような分布状況は、北海道と東北とを結ぶ物質などの交流を背景とするネットワークが当時すでに存在していたことをうかがわせる。

この墓地出土の土器のうち、東北地方からの搬入品とみられるものは、「土器個体番号8」とした土師器坏である。

破片からうかがえるこの坏の形態及び製作技術上の特徴(6-2-(2))は、宮城県仙台市岩切鴻ノ巣遺跡(白鳥ほか 1974)の第Ⅱ群土器のうち、「坏BⅡd類」として分類されている坏に類似している。ここでいう第Ⅱ群土器とは、南小泉式をさしている。また、「坏BⅡd類」とは、ロクロを使用せず、体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がり、口縁部がほぼ直立するといった形態の特徴を示す坏である。器面調整は、朱塗りおよび黒色処理の施されないもので、口縁部の両面は横ナデ、体部はヘラミガキが施される。

以上のように、この墓地から出土した土師器坏は、宮城県を中心とする古墳時代中期の南小泉式に相当するということになる。したがって、それと組み合わせとなる「北大Ⅰ式」、あるいは墓地をも含む実年代は、西暦5世紀頃ということになる。

上に示した「北大Ⅰ式」に関する年代観は、かつて宮城県の研究者によって示されていた(興野・遠藤 1970, 伊東 1982)ものと大きく違いがなく、しかも前段階の土器群、後北C式が弥生時代終末の土器と共伴するという最近の調査事例(横山ほか 1983, 札幌市教育委員会編 1985など)とも矛盾しない。

5 石器

この墓地から出土した石器には、石斧をはじめとし、磨製石器は全く含まれていない。石器組成の基本は、前段階つまり後北C₂・D式に求められるだろうが、石鏃以外1次的な生産活動に直接関わる石器が欠落している点で、背後に金属製品をはじめ木製品・骨角製品などの存在を想定させるものである。

定形的石器としては有柄石鏃があげられるだけである。主体を占める石器は、黒曜石製の不定形スクレイパーである。この石器は、とくに続縄文期の加工具としてはもっとも普遍的なものだが、北大I式の段階から石器組成の主体を占めるようになり、擦文時代中期まで確実に存続・使用される（横山 1983）、いわば「伝統的な石器」である。

石核や剥片からは、定形的剥片を得る剥片剥離技術をうかがうことができなかった。石核の打面転位は頻繁にくり返され、あまり大きくない原石から数多くの不定形剥片が剥取されていた。

6 装身具

この墓地から出土した装身具には、ガラス玉、滑石製平玉、有孔礫がある。

ガラス玉の製作方法や原料分析は、今後の課題とした。北海道のガラス玉は、南西部から東部にかけて9遺跡から出土しており、恵山式、後北式の段階に相当するものである（佐藤・宮夫 1984）。この墓地出土のガラス玉もおそらくその系統上にあるものと思われ、この墓地が営まれた時期に東北地方から搬入された可能性とともに、後北C式など前代からの伝世品、ということも考慮する必要がある。

滑石製平玉の製作方法は、管玉状の素材を分割したも

のと推定された。続縄文期の滑石製の平玉や管玉の出土例は、上川管内東神楽町沢田の沢遺跡Pit-19（斉藤 1981）から平玉（1点）、江別市元江別1遺跡墓14（8点）、墓34（1点）、墓64（12点）（高橋編 1981）や同旧豊平河畔遺跡の資料（7点）（北沢 1985）あるいは、同吉井の沢1遺跡P-44（6点）（中村・大沼 1982）、石狩管内石狩町紅葉山33号遺跡包含層出土品（石橋・清水 1984）などから管玉が検出されている。しかし、これらの滑石製玉類の外径は、5.9～12.0mmで、この墓地の平玉よりかなり太い。

この墓地の平玉の外径は、寺村光晴による管玉の分類（寺村 1974）にあてはめればI型で、弥生時代の細形管玉の範疇に入る。北海道での細形管玉は、渡島管内七飯町聖山遺跡Loc.8（石本 1979）、石狩管内石狩町紅葉山33号遺跡GP-26（石橋・清水 1984）などで碧玉質の例がある。

この墓地から出土した平玉と同じような特徴を示す平玉の類例は、北海道・東北はもとより全国的にもみることができない。しかし、続縄文期には滑石が玉類の原材として用いられていること、細形管玉がすでに北海道に搬入されていることと、さらに琥珀や貝殻を原材とした平玉が普遍的に製作・使用されていることなどからみて、この種の平玉は続縄文期の北海道で、より範囲を限定するなら滑石の産地が神居古澤に代表される造山帯の西側の地域に分布するので、ほぼその地域内で製作・使用されたと考えてよいのではなかろうか。今後、続縄文期の遺跡から多くの類例が追加されることも期待されよう。

一方、これとは別に続縄文期の前半に多量に出土をみた琥珀製平玉が全く出土しなかった点、注目される。この墓地からは、ブロック3で土器片や礫器・礫などに混在して破片が4点出土しただけであり、これらには穿孔など細工を施した痕跡は認められなかった。

《引用文献》（アルファベット順）

- ▶江坂輝弥 1961 先史時代における奥羽地方北部と北海道地方との文化交流の研究 民族学研究 第26巻 第1号 pp. 31~38
- ▶北海道大学埋蔵文化財調査室編 1986 サクシュコトニ川遺跡1, 2 北海道大学
- ▶石橋孝夫・清水雅男 1984 紅葉山33号遺跡 北海道石狩町教育委員会
- ▶石本省三 1979 聖山遺跡出土の縄文式土器について 吉崎ほか編 聖山 pp. 153~172
- ▶伊東信雄 1982 縄文と隣接地域の土器 樺太の土器文化 加藤・沢編 縄文土器大成5—縄文 講談社 pp. 150~153
- ▶木村英明編 1981 柏木B遺跡 恵庭市教育委員会
- ▶北沢実 1985 旧豊平河畔遺跡出土の縄文時代の遺物 北海道考古学 第21輯 pp. 95~98
- ▶河野広道 1959 北海道の土器 郷土の科学 No. 23 pp. 27~42
- ▶興野義一・遠藤智一 1970 宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡 岩出山町教育委員会
- ▶森田知忠 1967 北海道の縄文文化 古代文化 第19巻 第2号 pp. 39~50
- ▶中村福彦・大沼忠春 1982 吉井の沢の遺跡 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第5集 北海道埋蔵文化財センター
- ▶大沼忠春 1982 縄文と隣接地域の土器 後北式土器 加藤・沢編 縄文土器大成5—縄文 講談社 pp. 127~129
- ▶大谷敏三・田村俊之 1982 末広遺跡における考古学的調査（下） 千歳市教育委員会
- ▶斉藤傑 1967 擦文文化初頭の問題 古代文化 第19巻 第5号 pp. 77~84
- ▶斉藤傑 1981 東神楽町沢田の沢遺跡発掘報告書 東神楽町教育委員会
- ▶札幌市教育委員会編 1985 K135遺跡（四丁目工区） 札幌市教育委員会
- ▶佐藤一夫・宮夫靖夫 1984 タブコブ 北海道苫小牧市植苗地区国道36号改良工事に伴う埋蔵文化発掘調査報告書 苫小牧市教育委員会
・苫小牧市埋蔵文化財センター
- ▶佐藤信行 1976 東北地方の後北式文化 東北考古学の諸問題 pp. 263~298
- ▶瀬川拓郎 1983 縄文後期〜縄文末期墓制論ノート 北海道考古学 第19輯 pp. 37~49
- ▶重松和男 1972 北海道の古墳墓について2 現在までの資料と今後の問題点 北方文化研究 第6号 pp. 37~130
- ▶清水雅男 1983 構内遺跡と保存対策 自然環境の復元 吉崎・岡田編 北大構内の遺跡2 北海道大学 pp. 14~17
- ▶白鳥良一ほか 1974 岩切鴻ノ巣遺跡 東北新幹線関係遺跡調査報告書I 宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局
pp. 161~274
- ▶高橋正勝編 1981 元江別遺跡群 江別市文化財調査報告書XIII 江別市教育委員会
- ▶田才雅彦 1983 北大式土器 北奥古代文化 第14号 pp. 20~29
- ▶寺村光晴 1974 西桔梗B₂遺跡の管玉—弥生時代文物の東北進と管玉の問題 千代編 西桔梗 函館圏開発事業団 pp. 436~459
- ▶横山英介 1983 擦文の石器 考古学ジャーナル 213 pp. 28~32
- ▶横山勝榮ほか 1983 国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書 内越遺跡 新潟県教育委員会
- ▶吉崎昌一・岡田淳子編 1981 北大構内の遺跡1 北海道大学
- ▶吉崎昌一・岡田淳子編 1983 北大構内の遺跡2 北海道大学
- ▶吉崎昌一・岡田淳子編 1984 北大構内の遺跡3 北海道大学
- ▶吉崎昌一編 1985 北大構内の遺跡4 北海道大学

編集後記

北海道大学構内のポプラ並木といえば、現在は観光名所でもある。この地域に縄文時代末期の遺跡が存在することは、埋蔵文化財調査室が以前に実施した構内一帯の第一次分布調査で判明した。調査室のメンバーがこの地点に特にふかい関心をもったのは、ここから採集されていた遺物が、いわゆる「北大式」に分類されるとおもわれるものが主体をしめていたからである。土器型式名がしめす様に、北大式土器はそのタイプサイトが北大構内の何処かにあったのであるが、詳細は不明で、かつ、その型式内容が十分にあきらかにされていたとはいえない状況にあった。それで、この仲間の良好な資料の出現がまたれていたのである。横山英介君の執筆にかかわる

本報告は、この問題の解決の一助になる資料である。ここでおこなわれた遺物の詳細な検討は、多くの興味ある結論をもたらしてはいるが、その結論のある部分については、埋蔵文化財プロジェクトチームのなかでも完全な意見の一致が得られているわけではない。特に遺跡の構造分析については、今後、同様な資料の増加とより詳細な研究そして民族学的な資料からの幅広い検討が必要であろうと考える。

こうした重要な問題提起にかんしては、各界諸氏からの御意見を是非うかがわせていただきたいと熱望するのである。

（文責 吉崎昌一）

北大構内の遺跡

5

昭和59年度

昭和62年 3 月20日発行

発行所 北海道大学

札幌市北区北 8 条西 5 丁目

編集者 吉崎昌一＋岡田淳子

デザイン 桜井雅章

印刷所 (株)北海道機関紙印刷所

札幌市北区北 6 条西 7 丁目



北大附近の赤外線カラー写真

北海道大学